島根県邑智郡石見町文化財調査報告書 第18集

基盤整備促進事業井原南地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

天蔵寺・寺の前遺跡

2004年3月

石見町教育委員会

序

石見町は農業生産の向上と、安定した農業経営を目指して、昭和40年代半ばから圃場整備事業に積極的に取り組んで参りました。その事業の一環として、井原地区天蔵寺原の圃場整備及び町道新設工事が計画され、それに伴い計画区内の天蔵寺・寺の前遺跡の発掘調査を実施しました。

石見町は遺跡の町と言われるように、多くの埋蔵文化財が所在していますが、石見町の歴史を証左する資料に乏しく、発掘調査は限られたものしか行なわれておりません。しかし、今回の発掘調査で当町の古代の一端を知ることができました。その調査の成果をここに報告いたします。

本報告書が郷土の歴史をひもとく一助となり、文化財への理解を深める資料として広く活用されますことを希望いたします。

最後になりましたが、調査や報告書作成に当たり、懇説丁寧にご指導いただいた元島根大学教授田中義昭先生、島根県文化財保護指導委員吉川正氏、島根県教育庁文化財課をはじめ、お力添をいただいた関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

石見町教育委員会
教育長　立　木　光　男

例　言

1．本書は、石見町教育委員会が町当局（農村整備課）より委託を受けて、1999年（平成11年）9月から2000年（平成12年）8月末まで実施した天蔵寺・寺の前遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は次の組織で行った。

調査主体	石見町教育委員会
調査員	大橋　覚（石見町教育委員会社会教育課文化財係）
調査補助員	岡木　誠（石見町教育委員会臨時職員）
調査指導	田中　義昭（島根県文化財保護審議委員）
	吉川　正（島根県文化財保護指導委員）
	西尾　克己（島根県埋蔵文化財調査センター）
	守岡　正司（島根県教育庁文化財課）
事務局	山本　繁義（石見町教育委員会教育長）
	立木　光男（石見町教育委員会教育長）
	天川　芳幸（石見町教育委員会社会教育課長）
	原　拓矢（石見町教育委員会社会教育課文化財係）
遺物整理	大屋由香里（石見町教育委員会臨時職員）
	坂根　記子（石見町教育委員会臨時職員）
発掘作業員	原野千恵子、石橋佐和子、大屋カズヨ、高畑　重幸、岩根　久枝
	駅場　豊子、上田　忠市、竹川　秀雄、米田　秋燈、小川フジエ
	森脇　春雄、服部　正刃、大野　友瑞、兼　節子、小笠原牟人
	大田　智史、中江　夏樹、長谷川政義

3．挿図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向である。矢印（N）も同様な方向を示す。

4．遺跡の遺構配置図の作成は大屋ハイテック株式会社に依頼した。

5．出土品の実測、浄書については下記の方々の手を煩わせた。記して負うところ明らかにし、お礼を申し上げる。

井上喜代女　福原恭子　藤原　舞　山本敦子　村田理恵

6．本書の編集は、田中義昭氏主宰のいなか舎の全面的な指導と協力をえて、大橋　覚、原　拓矢が行なった。

7．現地調査に当っては地元町民を初めとして多くの方々の支援・協力を受けた。また、駅場春喜氏他の町文化財保護審議会委員の支援をいただき、出土遺物の鑑定等については西尾克己氏、守岡正司氏に多くの教示をいただいた。ともども記して感謝を申し上げる次第である。

8．遺跡・遺構の写真は大橋が撮影し、遺物の撮影は会下和宏氏（島根大学埋蔵文化財調査センター）に依頼した。

9．本調査で出土又は採取した遺物及びこれに係る実測図・写真等は石見町教育委員会において保管している。

10．本遺跡は、当初圃場整備による記録保存として取り扱うこととしたが、調査後に寺の前地区については、その遺跡構造と出土遺物の重要性に鑑み、計画を変更して全面保存とし、町当局より追加予算を得て真砂土被覆による現地保存を行なった。ここに町当局の英断を称え、また、調整・指導をいただいた島根県教育委員会に対し厚く御礼を申し上げる。

島根県邑智郡石見町

基盤整備促進事業井原南地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

天蔵寺・寺の前遺跡

序　文

頁

第1章　調査の経緯 …… 1

1．調査に至る経緯

2．発掘調査の経過

第2章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 3

1．遺跡の位置と自然環境

2．町内遺跡の分布と調査

第3章　天蔵寺区の遺構と遺物 …… 11

1．遺構と遺物の検出状態について

2．出土遺物について

第4章　寺の前区の遺構と遺物 …… 29

1．竪穴住居址と出土遺物について

2．堀立柱建物と出土遺物について

3．その他の遺構と出土遺物

4．遺構外から出土した遺物について

第5章　まとめ …… 107

1．遺跡の立地、規模、時期

2．検出された遺構について

3．出土遺物について

4．全体として

挿図目次

第１図　石見町域と大蔵寺・寺の前遺跡位置図
第２図　調査対象地と周囲の遺跡
第３図　天蔵寺・寺の前遺跡の調査区
第４図　天蔵寺区遺構分布図
第５図　天蔵寺区出土遺物実測図（その１）
第６図　天蔵寺区出土遺物実測図（その２）
第７図　天蔵寺区出土遺物実測図（その３）
第８図　天蔵寺区出土遺物実測図（その４）
第９図　天蔵寺区出土遺物実測図（その５）
第10図　天蔵寺区出土遺物実測図（その６）
第11図　天蔵寺区出土遺物実測図（その７）
第12図　天蔵寺区出土遺物実測図（その８）
第13図　天蔵寺区出土遺物実測図（その９）
第14図　寺の前区遺構分布図
第15図　ＳＢ－01平面略図《上段》・遺構遺物検出写真《下段左上－上器出土状態、左下－全景（南上方より）》・出土遺物実測図《下段右》
第16図　ＳＢ－02平面略図《上段》・遺構遺物検出写真《下段左上－全景（東側より）、左下－かまど（東側より）、右上－全景（東側より）、右下－遺物出土状態（北側より）》
第17図　ＳＢ－02出土遺物実測図
第18図　ＳＢ－03平面略図
第19図　ＳＢ－04平面略図《上段左》・遺構遺物検出写真《下段左上－全景（南東側より）、左下－かまど、右上－全景（南側より）、右下－かまど》・出土遺物実測図《上段右》
第20図　ＳＢ－05平面略図《上段》・遺構検出写真《下段右－全景（北東側より）、左－全景（北東側より）》
第21図　ＳＢ－05出土遺物実測図（その１）
第22図　ＳＢ－05出土遺物実測図（その２）
第23図　ＳＢ－05遺物実測図・「窪地」遺構遺物検出写真《左下－「窪地」全景（北東側より）、右上－「窪地」とＳＢ－04（北側より）、右下－「窪地」内の石囲い遺構》
第24図　ＳＢ－06・07平面略図・８号・９号建物平面、断面図《上段》・遺構検出写真《下段左－東側より》・ＳＢ－06出土遺物実測図《下段右》
第25図　ＳＢ－07出土遺物実測図
第26図　ＳＢ－08・ＳＫ－02平面略図《上段左》・遺構検出写真《下段左－全景（南側より）、右－かまど煙出穴》・出土遺物実測図《上段右》
第27図　ＳＢ－09・ＳＤ－01平面略図《左上》、遺構検出写真《右最上－全景（北東側より）》・出土遺物実測図
第28図　ＳＢ－10・11平面略図《上段》・遺構遺物検出写真《下段左－全景（南西側より）》・ＳＢ－10出土遺物実測図《下段右》
第29図　ＳＢ－11出土遺物実測図
第30図　ＳＢ－12・13・14平面略図《上段》・遺構遺物検出写真《下段左－全景（東側より）、右－ＳＢ－12弥生土器出土状態》
第31図　ＳＢ－12・13・14遺構遺物検出写真《左上－全景（北側より）、左中・右上－全景（南西側より）》・出土遺物実測図

第32図　ＳＢ－15平面略図・出土遺物実測図
第33図　ＳＢ－16平面略図《最上段》・出土遺物実測図
第34図　ＳＢ－17平面略図《最上段》・出土遺物実測図
第35図　ＳＢ－18・19平面略図
第36図　ＳＢ－20・21平面略図・ＳＢ－20出土遺物実測図
第37図　ＳＢ－22・23・１号建物平面略図・ＳＢ－23全景写真（西側より）・ＳＢ－22出土遺物実測図
第38図　ＳＢ－23出土遺物実測図
第39図　ＳＤ－01平面略図・検出状態写真《右上（南側より）》・出土遺物実測図
第40図　３号建物跡平面・断面図
第41図　４号建物跡平面・断面図
第42図　５号建物跡平面・断面図
第43図　６号・７号建物跡平面・断面図
第44図　10号・11号建物跡平面・断面図
第45図　12号・13号建物跡平面・断面図
第46図　14号・15号建物跡平面・断面図
第47図　16号建物跡平面図
第48図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その１）
第49図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その２）
第50図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その３）
第51図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その４）
第52図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その５）
第53図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その６）
第54図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その７）
第55図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その８）
第56図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その９）
第57図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その10）
第58図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その11）
第59図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その12）
第60図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その13）
第61図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その14）
第62図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その15）

図版目次

図版　Ⅰ　　天蔵寺・寺の前遺跡の脊瞰
図版　Ⅱ　　１．遺跡の近景（西方より）
　　２．遺跡の遠望（西方より）
　　３．寺の前区全景（発掘前・東方より）
図版　Ⅲ　　１．天蔵寺区全景（発掘前・南方より）
　　２．天蔵寺区発掘風景（耕作土除去後）
　　３．天蔵寺区発掘風景（南西部の遺構検出作業）
図版　Ⅳ　　１．天蔵寺区東部で検出された遺構群
（左手の大型土抗ＳＫ－03）

2．天蔵寺区山手の中央部で検出されたピット群（北方より）
3．天蔵寺区ＳＫ－03
図版 Ⅴ 1．天蔵寺区ＳＫ－01
2．天蔵寺区ＳＫ－02の墳丘上に敷き詰められた石
3．天蔵寺区ＳＫ－02
図版 Ⅵ 1．寺の前区発掘風景（耕作土除去遺構確認東方より）
2．寺の前区発掘風景（耕作土除去遺構確認北東方より）
3．寺の前区発掘風景（耕作土除去遺構確認北方より）
図版 Ⅶ 1．寺の前区発掘風景（耕作土除去遺構確認東方より）
2．寺の前区ＳＢ－02（西方より）
3．寺の前区ＳＢ 01（東方より）
図版 Ⅷ 1．寺の前区密集状態で検出された土器群（ＳＢ－10．11付近）
2．寺の前区掘立柱建物跡（10号・11号・14号・15号
東北より左上の土抗＝ＳＫ－01）
3．寺の前区掘立柱建物跡（10号・11号・14号・北方より）
図版 Ⅸ 1．寺の前区掘立柱建物跡の円形柱穴の検出状況
2．寺の前区掘立柱建物跡の長方形柱穴の検出状況
3．寺の前区遺構検出後の全景（東方より人が立っているのは掘立柱建物跡３号・４号）
図版 Ⅹ 1．寺の前区掘立柱建物跡10号・11号（北方より）
2．寺の前区現地見学会（町内小学生対象説明会の風景）
3．寺の前区遺構保存作業風景（真砂で遺構を被覆する）
図版 Ⅺ 天蔵寺区出土遺物（その１）
図版 Ⅻ 天蔵寺区出土遺物（その２）
図版 ⅩⅢ 天蔵寺区出土遺物（その３）
図版 ⅩⅣ 寺の前区出土遺物（その１）
図版 ⅩⅤ 寺の前区出土遺物（その２）
図版 ⅩⅥ 寺の前区出土遺物（その３）
図版 ⅩⅦ 寺の前区出土遺物（その４）
図版 ⅩⅧ 寺の前区出土遺物（その５）
図版 ⅩⅨ 寺の前区出土遺物（その６）
図版 ⅩⅩ 寺の前区出土遺物（その７）
図版 ⅩⅪ 寺の前区出土遺物（その８）
図版 ⅩⅫ 寺の前区出土遺物（その９）
図版 ⅩⅩⅢ 寺の前区出土遺物（その10）

挿表目次

第１表 石見町内遺跡地名表
第２表 天蔵寺区出土遺物観察表
第３表 寺の前区出土遺物観察表

第1章　調査の経緯

1．調査に至る経緯

天蔵寺・寺の前遺跡は島根県邑智郡石見町大字井原地内に位置する。この一帯に農業基盤整備促進事業として圃場整備及び町道新設工事が計画された。事業実施に先立って計画地区内の埋蔵文化財の有無、発掘調査の可否等に関して町農村整備課より町教育委員会に問い合わせがあり、必要な対応を行なうこととなった。

天蔵寺区は以前の町内分布調査により須恵器が採集されたことで遺跡として認定され、『島根県遺跡目録』(島根県教育委員会刊、1978年)に「天蔵寺原遺跡」の名称で登録されていた。その後、この遺跡は『増補改訂 島根県遺跡地図Ⅱ（石見編)』(島根県教育委員会刊、1992年）では「消滅」と記載されている。また、寺の前区については平成7年の試掘調査において柱穴様ピットと弥生土器片、須恵器片が検出されて遺跡と確認され、発見届けが石見町より提出された。

以上のような経過から当初は上記2区を別個の遺跡として扱い、字名から天蔵寺原遺跡、寺の前遺跡とした。平成11年4月に寺の前遺跡の発掘調査について町農村整備課より依頼があり、協議の結果、平成11年6月から、消滅したとされる天蔵寺原遺跡遺在について再度の確認と寺の前遺跡の全面調査を町教育委員会において実施することとなった。天蔵寺原遺跡とされた一帯の地形は、遺跡名称のもととなった天蔵寺の門前に展開する緩斜面であり、その斜面から段丘状の平坦面に位置するのが寺の前遺跡とした区域である。その標高差は天蔵寺前が200m前後、寺の前面が190mで約10mとなる。こうした地形の状況から天蔵寺原遺跡と寺の前遺跡とした区域は本来一体のものとして扱うのが適当であり、本報告では両者を一つの遺跡とし、かつて天蔵寺原遺跡とした区域を天蔵寺区とし、その下方平坦部に位置する寺の前遺跡を寺の前区として記述することとした。

2．発掘調査の経過

天蔵寺・寺の前両区の発掘調査は、厳冬期を挟んで凡そ1年余の時間を要した。この間、積雪や降雨による作業中止の期間も少なからずあったが、天蔵寺区についてはトレンチによる斜面堆積層の状況を把握した後に斜面全体（約3000㎡）を地山面まで掘削した。作業は、耕作土や以前の水田造成時の盛土を重機により除去し、その下部の黒色土層（厚さ約50cm）を人力で掘り下げた。その結果、標高195m～193mの斜面中央部から北よりの箇所において多数のピット群や土坑と黒色土中より古墳時代後期から奈良・平安時代の須恵器・土師器、中・近世陶磁器類、輸入陶磁器等が出土した。

寺の前区は水田土壌を重機で除去した後に全面発掘（約4000㎡）を行い、弥生時代中期後葉の竪穴住居址、奈良時代の竪穴住居址群、大規模な掘立柱建物群を検出し、それぞれの時代の上器、さらに中・近世陶磁器類、輸入陶磁器等の遺物が大量に得られた。調査は平成12年3月をもって終了した。なお、寺の前区については平成11年9月から発掘調査に着手し、翌12年3月に一応の調査を終えたのであるが、その後、本区は石見地方において官衙的様相をもつ最大規模の古代集落址であることが重視され、その保存について関係機関との協議がなされた。幸いにも町当局が本区の文化財的意義を理解され、新たに町負担で遺構の保存処理が行なわれることとなった。これにより、保

存に必要な追加調査を12年4月から行い、同年8月末に作業を終えた。この間、諸事に忙殺されて基本的な記録作業が遅滞し、多くの遺漏箇所が生じたことは誠に遺憾であり、責任を痛感するところである。

平成12年9月から、遺構・遺物検出作業の終了をうけて寺の前区遺構検出面全体に真砂土による被覆がなされて保存が実現したが、その作業は平成13年1月に終了している。

第1図　石見町域と天蔵寺・寺の前遺跡位置図

第2章　遺跡の位置と歴史的環境

1．遺跡の位置と自然環境

島根県邑智郡石見町は県のほぼ中央に位置する。本町を囲むような形で、南に瑞穂町、東に川本町、北に桜江町、西に那賀郡旭町が隣接している。町の北東部には山陰・山陽地方を結ぶ国道261号が縦断し、中央部を県道の皆井田江津線が横断している。地形的に見れば、町中央に京太郎山があり、同山から延びる稜線によって南に於保知盆地、西に日貫山、北に日和盆地が区分され、それぞれに集落が形成されている。

この一帯は「中国太郎」とも呼ばれる江の川水系に属するが、細かくみれば町中心部は濁川上流域に当たる。この上流域に形成されている於保知盆地は平地の少ない石見山間部にあっても農業にとって比較的恵まれた地形を有し、標高150mから300mの傾斜地に約565haの耕地が開かれている。昭和40年代より行われた土地改良事業により、盆地内耕地面積の約90%以上が圃場整備の対象となり、改良工事が進められてきた。

天蔵寺・寺の前遺跡が位置する井原地区は東境を冠山（859m）の卓状山地が塞ぎ、北半には向歯無山・権現山・駒次山・長崎山の隆起山塊が平地を閉ざしている。遺跡の北を南西から北東向きに流れる井原川は、瑞芽峠（瑞穂町）を発して国道261号が走る谷を流れ下り、井原地区東の皆井田で東流する濁川に合流している。濁川は、さらに権現山と駒次山の間を大きく侵食して断魚渓の景勝地を形成し、川本町因原で江の川に注ぐ。井原の地名の由来は、その昔お湯が湧き出ところで湯源と称し、それが転じて井原となったとされている。また、遺跡の名称は井原川右岸高手にある古刹天蔵寺の前面に広がる段丘平地が「天蔵寺原」と呼称されていることから借用したものである。

2．町内遺跡の分布と調査

石見町域における遺跡の本格的な分布・発掘調査は、昭和31（1956）年邑智郡内小学校に教員として赴任された故門脇俊彦氏が行なわれた調査活動からである。その後の40年代初め頃からは石見町誌の編纂が始まり、古代史を担当された吉川正氏（島根県文化財保護指導員）による分布調査へと引き継がれていった。吉川氏は町内全域を踏査され、その成果に立って石見町の古代史を記述されている。しかし、石見町誌にも「現にこれから石見町の古代史を解明しようとしても、近世の『かんな流し』によって大部分の遺跡が破壊されていて、的確な叙述が困難な状態である。」との記述があるように、「たたら」製鉄業が盛んであった矢上地区等では古代・中世遺跡が壊滅的な状態にある。また、詳細な分布調査は矢上・中野地区において平成2（1990）年及び平成3（1991）年に行なわれただけで、未だ町内全域までは及んでおらず、課題が残っている。

遺跡の分布状況は、道路新設、土地区画整備事業などの開発により不確定な部分が残っているが、概ね矢上・中野地区を含む於保知盆地を中心に同心円状に広がっている。町内では旧石器時代に属する遺跡は未発見である。しかし、近接の瑞穂町市木地区で後期旧石器時代の堀田上遺跡が発見されたことなどから将来町域からも同様な遺跡が検出される可能性は高いといえる。縄文時代の遺跡もほとんど不明の状態にある。わずかに日貫地区出土の草創期の尖頭器があり、矢上・井原地区ではこの時代の磨製石斧が採取されている。また、断魚渓の渓谷に臨む小平地（築廻遺跡）からは縄

文後期の異形壺形土器が出土しているので縄文時代の遺跡が少なからず存在していたことが推定される。

弥生時代になると、盆地の中程を流れる濁川両岸の段丘上にいくつかの遺跡が現れている。中野地区余勢の原遺跡では前期から中期前半の土器が出土している。中期前半の遺跡は石見地方ではあまり例がなく、この遺跡の存在意義は小さくない。他には中野地区で名古山遺跡、森の下遺跡、松山遺跡、和泉原遺跡等で弥生土器が採集されている。名古山遺跡では「Ｖ」字溝の存在が確認されており、比較的規模の大きい集落が営まれていたものと思われる。同じく中野地区の中野仮屋遺跡は大正３年に銅鐸２個（扁平鈕式と突線鈕Ⅰ式）の出土で知られる。平成元（1989）年に再発掘が行なわれて銅鐸の埋納坑が検出された。井原地区では天蔵寺・寺の前遺跡で円形プランの中期住居址が発見され、この遺跡から１㎞下流の岩風呂遺跡からは太型蛤刃石斧の出土が伝えられている。中山丘陵の最北端にある清源那遺跡では斜面に営まれた後期の住居址が検出された。こうした事実は、井原川沿いに複数の弥生集落があったことを教えるものである。日貫地区では農村環境改善センター建設に伴う緊急調査で発見された湯谷悪谷遺跡が注目される。この遺跡は、日貫盆地を見下ろす高地に営まれた後期の集落跡で竪穴住居址数棟と土坑墓が検出された。その中で大型の住居址の覆土からは砂鉄系精錬滓が検出され、町内の古代製鉄の発生は弥生時代末期に遡ることが推定され、関心を呼んでいる。

古墳時代に入ると遺跡の数は急増する。中野・井原地区の境をなす中山丘陵上には弥生時代後期から古墳時代後期にかけて多数の墳墓・古墳（総数約130基）が営まれている。墳墓・古墳群は尾根単位にＡからＦの６区に分かれ、その中でＢ－１号墳は小規模な前方後方墳で主体部の箱形石棺からは方形板革綴短甲と鉄剣・鉄斧等が出土している。付近には弥生時代末期の低墳丘墓があり、当地における文配層の形成について示唆するところがある。またＤ区の16号墳も小規模な前方後円墳であることが判明している。さらにＤ区の一古墳から捩鎖文鏡が出土していたことも確認された。このように中山墳墓群は中野・井原地区における弥生時代から古墳時代の動向を物語る貴重な遺跡であると同時に石見山間部の同時期の様子を知る上でも看過できない遺跡といえる。尾根上に営まれた古墳群としては中野地区の賀茂神社背後の丘陵上にある賀茂山古墳群があり、沓井田地区の丘陵上にある実藤古墳からは鉄製鋤・鍬先が出土し、下茅場地区では台地縁に位置する下川原古墳からは大型の袋状鉄斧が発見された。これらの諸古墳はいずれも横穴式石室が採用される以前のもので、その分布から盆地内各所に古墳時代前半期の集落が存在したことがうかがえよう。事実、矢上地区では霧の湯温泉施設建設の際に丘陵の緩斜面から古式土師器が採集されている。付近に集落が存在したことを示す事実と思われる。

古墳時代後期になると町域のあちこちに横穴式石室もつ古墳が築造されている。中野地区の割田古墳は山麓斜面に造られた円墳で、長さ７m、無袖式の比較的大型の石室が内蔵され、須恵器と土師器の副葬が認められている（県指定）。この他に中野地区には段原古墳群や仮屋古墳群といった横穴式石室をもつ小規模な古墳群が存在する。同様に矢上地区には馬具等が出土した塔の本古墳や後原古墳、金田山古墳が知られ、井原地区では庄塚古墳、日和地区では城の前古墳、大畑古墳等が存在する。これらの古墳は横穴式石室を有し、須恵器を副葬する点で共通性があり、その分布も町域全体に行き渡っていることから古墳時代後期には町内に広く集落の営まれたことが推定できる。

第２図　調査対象地と周囲の遺跡

第１表　石見町内遺跡地名表

番号	名　称	種　別	番号	名　称	種　別
1	神田遺跡	集落跡	56	大の田城跡	城跡
2	茅場谷遺跡	集落跡	57	丸山城跡	城跡
3	築廻遺跡	散布跡	58	十床城跡	城跡
4	神田原遺跡	集落跡	59	高水Ⅰ鉾跡	製鉄遺跡
5	青笹遺跡	散布跡	60	高水Ⅱ鉾跡	製鉄遺跡
6	大畑遺跡	集落跡	61	高水Ⅲ鉾跡	製鉄遺跡
7	段原古墳群	古墳	62	中ノ谷鉾跡	製鉄遺跡
8	仮屋古墳群	古墳	63	原山鉾跡	製鉄遺跡
9	前竹古墳	古墳	64	智河原鉾跡	製鉄遺跡
10	塔の本古墳	古墳	65	古鉾跡	製鉄遺跡
11	後原古墳	古墳	66	新鉾跡	製鉄遺跡
12	庄塚古墳	古墳	67	大利鉾跡	製鉄遺跡
13	城ノ前古墳	古墳	68	門谷鉾跡	製鉄遺跡
14	大畑古墳群	古墳	69	田の迫鉾跡	製鉄遺跡
15	旦原一号遺跡	散布地	70	萩原鉾跡	製鉄遺跡
16	余勢城跡	城跡	71	熊山鉾跡	製鉄遺跡
17	雲井城跡	城跡	72	下城鉾跡	製鉄遺跡
18	平城跡	城跡	73	長尾鉾跡	製鉄遺跡
19	稲積城跡	城跡	74	志谷鉾跡	製鉄遺跡
20	熊ヶ峠城跡	城跡	75	野口Ⅰ鉾跡	製鉄遺跡
21	郡山城跡	城跡	76	野口Ⅱ鉾跡	製鉄遺跡
22	東屋城跡	城跡	77	毛土Ⅰ鉾跡	製鉄遺跡
23	城ヶ前城跡	城跡	78	毛土Ⅱ鉾跡	製鉄遺跡
24	仮屋銅鐸出土地	銅鐸出土地	79	檜の迫鉾跡	製鉄遺跡
25	片田遺跡	散布地	80	長崎鉾跡	製鉄遺跡
26	絹田遺跡	集落地	81	二ノ坪鉾跡	製鉄遺跡
27	ドンぜ遺跡	石槍出土地	82	三ノ坪鉾跡	製鉄遺跡
28	後原遺跡	集落地	83	田の原鉾跡	製鉄遺跡
29	東明寺城跡	城跡	84	田元鉾跡	製鉄遺跡
30	天蔵寺原遺跡（天蔵寺・寺の前遺跡）	集落跡	85	野原鉾跡	製鉄遺跡
31	茅場B遺跡	集落跡	86	駒次鉾跡	製鉄遺跡
32	一本廻古墳	古墳	87	深瀬川鉾跡	製鉄遺跡
33	田代遺跡	石斧出土地	88	鯛の助鉾跡	製鉄遺跡
34	念田山古墳	古墳	89	岩井谷Ⅰ鉾跡	製鉄遺跡
35	落ヶ遺跡	祭祀遺跡	90	岩井谷Ⅱ鉾跡	製鉄遺跡
36	割田古墳	古墳	91	岩井谷Ⅲ鉾跡	製鉄遺跡
37	中山古墳群	古墳	92	城山鉾跡	製鉄遺跡
38	弥ヶ迫遺跡	散布地	93	仏一原鉾跡	製鉄遺跡
39	加茂山古墳群	古墳	94	小深山鉾跡	製鉄遺跡
40	風呂ヶ谷遺跡	散布地	95	寄撫鉾跡	製鉄遺跡
41	要心院遺跡	散布地	96	青笹Ⅰ鉾跡	製鉄遺跡
42	余勢の原遺跡	散布地	97	青笹Ⅱ鉾跡	製鉄遺跡
43	割田遺跡	散布地	98	青笹Ⅲ鉾跡	製鉄遺跡
44	田ノ迫原遺跡	散布地	99	福原鉾跡	製鉄遺跡
45	割田古墳	古墳	100	鉄穴原鉾跡	製鉄遺跡
46	池ノ尻遺跡	散布地	101	大元谷鉾跡	製鉄遺跡
47	和泉原遺跡	散布地	102	橋宇津鉾跡	製鉄遺跡
48	源太ヶ城跡	城跡	103	草井原鉾跡	製鉄遺跡
49	牛之山城跡	城跡	104	槽ヶ谷鉾跡	製鉄遺跡
50	安養寺窯跡	窯跡	105	牟畑鉾跡	製鉄遺跡
51	日和城跡	城跡	106	久竹鉾跡	製鉄遺跡
52	浜井場瓦窯跡	窯跡	107	高尾瀬鉾跡	製鉄遺跡
53	抗ヶ打城跡	城跡	108	落合鉾跡	製鉄遺跡
54	岩風呂遺跡	石斧出土地	109	松原鉾跡	製鉄遺跡
55	土居城跡	城跡	110	一ツ橋鉾跡	製鉄遺跡

番号	名　　称	種　別	番号	名　　称	種　別
111	道平山鉧跡	製鉄遺跡	166	仮屋第二古墓	古墓
112	山の城鉧跡	製鉄遺跡	167	仮屋第一古墓	古墓
113	室原Ⅰ鉧跡	製鉄遺跡	168	ドウショウ坂古墓郡	古墓
114	室原Ⅱ鉧跡	製鉄遺跡	169	左山遺跡	散布地
115	今原鉧跡	製鉄遺跡	170	ドウショウ坂遺跡	散布地
116	滝の脇鉧跡	製鉄遺跡	171	藤迫谷５号鉧跡	製鉄遺跡
117	橋舟鉧跡	製鉄遺跡	172	藤迫谷４号鉧跡	製鉄遺跡
118	谷山鉧跡	製鉄遺跡	173	妙見社上２号鉧跡	製鉄遺跡
119	日和窯跡	窯跡	174	藤迫谷６号鉧跡	製鉄遺跡
120	中日和瓦窯跡	窯跡	175	藤迫谷３号鉧跡	製鉄遺跡
121	有安瓦窯跡	窯跡	176	妙見社上１号鉧跡	製鉄遺跡
122	湯谷悪谷遺跡	集落跡	177	駒川内鉧跡	製鉄遺跡
123	小畑谷遺跡	集落跡	178	大迫川２号鉧跡	製鉄遺跡
124	原製鉄遺跡	製鉄関係遺跡	179	大迫川１号鉧跡	製鉄遺跡
125	大原二号鉧跡	製鉄遺跡	180	藤迫谷２号鉧跡	製鉄遺跡
126	大原一号鉧跡	製鉄遺跡	181	藤迫谷１号鉧跡	製鉄遺跡
127	大原遺跡	製鉄関係遺跡	182	藤本原遺跡	散布地
128	力沢谷遺跡	製鉄関係遺跡	183	萩原１号鉧跡	製鉄遺跡
129	力沢谷二号鉧跡	製鉄遺跡	184	鹿子原１号鉧跡	製鉄遺跡
130	力沢谷一号鉧跡	製鉄遺跡	185	郡山Ｃ地点遺跡	散布地
131	力沢谷三号鉧跡	製鉄遺跡	186	郡山Ｂ地点遺跡	散布地
132	力沢谷四号鉧跡	製鉄遺跡	187	郡山遺跡	散布地
133	今原二号鉧跡	製鉄遺跡	188	行広遺跡	散布地
134	上大畑谷一号鉧跡	製鉄遺跡	189	蕎麦谷１号鉧跡	製鉄遺跡
135	上大畑谷二号鉧跡	製鉄遺跡	190	衣滝２号鉧跡	製鉄遺跡
136	ホトコロ鉧跡	製鉄遺跡	191	衣滝１号鉧跡	製鉄遺跡
137	平四郎堤上鉧跡	製鉄遺跡	192	蕎麦谷２号鉧跡	製鉄遺跡
138	上別所鉧跡	製鉄遺跡	193	蕎麦谷３号鉧跡	製鉄遺跡
139	横峰鉧跡	製鉄遺跡	194	大久保遺跡	その他
140	門谷西鉧跡	製鉄遺跡	195	今原たたら遺跡	製鉄遺跡
141	重原鉧跡	製鉄遺跡	196	小松原遺跡	祭祀跡・古墓
142	高鉄穴下鉧跡	製鉄遺跡	197	下川原遺跡	土壙墓・古墳・横穴墓
143	矢淵鉧跡	製鉄遺跡			
144	萩原二号鉧跡	製鉄遺跡	198	御蔭山たたら跡	製鉄遺跡
145	嫁が淵奥二号鉧跡	製鉄遺跡	199	清源那遺跡	集落跡
146	嫁が淵奥一号鉧跡	製鉄遺跡	200	大地ノ元遺跡	集落跡
147	大元迫鉧跡	製鉄遺跡	201	西野原遺跡	散布地
148	萩原横手一号鉧跡	製鉄遺跡	202	実藤古墳	古墳
149	萩原横手二号鉧跡	製鉄遺跡	203	吉川陣城跡	城跡
150	槇ヶ迫遺跡	散布地	204	智河原２号鉧跡	製鉄遺跡
151	反原遺跡	集落跡	205	鬼の木戸鉧跡	製鉄遺跡
152	丑原二号遺跡	散布地	206	津和野奥筋往還	街道跡
153	中原遺跡	散布地	207	浜田三次往還	街道跡
154	鳥居の段一号遺跡	散布地			
155	鳥居の段二号遺跡	散布地			
156	余勢遺跡	散布地			
157	坂本屋遺跡	散布地			
158	松山遺跡	散布地			
159	松山上遺跡	散布地			
160	高野屋遺跡	散布地			
161	森ノ下遺跡	散布地			
162	名子山遺跡	散布地			
163	左山古墓	古墓			
164	大元迫遺跡	散布地			
165	槇ヶ迫上遺跡	製鉄関係			

また、下川原遺跡と湯谷懇谷遺跡では横穴墓も発見され、前者では矢筒の一部が出土して注目された。異色の遺跡として上げるべきは矢上地区の落了遺跡である。この遺跡は濁川左岸の丘陵斜面にあり、多数の上師器・須恵器と手捏土器や滑石製模造品が掘り出されており、古墳時代の祭祀遺跡として貴重な存在といえる。

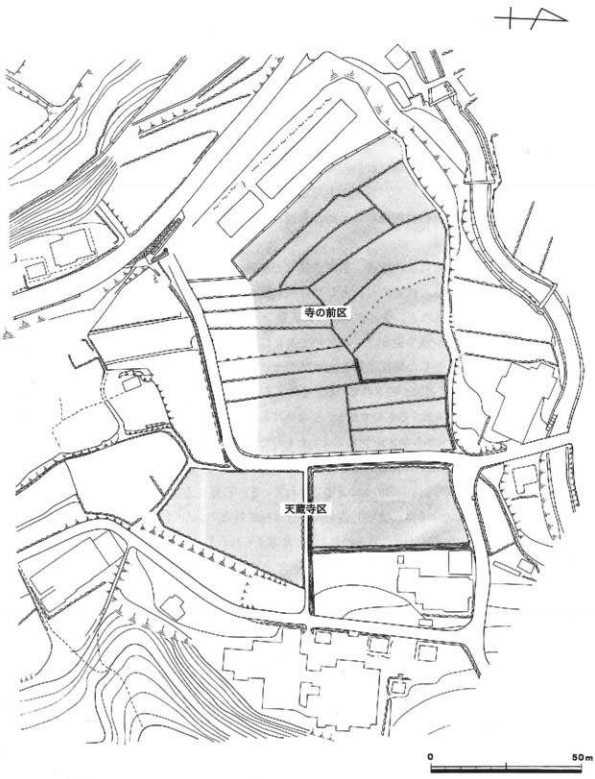
奈良・平安時代の遺跡としては円面硯出土の中野地区池ノ尻遺跡がまず上げられる。濁川左岸の低地に立地する遺跡で、その性格が問題となろう。井原川沿いに位置する天蔵寺・寺の前遺跡は奈良時代を中心とする集落遺跡で竪穴住居址や大型の掘立柱建物跡が検出されている。詳細は以下に報告するところである。他にも濁川・井原川沿いの低段丘面では奈良時代前後の須恵器片が採集された遺跡も多く、今後、古代集落遺跡の発見例が増加することは十分予測されるところである。例えば、井原地区の大地ノ元遺跡では斜面に営まれた小規模な竪穴住居址5棟からなる集落跡が発見されているが、こうした小集落が盆地のあちこちに存在したのであろう。町域外になるが、近接する旭町重富遺跡でも奈良時代前後の集落跡が発掘されており、この時代に中山間地の開発が大いに進捗したものと思われる。

中世以降の遺跡としては、山城跡、製鉄遺跡などが確認されている。山城跡の立地は、概ね尾根を削平して郭を形成する。代表的な例として井原地区の稲積城跡、雲井城跡、中野地区の源太ヶ城跡、余勢城跡等が上げられる。後述するように天蔵寺・寺の前遺跡からは中世の遺物が多く出土し、その中には輸入陶磁器や風字硯が含まれていてここに中世土豪の館的集落が存在したことをうかがわせている。今後、こうした集落遺跡と山城跡をセットで捉えていくことが必要であろう。

町内には至る所に製鉄遺跡が残されている。その多くは斜面を「L」字状に削平して平坦面を築き、そこに製（精）錬炉を構築するものである。その他にも鉄穴流しに関する溝が見られる遺跡もある。こうした製鉄遺跡は古代末から中・近世に営まれたものであり、一部近代に操業されたたたら跡も存在している。日貫地区で発見された福原たたら跡は上下2段に6基の小舟を築いた大規模な床釣り構造をもつ「高殿たたら」で江戸時代中頃のものと推定されている。石見地方を代表する近世たたら跡の一例といえる。また、先述したように、盆地北西部の山丘は砂鉄採取のかんな流しによる地形変化が著しく、原始・古代から中世の遺跡は相当数失われたことが考えられるところである。こうした事情は、いずれにしても、当地が石見地方有数の鉄生産地であったことを物語るものに他ならない。

参考文献

石見町役場刊行『石見町誌』上巻　1972年
島根県教育委員会編『島根県遺跡目録』1978年
石見町教育委員会編『石見町の遺跡』1983年
松本岩雄・吉川　正『福原たたら跡調査報告書』『島根県生産遺跡分布調査報告書』1984年
島根県教育委員会編『島根県遺跡地図II（石見編）』1988年
石見町教育委員会編『中山古墳群発掘調査報告書－第3次－』1989年
田中義昭・三宅博士『島根県邑智郡石見町中野仮屋解釋出土地の調査』『山陰地域研究（伝統文化編）』7、1991年島根大学
石見町教育委員会編『町内遺跡群細分布調査報告書Ⅰ・Ⅱ』1991～1992年
島根県教育委員会編『増補改訂島根県遺跡地図II（石見編）』1992年
石見町教育委員会編『中山古墳群　－平成5年度実態調査概要報告書－』1994年
中田健一他『石見町下川原墳墓群の調査』『島根考古だより』4号、1995年 島根考古学会
石見町教育委員会編『一般県道皆井田江津線改良工事事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書 清源那遺跡』（石見町文化財調査報告書）第16集）1998年
石見町教育委員会編『一般県道皆井田江津線改良工事事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書 大地ノ元遺跡』（石見町文化財調査報告書）第17集）1999年



第3図　天蔵寺・寺の前遺跡の調査区

第3章　天蔵寺区の遺構と遺物

1．遺構と遺物の検出状態について

（1）概況：傾斜部の上方（道路・天蔵寺住宅線の東側から天蔵寺前道路の間）の地山面からは円形と方形の土坑状の落ち込み、「凵」字状の竪穴遺構、柱穴状のピット約25個を検出した。また、調査区域の東側中央部・標高最高部付近でも約15個の柱穴様ピットを検出している。遺物の多くは発掘区域南よりの黒色土中から出土した。この付近でも2個のピットが確認された。

（2）遺構：「凵」字状の遺構は東（高）側壁が緩い円弧をなし、西（低）側の壁と底面が欠われている。規模は南・北壁間隔が約4m。本来は略方形の遺構であったと考えられるが、西側が黒色土中に掘られていたため検出ができなかったとも思われる。この遺構が竪穴住居址である可能性は低いと判断した。

円形（SK－01、03）と方形（SK－02）の土坑は古墳と思われる。SK－01は径1.2mで、断面がやや袋状ピットのように上方がすぼまる気配を見せている。あるいは、貯蔵穴かとも思われるが断定はできない。SK－03は浅い皿状で覆土中に拳大の角礫が多く含まれていた。SK－02では、幼児頭から拳程度の大きさの角礫と山石が方形墳丘状に坑の上に整然とした状態で敷き詰められ、その下部に底面が平坦で四壁がきちんと直立する穴（一辺約2.2m）が検出された。この遺構も古墳と考えられる。これら3者に共伴遺物は無く、時期は不明である。

柱穴様のピット群は北側の一群と東側中程の一群の2グループがある。径20～60cm程度。その分布状態に規則性が認められず、どのような建物に伴なう遺構かは判断できない。

2．出土遺物について

天蔵寺区からは発掘区域の南側を中心に多くの遺物が出土している。これらは弥生土器、土師器、須恵器、中・近世陶磁器類が主で、包含された土層から現在の天蔵寺境内付近の平坦部より転落・移動してきたものと考えられる。以下、各土器・陶磁器類について説明を加える。

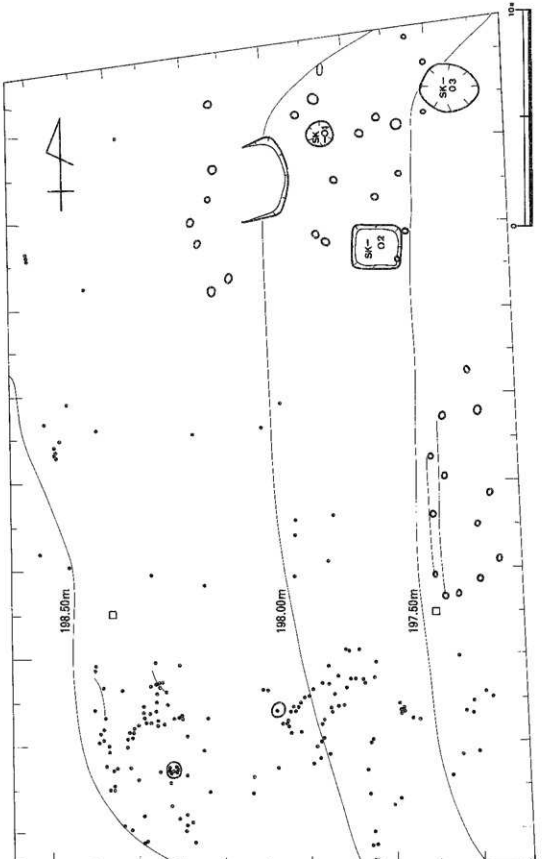
（1）弥生土器（第5図1～2、図版XI）

1は甕。緩く外反する口縁の端部が少し上方に拡張されている。口縁全体は外傾し、頸部は緩く湾曲。口縁外面には3条の太い並行沈線が巡る。内面頸部以下ケズリ。V－1か2と見る。

2も甕。口縁部が複合状をなし、頸部は弓状に屈曲している。肩部は「なで肩」。口縁部には3条の並行沈線、頸部下には板状工具の端部を連続的に押し付けた「ノ」字状の連続刺突文が施される。内面は頸部以下ケズリ。V－2であろう。

（2）土師器（第5～6図3～24、図版XI）

3～12は甕。3～9は頸部から口縁部にかけて大きく「く」字状に外反する。調整は、外面の口縁部～頸部ヨコナデ、5、6以外は体部タテハケのちナデ、内面の口縁部はヨコナデ、頸部～体部ケズリのちナデである。6は頸部下に並行沈線が施される。以上の甕は比較的器壁が薄く、器形からも古墳時代の土師器と考えられる。10～12は口・頸部の形状が古墳時代とした甕とは異なる。10、12は小さく湾曲、11は口縁部が外に小さく折れる。体部も膨らみがほとんど認められない。調整は



第4図　天蔵寺区遺構分布図

10、12が外面で口縁部ヨコナデ、頸部以下はハケ、ナデ、内面の口縁部～頸部ヨコナデ、体部ケズリである。

13、14は坏。13はやや深めの坏（椀）で外面にはハケ目が残る。14は須恵器蓋坏の坏と同形で口縁部に低く内傾する蓋受けの立ち上がり部がある。内面はウルシと見られるペースト状の顔料が付着していた。いずれも古墳時代後期に属すると思われる。

15、16は土師質土器の鉢。時期は中・近世と思われる。15は擂鉢で体部が逆「ハ」字状に開き、口縁部が肥厚している。調整は外面ナデ、内面はナナメハケのち4条以上の擂目を施す。16は片口の鉢で体部が逆「ハ」字状に大きく開き、口縁部が幅広い突帯状に造られる。調整は口縁部外面に2条の凹線状の溝、体部5条の波状文、体部はナデのち指ナデ。内面はナデのち擂目のち指ナデ。17は擂鉢の底部片。

18、19は中世の坏の底部。外面には回転糸切り痕、内面強いナデ。

20～23は甕の把手。奈良時代頃か。牛角形のものである。

24は火格子、通風孔が残っている。時期は不詳。

（3）須恵器（第7～9図25～63、図版XI・XII）

須恵器は出土土器中でも量が多い。時期的には古墳時代後期から奈良・平安時代のものが含まれる。

25、26、28、29は蓋坏の蓋と身である。蓋は口径が小さいが、天井はまだ高目。7世紀前半であろう。身はやや浅目だが、蓋受けは斜目上方に突出し、立ち上がり部も内傾するが、高さがある。6世紀末から7世紀初の土器であろう。27は身の形態が蓋に逆転した例。口径が小さく、天井頂部には宝珠形のつまみが付けられていたと思われる。31、32はこのタイプの蓋とセットになる身である。7世紀前半から中頃の土器であろう。33～36は奈良・平安時代の坏と蓋である。28は輪状つまみが付く扁平な蓋で口縁部端に垂直面がある。8世紀後半頃か。34、36は高台が底部縁より少し内側に付く。35にはきれいな回転糸切り痕が見られる。9世紀後半から末の頃と思われる。

37～53は甕の口縁部と体部の破片である。38、40、41は頸部が「く」字状に強く屈折している。37、39も同様の形状を示すものであろう。口・頸部は回転ナデ仕上げ。これらは奈良時代に属すると考えられる。42は外反度の強い口縁部。43～45は直立状の口・頸部で45は体部が張り出さない器形である。石見空港大溢遺跡Ⅲ区の須恵器に類品がある。いずれも奈良時代後半頃のものと考えられる。46～53は体部片。外面には並行する叩き目、内面には同心円状の当て具痕のあるもの（47）、重弧文状のもの（46、49、50、52）、車輪か花弁状のもの（51、53）が識別できる。同心円状のものは古墳時代、重弧文状と花弁状のものは奈良時代とそれ以降の甕かと思われる。

54、56は甕か深鉢状の器種が考えられる。外面には並行叩き目、内面は54が重弧文、56が車輪状の当て具痕をもつ。56は丸底を呈する。55も外面に並行叩き目、内面は同心円の当て具痕をナデ消す。62は鉢。頸部が小さく「く」字状に屈折している。類品が江津市久本奥窯跡の北側斜土内から検出されている。奈良時代後半頃のものと考えられる。

57、58、59は壺であろう。57は外反する口縁部で端部外面に狭い平坦面がある。58は直口壺。口縁内面の端部が片刃状をなし、その下に浅い段が見られる。これも久本奥窯跡北側斜土出土品に類例がある。60は無頸壺で体部が算盤玉状に膨らむ。63の高坏や64の提瓶。65のはそう胴部と相似た

時期、すなわち古墳時代後期か末期が考えられる。61は高台付の壷の体部片。石見空港大溢遺跡Ⅰ区出土の高台付壷と類似する。奈良時代後半頃のものである。

（4）中国製陶磁器類（10図66～82、図版Ⅻ）

66～71は青磁碗。67は龍泉系。口縁部片で片切り文の先端が認められる。68、70も龍泉系。口縁部に鎬蓮弁文が見られる。71は龍泉系碗の底部。67以外は中世後半期のものである。72は青磁盤の口縁部片。73～76は白磁。73、75、76は碗である。75は玉縁口縁。これらは、いずれも平安時代末から鎌倉時代にかかる頃のものと思われる。74は皿。体部が湾曲して開き、口縁部は小さく外反する。高台は高目で垂直に付く。中世末のもの。

77～81は青花。77～79は皿。77、78は口縁部が小さく外反し、端部が尖る。79は直線的に立ち上がる体部・口縁部で端部が尖っている。内面に複線の斜格子文が帯状に付けられる。景徳鎮系。80も景徳鎮系の青花碗。81は青花の小皿。景徳鎮系で外面底部に「大明年製」の銘文がある。82は藍彩の小皿である。以上の青花等は16世紀を中心とした時期のものと思われる。

（5）国産陶磁器類（10～13図83～135、図版Ⅻ）

83～87は備前系の擂鉢。83～85は口縁部が少し肥厚し、内面に5条一単位の擂り目が一定の間隔を置いて付けられている。備前ⅣAからBに相当すると思われる。86、87も備前系擂鉢の底部である。88は把手の破片で同じく備前系壷に付けられていたものであろう。以上の備前系陶器類は14世紀～15世紀頃に時期比定できる。

89～95は唐津系の陶器類である。89は天目茶碗。90、91は碗の底部。92は絵唐津の片口碗。93も絵唐津で皿。94は盤。95は擂鉢。口縁部が折り返しの突帯になっている。以上の唐津系は16世紀末頃から17世紀頃と思われる。

96～109は伊万里系の磁器類である。96は蓋で口縁内面に四方襷文が巡る。97～103は碗の破片。97は外面に網目文が見られる。105、108は皿片。伊万里系の時期は近世とする。

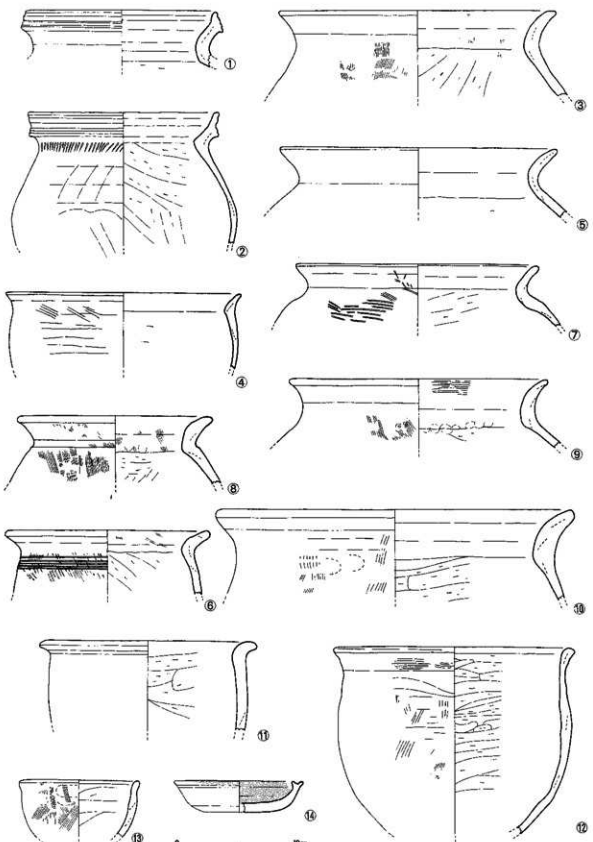
110～116・119は肥前系磁器類。114～116は擂鉢の口縁部、体部の破片。

117、118は東播系の鉢の口縁部。120は瀬戸美濃系の瓶子の肩部分片。時期はやや溯って13世紀後半期と考えられる。122～134は近世の陶磁器類である。碗・皿・鉢・擂鉢が見られる。135、137、138、139は瓦質土器類である。135は擂鉢片で口縁端部が内側に肥厚している。137は鍋の口縁部片。同じく口縁端部が肥厚し、頂面に浅い窪みがある。138も鍋片。136は土師質の擂鉢片。

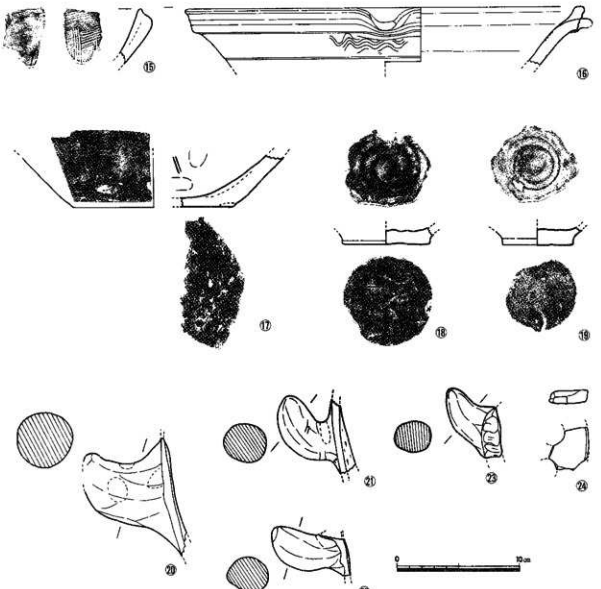
（6）その他の遺物（第13図140～147、図版Ⅻ）

140、141は円面硯片。140は脚部が外に張る。141は海部が深く、脚は細い。外面には緑色の釉が掛かっている。いずれも須恵質。142は石製の鉢。口縁部が薄く突帯状に仕上げられている。143は磨り石。144～147は製鉄関連の遺物。144は羽口片。145は含鉄滓。146は鉄以外の金属滓。147は塊形滓である。

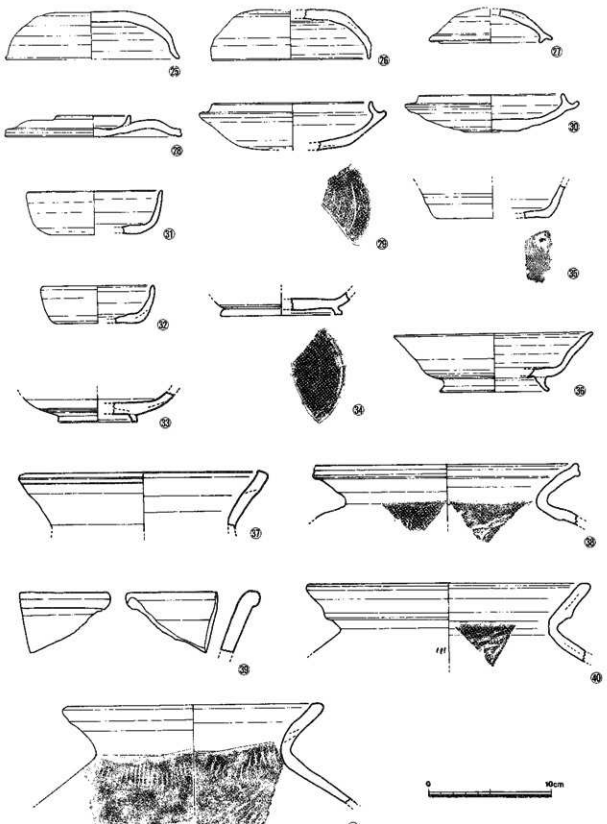
天蔵寺区において出土した代表的な遺物について述べたが、これらの中でも中国製陶磁器類の存在やその他の遺物中で硯や製鉄関連遺物が見られたことは遺跡の性格を考える上で注意すべきことであろう。



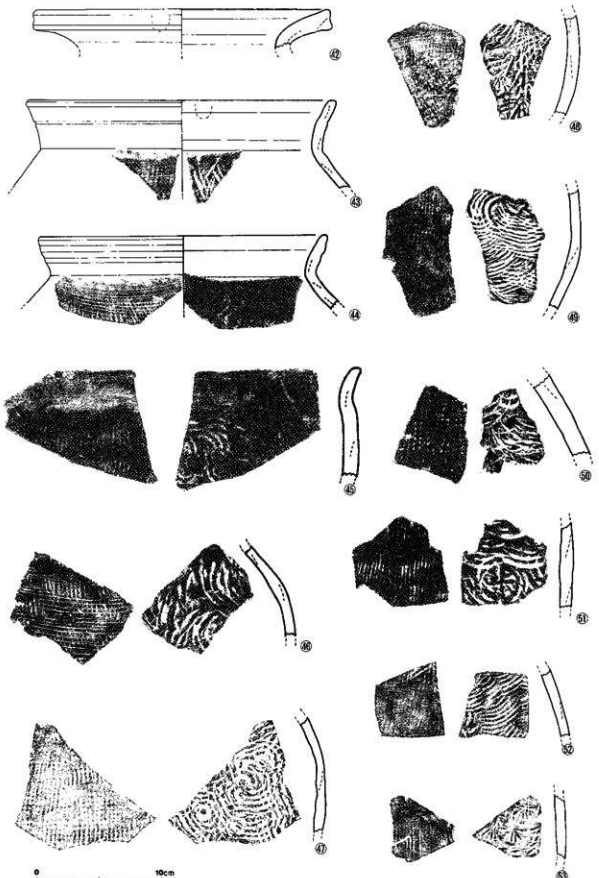
第５図　天蔵寺区出土遺物実測図（その１）



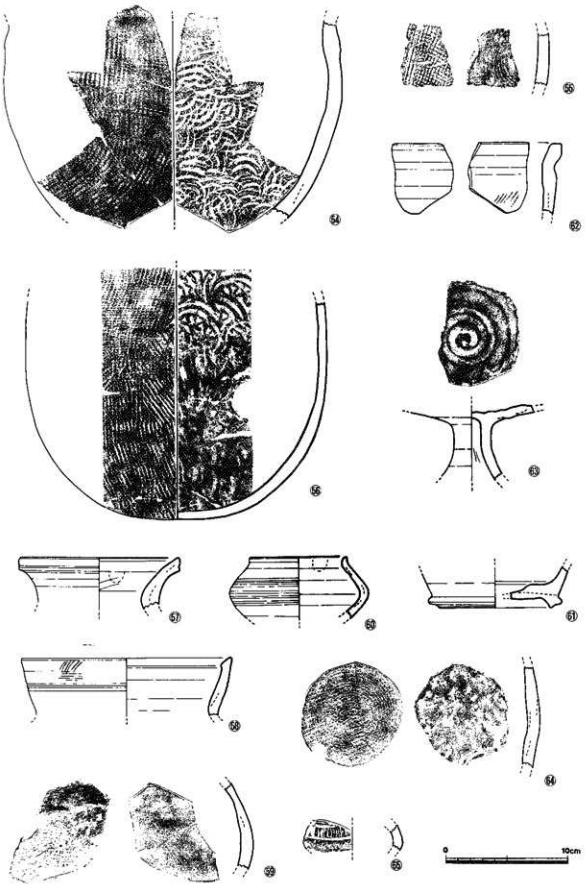
第6図　天蔵寺区出土遺物実測図（その2）



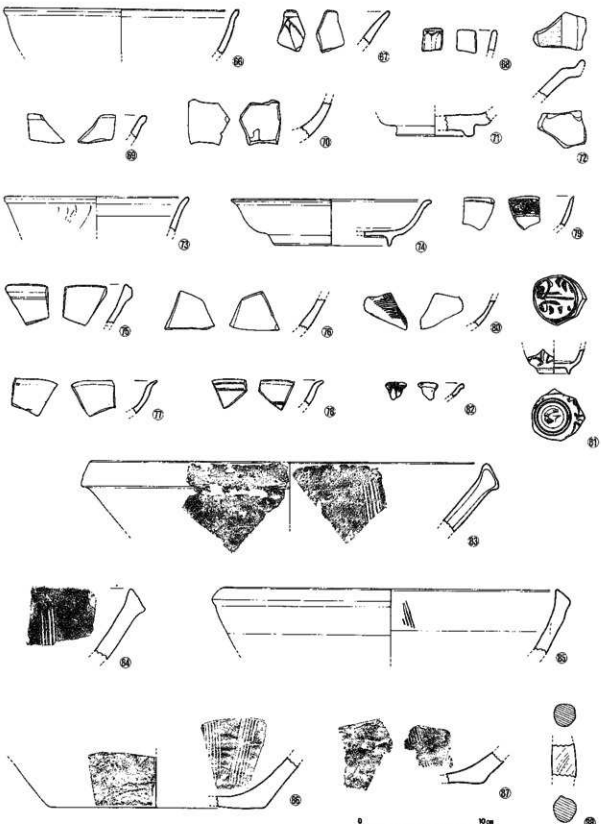
第７図　天蔵寺区出土遺物実測図（その３）



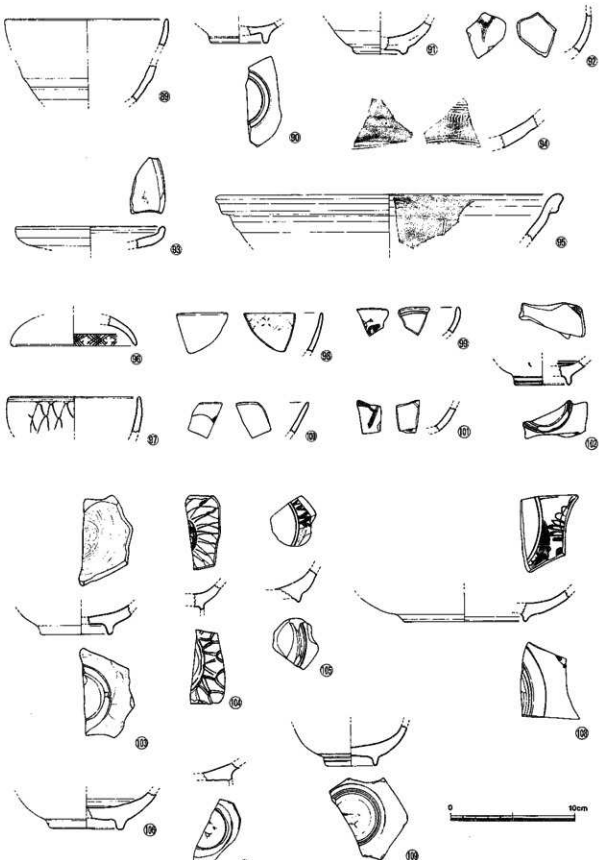
第8図　天蔵寺区出土遺物実測図（その4）



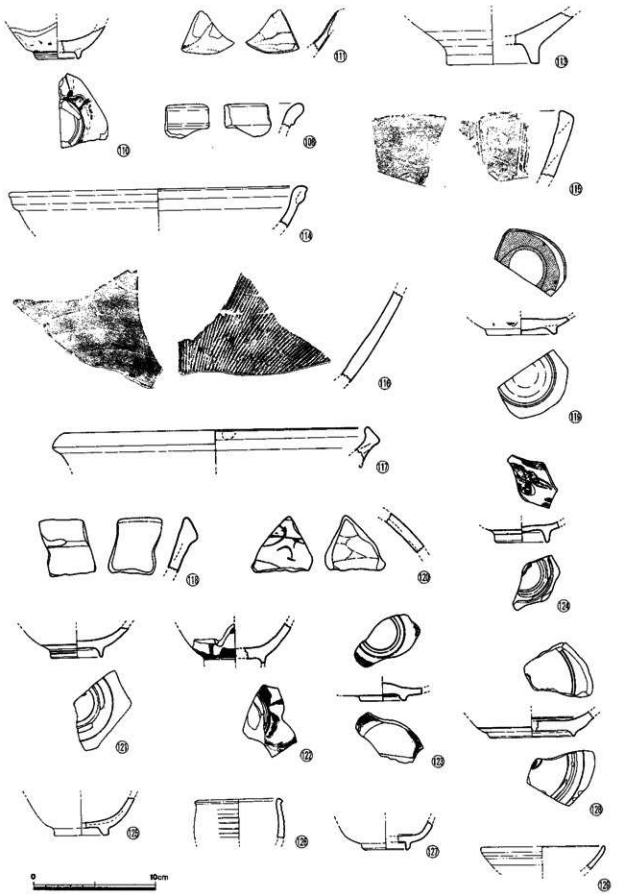
第９図　天蔵寺区出土遺物実測図（その５）



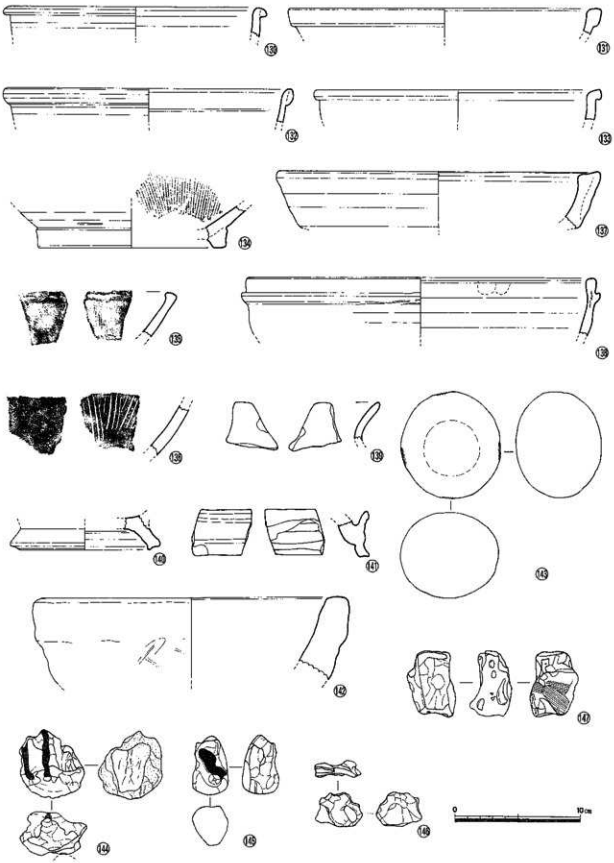
第10図　天蔵寺区出土遺物実測図（その6）



第11図　天蔵寺区出土遺物実測図（その7）



第12図　天蔵寺区出土遺物実測図（その８）



第13図　天蔵寺区出土遺物実測図（その９）

第2表　天蔵寺区出土遺物観察表

挿図図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	炭 (弥生土器)	16.0	—	—	外：口－3条の平行沈線のちナデ 頸－ナデ 内：口－ナデ 体－ケズリ	にぶい黄橙色	～3mm 程度の砂粒を含む	良好	V－2
2	炭 (弥生土器)	16.0	—	—	外：口－3条の平行沈線 頸－連続刺突文 体－ナデ？ 内：口　ナデ 頸～体上－ケズリ 体中－ケズリのちナデ	褐灰色	～3mm 〃	〃	V－1か2
3	炭 (土師器)	23.0	—	—	外：口～頸－ヨコナデ 体－タテハケのちナデ 内：口－ヨコナデ 頸～体　ケズリのちナデ	浅黄橙色	～3mm 〃	普	古墳時代
4	炭 (土師器)	17.6	—	—	外：口－ヨコナデ 頸－ナナメハケ 体－指ナデ 内：口～頸－ヨコナデ 体　ケズリ	外：黄橙色 内：浅黄橙色	～3mm 〃	やや不良	風化　古墳時代
5	甕 (土師器)	23.0	—	—	外：ヨコナデ 内：口～頸－ヨコナデ 体上－ケズリ	浅黄橙色	～3mm 〃	〃	風化　古墳時代
6	甕 (土師器)	16.6	—	—	外：口－ヨコナデ 頸－4条の沈線 体上－ハケのちナデ 内：口～頸－ヨコナデ ハケ 体上－ケズリ	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	～4mm 〃	良好	古墳時代
7	甕 (土師器)	20.2	—	—	外：口～頸－ヨコナデ 体　ハケ 内：口　ヨコナデ 頸～体－ケズリ	にぶい褐色	～3mm 〃	やや不良	古墳時代
8	甕 (土師器)	15.6	—	—	外：ハケのちナデ 内：口～頸－ハケのちナデのち指圧痕 体－ケズリ	橙色	～3mm 〃	良好	スス付着　古墳時代
9	甕 (土師器)	21.6	—	—	外：口～頸－ヨコナデ 体－ハケのちナデ 内：口　ヨコナデ 頸－指圧痕 体－強いナデ	外：にぶい赤橙色 内：にぶい黄橙色	～5mm 〃	やや不良	古墳時代
10	甕 (土師器)	30.0	—	—	外：口－ヨコナデ 頸～体－ハケのち指圧痕 内：口～頸－ヨコナデ 体－ケズリ	外：浅黄橙色 内：橙色	～2mm 〃	良好	
11	甕 (土師器)	18.0	—	—	外：口　ヨコナデ 体－ハケ 内：口－ヨコナデ 体－強いナデ	浅黄橙色	～2mm 〃	やや不良	風化
12	甕 (土師器)	20.0	—	—	外：口～頸－ヨコナデ 体－多方向のハケのちナデ 内：ケズリ（入念）	にぶい黄橙色			スス付着
13	埦 (土師器)	10.0	—	—	外：ハケのち指ナデ　指圧痕 内：指ナデ（ヨコ）	にぶい黄橙色	～2mm 〃	良好	古墳時代後期
14	坏 (土師器)	10.8	2.55	—	外：ナデ 内：ウルシ塗布	外：にぶい橙色 内：灰褐色	密	やや不良	古墳時代後期
15	擂鉢 (土師器)	—	—	—	外：ナデ 口縁－浅い溝 内：ナナメハケのち4条以上の擂目	外：灰黄褐色 内：褐灰色	～1mm 程度の砂粒を含む	良好	
16	片口 (土師器)	32.0			外：口－2条の凹線状の溝 体－5条の波状文　1条の凹線 内：ナデのち指ナデ	にぶい黄橙色	～2mm 〃	〃	中世
17	擂鉢 (土師器系)	—	—	13.0	外：体－ナデのち指ナデ　指圧痕 内：ナデのち擂口のち指ナデ　指圧痕	外：にぶい黄橙色 内：暗灰黄色	～3mm 〃	〃	
18	坏（底部） (土師器)	—	—	7.0	外：底－回転糸切り痕のちナデ 内：強いナデ	浅黄橙色	～1.5mm 〃	やや不良	金雲母　中世
19	坏（底部） (土師器)	—	—	5.8	外：底－回転糸切り痕 内：強い回転ナデ	明黄褐色	～2mm 〃	〃	中世
20	把手 (土師器)	—	—		牛角状の把手　ナデ　指圧痕	橙色	～1.5mm 〃	良好	奈良時代（？）
21	把手 (土師器)	—	—	—	牛角状把手　ナデ　工具痕	にぶい橙色	0.1mm～ 〃	〃	奈良時代（？）
22	把手 (土師器)	—	—	—	牛角状把手　ナデ	浅黄橙色	～1.5mm 〃	普	奈良時代（？）
23	把手 (土師器)	—	—	—	牛角状把手　ナデ	橙色	～1mm 〃	良好	奈良時代（？）
24	火格子 (土師器)	—	—	—	近風孔 外：ナデ 内：ナデ	にぶい橙色	密	〃	金雲母
25	蓋 (須恵器)	14.0	3.8	(天井径) 8.5	外：回転ナデ 底－回転ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ	灰色	～2mm 程度の砂粒を含む	〃	7c前半

挿図図番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	法量(cm) 底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
26	蓋(須恵器)	13.0			外：大ーケズリのちナデ 体ー回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～3㎜ 程度の砂粒を含む	良好	7ｃ前半
27	蓋(須恵器)	10.0	－	－	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	密	〃	7ｃ前半
28	蓋(須恵器)	14.2	1.7	7つまみ径 6.1	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：灰黄褐色 内：灰色	～2㎜ 〃	〃	貼り付け脚状つまみ 8ｃ後半 外：自然釉（薄） 内：温付着
29	坏(須恵器)	15.0	－	－	外：底部付近ーケズリ 内：体ー回転ナデ 底　回転ナデのち指圧痕	灰褐色	～2㎜ 〃	〃	6ｃ末～7ｃ初
30	坏(須恵器)	14.0	3.0	－	外：体ー回転ナデ 底　ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ	灰色	～3㎜ 〃	〃	
31	坏(須恵器)	11.0	3.5	7.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～1㎜ 〃	〃	7ｃ前半～中頃
32	坏(須恵器)	9.2	3.0	6.6	外：体ー回転ナデ　ケズリ痕あり 底　ヘラおこし 内：回転ナデ	灰色	～2㎜ 〃	〃	7ｃ前半～中頃
33	坏(須恵器)	－	－		外：回転ナデ 高脚ー1条の溝 内：回転ナデ	灰黄色	～2㎜ 〃	〃	貼り付け高台付坏
34	坏(須恵器)	－	－	高台径 10.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	密	〃	削り出し高台
35	坏(須恵器)	9.0	－	－	平坏 外：体ー回転ナデ 底　回転糸切り痕 内：回転ナデ	灰色	～2㎜ 程度の砂粒を含む	〃	
36	坏(須恵器)	16.0	4.6	高台径 8.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～0.1㎜ 〃	〃	高台付坏
37	甕(須恵器)	20.0	－	－	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰黄色	～2㎜ 〃	〃	
38	甕(須恵器)	21.2	－	－	外：口端　凹線状の溝 体ー平行タタキ目 内：口ー端ー回転ナデ 体ー同心円状のタタキ目	灰色	～2㎜ 〃	〃	奈良時代後半
39	甕(須恵器)	－	－	－	回転ナデ	灰色	～1㎜ 〃	〃	奈良時代後半
40	甕(須恵器)	23.0		－	口縁部ー接合状 外：口ー回転ナデ 体　平行タタキ目 内：口　回転ナデ 体ー同心円状のタタキ目	灰黄褐色	～2㎜ 〃	〃	奈良時代後半
41	甕(須恵器)	21.0		－	外：口ー回転ナデ 体ー格子のタタキ目のちナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色	～3㎜ 〃	〃	奈良時代後半
42	甕(須恵器)	24.0	－	－	外：回転ナデのち指圧痕 端ー粗広の浅い溝 内：回転ナデ	灰色	～2㎜ 〃	〃	奈良時代後半
43	甕(須恵器)	25.0	－	－	外：口ー回転ナデ 体ー格子タタキ目 内：口　回転ナデのち指圧痕 体ー同心円状のタタキ目	灰黄色	～2㎜ 〃	〃	奈良時代後半
44	甕(須恵器)	23.6	－	－	外：口ー回転ナデ 斜目ー上下の平行タタキ目のち粗い 櫛歯状工具による平行沈線状の回転糸切り痕 内：口ー回転ナデのちナデ 体ー粗く太いタタキ目	灰色	～3㎜ 〃	〃	奈良時代後半
45	甕(須恵器)	－	－	－	外：口ー回転ナデ 体　小さな格子文タタキ目（タテ） 内：口ー回転ナデ 体ー同心円状のタタキ目	外：内：灰色 釉：暗灰色	～1㎜ 〃	〃	奈良時代後半
46	甕(須恵器)	－	－	－	外：上下方向のタタキ目のち回転ナデ カキ目状の回転糸切り痕 内：同心円弧状のタタキ目	外：灰黄色 内：黄灰色	～2㎜ 〃	やや不良	
47	甕(須恵器)	－	－		外：上ーナデ 上下方向のタタキ目（小さい格子目） 内：同心円弧状のタタキ目	灰色	～3㎜ 〃	良好	
48	甕(須恵器)	－	－	－	外：RLの平行タタキ目（窓目状）のち回転ナデ 内：タタキ目（原体不明　2段以上）	外：にぶい橙色 内：褐灰色	～1㎜ 〃	やや不良	
49	甕(須恵器)	－	－	－	外：平行タタキ目（タテ）のちナデ 内：同心円弧状のタタキ目	外：灰白色 内：灰黄色	～2㎜ 〃	〃	
50	大型甕(須恵器)	－	－	－	外：上下方向の平行タタキ目（格子状） 一部回転ナデ 内：同心円弧状のタタキ目	外：灰黄色 内：灰色	～1㎜ 〃	〃	
51	甕(須恵器)	－	－	－	外：上下方向の平行タタキ目（櫛目状） 一部回転ナデ 内：車輪種タタキ目	外：灰黄色 内：灰白色	～2㎜ 〃	〃	

挿図図版番号	器種	法量（cm）口径	法量（cm）器高	法量（cm）底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
52	壺（須恵器）	−	−	−	外：下→Ｒしの平行タタキ目のち回転ナデ　カキ状の回転糸切り痕 内：同心円状のタタキ目	灰色	～1㎜程度の砂粒を含む	良好	
53	壺（須恵器）	−	−	−	外：上下方向の平行タタキ目 内：車輪線のタタキ目	外：灰白色 内：灰黄色	～1㎜ 〃	やや不良	
54	壺（須恵器）	−	−	−	外：格子文タタキ目 内：同心円状のタタキ目	灰色	～1㎜ 〃	良好	
55	壺（須恵器）	−	−	−	外：格子のタタキ目 内：同心円状のタタキ目	明褐灰色	～2㎜ 〃	〃	
56	壺（須恵器）	−	−	−	外：体上－平行タタキ目のち回転ナデ　体下：小さな格子状のタタキ目 内：体－同心円状のタタキ目（車輪文）　底　タタキ目のちナデ消し	外・内：灰色 釉：にぶい赤褐色	～2㎜ 〃	〃	丸底
57	壺（須恵器）	13.0	−	−	外：回転ナデ 内：回転ナデのち指頭整　段比較	灰色	～1㎜ 〃	〃	
58	直口壺（須恵器）	17.0	−	−	外：体上－ヘラ山　カキ目状痕のちナデ　体下－２条の凹線　体下－ナデ 内：ナデ	胎：灰白色 釉：灰色	～2㎜ 〃	〃	自然釉
59	壺（須恵器）	−	−	−	外：カキ目状の条痕のちナデ 内：ナデのち指ナデ	外：灰色 内：灰オリーブ色	～3㎜ 〃	〃	自然釉
60	蓋付の小型壺（須恵器）	8.0	−	−	外：回転ナデ　体－カキ目状の回転糸切り痕 内：回転ナデのち指圧痕	暗灰色	～2㎝ 〃	〃	古墳時代後期か末期
61	高台付の壺（須恵器）	−	−	（高台径）10.8	外：回転ナデ　底－回転糸切りのちナデ 内：回転ナデ	灰色	～2㎜ 〃	〃	貼り付け高台　奈良時代後半
62	鉢（須恵器）	29.0	−	−	外：口－段－回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～1㎜ 〃	〃	奈良時代後半
63	高杯（須恵器）	−	−	−	外：回転ナデ 内：坏部に渦巻状のナデ痕	灰色	～2㎜ 〃	〃	古墳時代後期か末期
64	埴輪の体部（須恵器）一	−	−	−	外：カキ目（同心円状） 内：ナデのち指圧痕	外：灰色 内：暗青灰色	～1.5㎜ 〃	〃	古墳時代後期か末期
65	はそう（須恵器）	−	−	−	外：２条の凹線　最上へラ状工具痕 内：ナデ	灰色	～1㎜ 〃	〃	古墳時代後期か末期
66	瓶（陶磁器）	19.0	−	−		明緑灰色	密	〃	青磁　4中間　15ｃ
67	碗（陶磁器）	−	−	−	外：片切り文	釉：灰白色 釉：オリーブ灰色	緻密	〃	青磁　鎬蓮Ｂ－Ⅰ類　13ｃ後～14ｃ前
68	碗（陶磁器）	−	−	−	外：蓮弁文（劃線）	胎：灰白色 釉：オリーブ灰色	〃	〃	青磁　鎬蓮龍泉系　Ｂ－４類　15ｃ後～16ｃ前
69	碗（陶磁器）	−	−	−		胎：灰白色 釉：オリーブ灰色	〃	〃	青磁　鎬蓮龍泉系　15ｃ　Ｄ類
70	碗（陶磁器）	−	−	−	外：蓮弁文	胎：灰色 釉：オリーブ灰色	〃	〃	青磁　龍泉窯系　Ｄ・Ｅ類
71	碗（陶磁器）	−	−	（高台径）6.4	削り出し高台	胎：灰色 釉：オリーブ灰色	〃	〃	青磁　龍泉窯系　Ｄ段
72	鉢（陶磁器）	−	−	−		胎：灰白色 釉：灰緑色	〃	〃	青磁
73	碗（陶磁器）	15.0	−	−	外：へら描文	灰白色	〃	〃	口禿　５類　中国　11ｃ後～12ｃ
74	皿（陶磁器）	16.2	3.7	（高台径）9.2		灰白色	〃	〃	白磁　Ⅳ－１　16ｃ
75	碗（陶磁器）	−	−	−	玉縁口縁	胎：灰白色 釉：透明	〃	〃	白磁　４類　中国　平安末
76	碗（陶磁器）	−	−	−		胎：灰白色 釉：青白色	〃	〃	白磁　中世前期
77	皿（陶磁器）	−	−	−		胎：灰色 釉：明緑色	〃	〃	青花　中国　16ｃ～17ｃ
78	皿（陶磁器）	−	−	−	外：獅子２条線文	胎：灰白色	〃	〃	青花　中国　16ｃ
79	皿（陶磁器）	−	−	−	外：１重線文 内：八方線文	胎：灰白色 釉：灰白色	〃	〃	青花　景徳鎮系　16ｃ後半
80	碗（陶磁器）	−	−	−	外：龍文	胎：灰白色 釉：青白色 文：青色	〃	〃	青花　景徳鎮系　16ｃ後半
81	小皿（陶磁器）	−	−	（高台径）2.5	外：１重線文　植物痕 内：植物痕	胎：青白色 釉：明緑色 文：青色	〃	〃	青花　景徳鎮系　16ｃ中～後半　外：釘入り
82	小皿（陶磁器）	−	−	−	ルリ釉	胎：灰白色 釉：濃色	〃	〃	中国　16ｃ
83	擂鉢（陶磁器）	32.0	−	−	外：ヨコナデのち指ナデ 内：ヨコナデのち指ナデ　５条の擂目	胎：灰白色 オリーブ灰色 釉：暗灰黄色	～3㎜程度の砂粒を含む	〃	備前　14ｃ～15ｃ
84	擂鉢（陶磁器）	−	−	−	外：回転ナデ 内：５条の擂目	にぶい赤褐色	密	良好	備前　14ｃ～15ｃ
85	擂鉢（陶磁器）	29.0	−	−	外：回転ナデ 内：回転ナデのち擂目	灰黄色	～2㎜程度の砂粒を含む	〃	備前　14ｃ後

挿図図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
86	擂鉢(陶磁器)	—	—	18.0	外：ヨコナデのち指ナデ 底－ミガキ 内：ナデのち6条の擂目	外：灰黄褐色 内：灰色	～2mm程度の砂粒を含む	良好	備前　14c～15c
87	擂鉢(陶磁器)	—	—	—	外：ナデ 内：ナデのち4条以上の擂目	暗茶灰色	～3mm〃	〃	備前　14c～15c
88	把手(陶磁器)	—		—	ナデ痕	外：灰色 胎：灰褐色	～1mm〃	〃	備前　14c～15c
89	碗(陶磁器)	13.1	—	—	体下部－無釉	胎：灰白色 釉：黒褐色	密	〃	天目　唐津
90	碗(陶磁器)	—	—	(高台径)4.6	外：1条の線文様	内：明黄褐色 胎：灰白色 釉：青白色 文：藍色	〃	〃	削り出し高台 唐津
91	碗(陶磁器)	—	—	(高台径)4.4	内：施釉	胎：にぶい橙色 釉：灰オリーブ色	～1.5mm程度の砂粒を含む	普	削り出し高台 唐津　16c～17c (短期間)
92	片口の破片(陶磁器)		—	—	外：文様	外：灰褐色 内：灰白色 胎：にぶい橙色 釉：明オリーブ灰色	緻密	良好	絵唐津　17c
93	皿(陶磁器)	—	—	—		胎：灰黄褐色 釉：灰色 文：灰色	〃	〃	絵唐津　17c
94	盤(陶磁器)	—	—	—		外：褐灰色 釉：灰色	～2mm程度の砂粒を含む	〃	唐津　16c末～17c
95	擂鉢(陶器)	27.8	—	—	口縁部は太帯状に肥厚 外：指ナデ　2条以上の擂目 内：回転ナデ　クシ状工具による擂目	浅黄橙色	～1mm〃	〃	唐津　16c末～17c
96	蓋(陶磁器)	10.0	—	—	内：四方襷文	胎：灰白色 釉：明オリーブ灰色 文：青灰色	緻密	〃	伊万里　18c
97	碗(陶磁器)	10.6	—	—	外：口　2重線文 体－網目文	胎：灰白色 釉：透明 文：藍色	〃	〃	伊万里　18c
98	碗(陶磁器)	—	—		内：四方襷文	胎：灰色 釉：オリーブ灰色 文：藍色	〃	〃	伊万里　18c
99	碗(陶磁器)	—	—	—	外：縞物文 内：2条線文	胎：白灰色 釉：透明	〃	〃	伊万里　18c
100	碗(陶磁器)	—	—	—	外：文様	胎：白色 釉：灰白色 文：緑灰色	〃	〃	伊万里　18c
101	碗(陶磁器)	—	—	—	外：文様	胎：灰白色 釉：オリーブ灰色 文：藍色	〃	〃	伊万里　16c末
102	碗(陶磁器)	—	—	(高台径)4.6	外：線文　文様 内：線文	胎：灰白色 釉：明青灰色 文：青色	〃	〃	伊万里　18c
103	碗(陶磁器)	—	—	(高台径)5.0		胎：灰色 釉：オリーブ灰色	〃	〃	伊万里　18c
104	碗(陶磁器)	—	—	—	外：蛇の目文 内：蛇の目文	胎：灰白色 釉：明オリーブ灰色 文：青灰色	〃	〃	
105	皿(陶磁器)	—	—	—	外：2重線文 内：文様	胎：灰白色 釉：明緑灰色 文：青色	〃	〃	伊万里　18c
106	碗(陶磁器)	—	—	(高台径)6.0	青花の染付け（？）	胎：灰白色 釉：灰白色	〃	〃	削り出し高台 肥前系　伊万里 近世　火を受けている
107	碗(陶磁器)	—	—	—	外：高台底－字 体－文様	胎：灰白色 釉：透明 文：藍色	〃	〃	伊万里　18c
108	皿(陶磁器)	—	—	(高台径)10.0	外：線文　文様 内：線文　文様	胎：灰白色 釉：明オリーブ灰色 文：青灰色	密	〃	伊万里　18c
109	片口(陶磁器)			(高台径)4.2	外：3条の線文 底－文様	胎：灰白色 釉：青白色	〃	〃	伊万里
110	碗(陶磁器)	—	—	(高台径)4.0	外：線文　文様	胎：灰白色 釉：明青灰色 文：青灰色	緻密	〃	肥前　近世
111	碗(陶磁器)	—	—	—	外：縞連弁文 内：縞連弁文	胎：灰白色 釉：緑白色	〃	〃	青磁　肥前　近世
112	鉢(陶磁器)	—	—	—		胎：赤褐色 釉：黒色	密	〃	肥前系　近世
113	大皿(陶磁器)	—		(高台径)7.6		胎：灰黄色 釉：明オリーブ色 にぶい赤褐色	〃	〃	17c
114	擂鉢(陶磁器)	24.0	—	—	玉縁状口縁	外：暗茶色 胎：灰色	～3mm程度の砂粒を含む	良好	肥前系　近世

挿図図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
115	皿鉢(陶磁器)	−	−	−	外：ナデ 内：6条以上の櫛目	黄茶褐色	〜1㎜程度の砂粒を含む	青	肥前
116	擂鉢(陶磁器)	−	−	−	外：回転ナデ 内：9条以上の櫛目	灰黄褐色	密	良好	肥前系
117	鉢(陶磁器)	25.0			外：回転ナデ 内：回転ナデ　指圧痕	灰色	〜1㎜程度の砂粒を含む	〃	東播系 外：釉
118	鉢(陶磁器)	−	−	−	外：ナデ 内：ナデ	外：灰色 内：褐灰色	〜2㎜ 〃	〃	東播系 口：自然釉
119	碗(陶磁器)	−	−	(高台径)5.6	見込部分は釉を輪状にかき取る 蛇ね跡のため胎土目痕	胎：灰色 釉：明オリーブ色	緻密	〃	肥前　江戸
120	底丸(陶磁器)	−	−	−	外：ヘラによる文様 内：指ナデ	胎：灰白色 釉：黒色	密	〃	瀬戸美濃　瓶子II 15c後半
121	碗(陶磁器)	−	−	(高台径)4.2	外：線文様 底：文様	胎：灰白色 釉：青白色 文：藍色	〃	〃	刳り山し高台
122	碗(陶磁器)	−	−	−	外：高一2重線文 体：文様	胎：灰白色 釉：灰白色 文：青灰色	緻密	〃	近世
123	碗(陶磁器)	−	−	(高台径)3.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ	胎：灰白色 釉：灰オリーブ色	密	〃	削り出し高台 自然釉
124	碗(陶磁器)	−	−	(高台径)4.2	外：2条の線文様 内：文様	胎：青白色 釉：透明 文：藍色	緻密	〃	削り山し高台 染付　16c中
125	碗(陶器)	−	−	(高台径)4.6		胎：灰黄色 釉：浅黄色	〃	〃	近世
126	碗(陶磁器)	7.0	−	−		灰オリーブ色	〃	〃	近世
127	小鉢(陶磁器)			(高台径)4.0	釉による回転文様	胎：灰色 釉：灰色 文：口色	〃	〃	近世
128	皿(陶磁器)	−	−	(高台径)9.0	外：線文　文様 内：線文　文様	胎：灰白色 釉：灰白色 文：緑灯色	〃	〃	
129	碗(陶磁器)	10.0	−	−	回転ナデ	灰色	〃	〃	
130	鉢(陶磁器)	21.0	−	−	玉縁状口縁	胎：にぶい褐色 釉：黒茶色	密	〃	
131	鉢(陶磁器)	25.0	−	−	玉縁状口縁	胎：灰色 釉：黒褐色	〃	〃	
132	鉢(陶磁器)	23.0	−	−	玉縁状口縁	胎：白灰色 釉：青白色	緻密	〃	
133	鉢(陶磁器)	−	−	−	玉縁状口縁	胎：灰オリーブ色 釉：暗オリーブ色	密	〃	
134	擂鉢(陶磁器)			(高台径)15.0	高台と体部の境に1条沈線 外：回転ナデのちナデ 内：単位で見ると櫛目	濃茶褐色	〜1㎜程度の砂粒を含む	〃	貼り付け高台
135	擂鉢(瓦質)	−	−	−	外：ナデ 内：回転ナデ　3条以上の櫛目	灰黄色	〜1.5㎜ 〃	〃	
136	擂鉢(土師質)	−	−	−	外：ナデ 内：5条以上の櫛目のちナデ	にぶい黄橙色	〜1㎜ 〃	やや不良	
137	甕(瓦質)	26.0	−	−	≡コナデ	胎：浅黄橙色 釉：黒褐色	〜8㎜ 〃	普	施釉
138	甕(瓦質)	28.0	−	−	外：ナデ 内：ナデのち指ナデ　指圧痕	外：黒灰色 内：浅黄橙色 胎：浅黄橙、褐灰色	〜2㎜ 〃	良好	スス付着
139	(瓦質)	−	−	−		外・中：褐色 体：浅黄色	緻密	〃	
140	硯(須恵器)	−	−	−	回転ナデ　円面硯	灰色	微砂粒	〃	高台付硯
141	硯(須恵器)	−	−	−	高台付　円面硯 外：回転ナデ 内：回転ナデ	外・内：にぶい褐色 胎：灰白色 釉：灰オリーブ色	〜1㎜程度の砂粒を含む	〃	
142	鉢(石器)	25.0				外・中：褐灰色 胎：黄灰色			
143	砥石(石製)	(長さ)8.5	(幅)8.0	(厚さ)6.8		濃灰色			重量：640ｇ
144	羽口(?)	−	−	−	外面に棒状で刺突した痕跡が3条	黒色			端部はガラス化
145	合鉄滓	−	−	−	製錬滓	茶褐色			
146	金属滓	−	−	−		黒色			鉄以外の金属滓
147	塊形滓	−	−	−	底部に木炭痕	黒色 オリーブ灰色			

第4章　寺の前区の遺構と遺物

1．竪穴住居址と出土遺物について

寺の前区からは竪穴住居址23棟が検出された。これらは弥生時代・古墳時代・奈良時代に属することが判明している。それぞれからの出土遺物も併せて状況を記載する。

（1）SB－01（第14・15図、図版XIV）

検出位置・状態：発掘区域の北端で円弧状の壁と柱穴らしきピット2個を検出。残状況は全体の1/4～1/5程度で、床面の保存状態も悪い。

平面形：円形の竪穴住居址と思われる。

規　模：円形とすれば直径約6m程度。

施　設：壁の残存高は5cm。壁溝がある。この住居址にともなう柱穴は2個以上。

遺　物：床面に接して弥生土器の甕の大きな破片が出土している（第15図1）。この土器は口縁部端を小さく上下に拡張し、拡張面に2条の凹線を巡らしている。体部は中央が膨らむ長胴形でそこに列点の連続刺突文が施されている。Ⅳ－1期と思われる。

時　期：弥生時代中期後葉。

（2）SB－02（第14・16・17図、図版VII－2・XII）

検出位置・状態：発掘区域の北端でほぼ完全な形で検出。

平面形：四隅に少し丸味をもつ長方形の竪穴住居址。

規　模：長径5.2m、短径4.1m。壁の残存高約20～30cm。

施　設：東側長辺壁の中央に板石を壁の芯と底に敷いた造り付けのかまどがあり、その先方からは煙り出しの穴を検出。かまどと煙り出しの穴の間には2個の小ピットがあり、かまどの上方を覆う屋根状の施設が作られていたものと思われる。かまどの真反対側になる西壁中央部にも被熱した粘土の大きな塊が壁に付着しており、壁自体にも窪みが見られ、その外に煙り出しのピットが貫通していた。また、その両側には小ピット2個が対をなして掘られており、構造的には東壁のかまどに酷似するのでここにもかまどがセットされていたことが判明する。よって、本住居址では、最初に西壁に粘土造りのかまどが設けられ、その後に東壁に板石を使った粘土のかまどが再構築されたと考えられる。この変更に応じて床面や他の施設も作り変えられたものと思われる。東壁のかまどからは西壁に向かって一直線状に掘られた溝が検出された。主柱穴としては北壁沿いに2穴、南壁の土と壁を切り込むようにして掘られた2穴が考えられるが、断定はできない。床面中央には方形をした厚い大きな石が置かれていた。何かの台として使用されたものと思われる。この石の西寄りにも扁平な石が床面に掘り込まれたような状態で検出されている。これも台石であろう。

遺　物：覆土と床面近くから10個の須恵器・土師器が出土している。第17図の2～4は輪状つまみが付く坏の蓋。2、4はやや扁平で3は少し膨らみがあり、天井が高い。5～9は坏の身で5、6、7は底部が平らで径が大きく、体部は逆「ハ」字状に直線的に開いて立ち上がる。8、9は高台が付く。8は体部の立ち上がり急で9は外反状を呈する。貼付け高台。10は中世土師器の小皿。11は大型の高坏。大皿状の坏部に脚部が高く、裾が余り広がらない脚が付く。10を除く須恵器群は石見

空港編年のⅢ期に含められる。
時　期：床面から出土した11の高坏等より奈良時代後半頃と考えられる。
（3）SB－03（第14・18図）
検出位置・状態：SB－2の1m南側に並行した状態で検出された。四壁がほぼ完存している。
平面形：不整長方形。西壁にやや膨らみがみられる。
規　模：長辺4m、短辺3.0～3.2m。
施　設：不明
遺　物：無し。
時　期：不明
（4）SB－04（第14・19図、図版Ⅶ－3・XV）
検出位置・状態：SB－03の東に接して検出された。西壁の一部が破壊されているが、その他の壁の保存状況は比較的良好である。
平面形：長方形を呈する。
規　模：長辺4.5m、短辺3.5m。
施　設：西壁の中央に板石を立並べて構築したかまどが検出された。柱穴は住居址内には見られない。壁溝は北・東壁際で検出。また、東壁の中央近くに方形の板状の石が残っていた。
遺　物：床面に接して須恵器の坏片、床面よりやや浮いた状態で須恵器、土師器の破片が出土している。第19図の12は須恵器の坏片。体部が少し内湾気味に立ち上がり、口縁端部が尖る。石見空港編年Ⅲ期と思われる。同図の13は小型の須恵器甕の体部片。14は土師器の甕片で口縁部が小さく外反する。
時　期：床面出土の須恵器坏より奈良時代後半頃と思われる。
（5）SB－05（第14・20・21・22・23図、図版XII）
検出位置・状態：SB－04の南に隣接。上面が削平されたことによるのか壁は高さ数cm程度しか検出できなかったが、不整の方形を呈するプランが捉えられた。東壁の中央はSB－04との間に掘り込まれた「窪地」（皿状の大型土坑）によって破壊され、南壁も掘立柱建物の柱穴と思われるピットによって変形させられていた。
平面形：方形状をなす。
規　模：一辺の長さが5.5～5.6m。
施　設：主柱穴と考えられる深いピットが3穴以上確認できた他大小多数のピットが床面から検出され、北壁と南壁際にも柱穴らしいピットが掘られていた。これらの多くが本住居址にともなう可能性はあるが、その機能は不明。かまどは確認できなかった。東壁の中央部付近に割り石や川原石が土師器等とともに密集状態で検出された。
遺　物：須恵器と土師器が出土している（第21～23図15～33）。15は須恵器の坏片。体部から口縁部にかけてあまり開かずに立ち上がる。口縁端部は尖る。16は土師器の坏片で器壁が厚い。17、19～27は土師器の甕。長胴系のもの（17、21～23）と扁平で鉢形の形状を呈するもの（19）、比較的小型のもの（27）とバラエティーがある。口縁部の形状も外反度の大きいものと小さいものがあり、24は口縁部が低い。18は小型の甕の口縁部と丸底上の底部で同一個体。28は土師器の甕。29は土師

器の甕の体部片で角状の把手が付く。30～33は須恵器。30は輪状つまみが付く坏の蓋。31、32は坏身で底部は平ら、体部から口縁部は小さく外傾する。33は甕の口縁部から体部の上部片。口縁端部の断面が方形状をなしている。34は近辺出土の竈である。

時　期：15、30～33の須恵器はいずれも石見空港編年のⅢ期に相当すると考えられるので本住居址の時期を奈良時代後半期とすることができよう。

（6）SB－06（第14・24図）

検出位置・状態：発掘区域の南西部で検出された。隅に丸味をもつ長方形状の竪穴住居址と考えられる。検出できたのは北・西・南壁で壁高はわずかである。東側はSB－07と重複しており（本住居址が古い）、残存状況は全体の1/3程度である。

平面形：隅丸の長方形と考えられる。

規　模：長径約4.5m、短径3.5m以上。

施　設：住居址内部では浅い皿状の小ピットを検出したが、本住居址のものかどうかは不明。住居址の外にもいくつかのピットがあるが、所属はやはり不明である。

遺　物：第24図1は須恵器の坏で体部から口縁部にかけての小破片。少し外傾し、口縁端部が尖る。2は土師器の甕片。

時　期：1の須恵器坏は石見空港編年のⅢ期と思われるので本住居址の年代は奈良時代後半期とする。

（7）SB－07（第14・21・25図、図版Ⅻ）

検出位置・状態：発掘区域南西部でSB－06と複合状態で検出された。水田床土を除去したところで薄い黒褐色土層が表れ、その層中には多数の須恵器・土師器が包含されていた。これは本住居址の覆土から床面にかけて堆積した遺物群と理解される。これを取り上げると楕円形に踏み固められた床面が検出されたが、住居の平面形はSB－06同様に壁や隅に丸味のある長方形状であったと推定される。東側と北側には掘立柱建物の大きな柱穴があり、これらとも一部重複する。

平面形：長方形と思われる。

規　模：長径約5.5m程度か。

施　設：不明

遺　物：約20個体の須恵器坏等が出土したが、中6点を図示した（第25図36～41）。37～40は輪状つまみが付く須恵器坏蓋である。天井がやや高く口縁部は鳥嘴状を呈する。38は口径が少し大きく、つまみの内側に爪跡状の刺突文が見られる。41、42は須恵器坏身の破片。41は底部が平らで体部から口縁部にかけて小さく外傾する。口縁端部は尖り気味。42は貼り付け高台。

時　期：37～42の須恵器は石見空港編年のⅢ期に相当する。本住居址の年代は奈良時代後半期とすることができよう。

（8）SB－08（第14・26図、図版Ⅻ）

検出位置・状態：発掘区域の南西部でSB－07の東壁と重複する。新旧関係は不明。東壁と南壁が比較的良く残り、北壁と西壁は破壊を受けている。とくに西壁は南東部隅が確認できただけである。東壁の真ん中やや南寄りからかまどが検出された。

平面形：不整の長方形を呈する。

規　模：長径5.2m、短径約4.5m。

施　設：東壁に作り付けたかまどがある。トンネルになった煙道と煙り出しのピットがある。かまどは本体が大きな割り石を芯にした粘土造りと思われる。壁溝が東壁と北壁の一部に残る。主柱穴らしいピットが南東隅近くで検出されたが、他の柱穴は不明。

遺　物：北東隅付近とその他で須恵器・土師器が出土（第26図43～46）。43、44は須恵器坏の蓋。低目の輪状つまみで44はやや扁平。45は須恵器の坏。底部が平らで体部・口縁部はわずかに外反する。46は土師器の小型甕。

時　期：須恵器の坏・蓋が石見空港編年のⅢ期に比定できるので奈良時代後半頃の住居址と考えられる。

（9）SB－09（第14・27図、図版Ⅻ）

検出位置・状態：SB－05の南西で検出。北東隅と壁の一部が残る。SB－10と重複し、掘立柱建物4の柱穴やSD－01とも重なっている。新旧関係はいずれの遺構よりも本住居址が古く位置づけられると考える。

平面形：方形もしくは長方形。

規　模：不明。

施　設：壁溝が認められる。

遺　物：第27図47～49の土師器の甕と50の高坏、51の甕が出土している。47、48の甕は外反する口縁で器壁が厚い。石見空港編年Ⅲ期の須恵器と共存するタイプと思われる。49も同時期の小型甕。50は坏部に稜のような屈折がみられ、51は外面に縦と斜め方向の太いハケが施されている。この2点は古墳時代に溯る土師器と考えられる。

時　期：奈良時代後半期とみる。

（10）SB－10（第14・28図、図版Ⅷ－1）

検出位置・状態：SB－09とSB－11に挟まれたような状態で検出された。新旧関係はSB-09よりは新しく、SB－11よりは古いと思われる。

平面形：不整長方形か。

規　模：長径約5m、短径約3m。

施　設：不明

遺　物：床面と考えられる面からやや浮いた状態で多数の須恵器や礫が出土している。

時　期：須恵器坏の輪状つまみ蓋がみられるので他の住居址出土の須恵器坏等と同一時期に属すると考えられる。

（11）SB－11（第14・29図、図版Ⅷ－1・Ⅻ）

検出位置・状態：SB－10の東側に重複状態で検出された。20cm程度の高さの壁が北・東・南に残り、住居址の内部からは大型の角礫と土師器、須恵器が密集状態で出土した。これらは床面より少し浮いた位置から検出されている。後述するように、住居が廃絶した後に土器・礫石の捨て場として使用されたのかも知れない。

平面形：不整の隅丸長方形。

規　模：長径約4.3m、短径約3.9m。

施　設：不明

遺　物：第29図の53、54は須恵器の坏。底部が平らで体部から口縁部にかけて少し外傾している。口縁端部は尖り気味。55は土師器の坏。56は須恵器の大型甕の口・頸部。53、54は石見空港編年Ⅲ期と思われる。

時　期：出土遺物は住居址の廃棄後に投入されたものとみられるので厳密な時期の決定はできないが、住居址を埋める覆土の厚さから見て53、54の須恵器坏の年代と大きく隔たることはないと思われる。

（12）SB－12（第14・30・31図、図版XII）

検出位置・状態：発掘区域の東部でSB－05の東側で検出された。SB－13と完全に重複しており、わずかに楕円状の壁線が辿られた。

平面形：不整楕円形か。

規　模：長径約4.0m、短径約3.4m。

施　設：不明。

遺　物：床面に密着した状態で複合口縁をもつ甕が1点出土している。

時　期：出土甕は複合部が高く、数条の並行沈線を施しているので弥生時代後期後半（松本石見編年Ⅴ－3）に属すると考える。

（13）SB－13（第14・30・31図、図版XII）

検出位置・状態：SB－12、SB－14と重複した状態で確認された住居址である。床面はSB－14とほぼ同レベルで新旧関係は把握できなかった。

平面形：長方形と考える。

規　模：長径約7.5m、短径約5.5m。

施　設：柱穴らしいピットが北壁沿いに2個検出されているが、本住居址に属するかどうかは不明。

遺　物：無し。

時　期：不明。

（14）SB－14（第14・30・31図、図版XII）

検出位置・状態：SB－13の北側にあり、これと80%以上が重複状態にある。北壁と東壁に西壁の一部が確認されたが、住居全体の構造はほとんど不明。

平面形：不整長方形か。

規　模：長径7m以上。

施　設：床面にはいくつかの円形ピットがあるが、本住居址のものかどうかは不明。

遺　物：SB－12、13、14出土の土器として第31図57～61の土師器がある。57は器壁が薄く、深みのある坏で、口縁端部を内側から片刃状に尖らす。SB－13か14の床面に付着して検出されている。58も坏片。59～61は甕の口縁部から体部上方の破片。59は口頸部が逆「コ」字状に緩く湾曲し、内外面に粗いハケ目が見られる。60は口縁部が弓状に湾曲する。61は小さく外反する口縁部で体部にもハケ目が施される。器壁が薄い。これらの土師器群は古墳時代に属すると考えられる。

時　期：57の土師器の坏が本住居址にともなうとすれば時期は古墳時代中頃以降の年代が考えられる。ただし、この土器がSB－13に属する可能性もあるので断定はできない。

（15）SB　15（第14・32図）

検出位置・状態：発掘区域の東部でSB－14の北側から検出された。大部分が削平されて南壁と東・西壁の一部が残っている。

平面形：長方形か。

規　模：短径約5.3m。

施　設：不明

遺　物：第32図62の須恵器が出土している。壺の底部で貼り付け高台があるが、高台よりも底部が出っ張っていて不安定な状態を呈する。

時　期：62が本住居址のものとすれば奈良時代頃となろう。

（16）SB－16（第14・33図、図版XII）

検出位置・状態：SB－15の東側で、SB－23の北壁と並行する状態で南壁の一部が検出された。北東部でSB－17と重複している。

平面形：方形か長方形。

規　模：不明。

施　設：不明。

遺　物：第33図63～67の土師器が出土している。いずれも口縁部が低く、かつ外反し、体部が口径より大で膨らむのが特徴といえる。体部外面にハケ調整が施されている。古墳時代後期頃であろうか。

時　期：古墳時代後期か。

（17）SB－17（第14・34図、図版XII）

検出位置・状態：SB－23の北側で、SB－16、SB－19と重複して住居址半分位が検出された。北側は発掘地域の外で未発掘である。

平面形：方形か長方形と思われるが、南壁と南東隅が変形している。

規　模：一辺もしくは短径約4.5m。

施　設：発掘区域の壁に石組みのかまどと思われる2列の石列がある。その他は不明。

遺　物：第34図68～70の土師器甕と71の須恵器壺が本住居址から出土している。71は口縁部が逆「ハ」字状に開き、器壁も薄く、古墳時代と思われる。68、70は口縁部が強く外反する。69は口頸部が「く」字状に屈曲している。以上の3点は古墳時代後期の所産と考える。

時　期：68～70の土師器が年代を示すとすれば本住居址は古墳時代後期に属するといえる。

（18）SB－18（第14・35図）

検出位置・状態：発掘区域の東端からSB－19と重複して検出された。北側の半分が失われている。

平面形：方形か長方形。

規　模：一辺もしくは長・短径約4.2m。

施　設：不明。

遺　物：無し。

時　期：不明。

（19）SB－19（第14・35図）

第14図　寺の前区遺構分布図

検出位置・状態：SB－18の北側からSB－17・18と重複して検出された。全体の3分の2以上は調査区外のため未検出。重複する住居址との新旧関係は不明。
平面形：方形か長方形。
規　模：一辺もしくは長・短径約4m以上。
施　設：不明
遺　物：無し。
時　期：不明。
（20）SB－20（第14・36図）
検出位置・状態：調査区域の東部南側端で検出された。住居址の北西隅でSB－21・22と重複している。
平面形：不整の隅丸台形。
規　模：長径3.5m、短径2.5～3.2m。
施　設：不明。
遺　物：須恵器の甕の体部片（第36図72）
時　期：古墳時代後期か。
（21）SB－21（第14・36図）
検出位置・状態：SB－20の北側、SB－22の南東で検出。この2住居址と大部分が重複する。新旧関係は不明。
平面形：方形か長方形。
規　模：不明。
施　設：不明
遺　物：無し。
時　期：不明。
（22）SB－22（第14・37図、図版XII）
検出位置・状態：SB－20・21・23と重複して検出。東・南壁が残る。新旧関係は不明。
平面形：隅丸長方形か。
規　模：長径約7m、短径約5.2m。
施　設：柱穴様のピットが数個床面から検出されたが、本住居址にともなうものかどうかは不明。
遺　物：第37図73の土師器の坏が出土している。湾曲する底部と外反気味に立ち上がる体部との境に稜がある。古墳時代後期と思われる。
時　期：73の坏が本住居址のものであれば古墳時代後期。
（23）SB－23（第14・37・38図、図版XII）
検出位置・状態：SB－14の東側でSB－22と重複して検出された。壁高が高く、東西南北の壁が良く残っている。数少ない完全な形で捉えられた住居址である。床面には掘立柱建物1号の柱穴が残っている。壁元より内側に浅く壁溝が見られるので建て替えが行なわれた可能性がある。掘立柱建物は本住居廃絶後に掘られたものと思われる。
平面形：隅丸長方形。

規　模：長径5.5m、短径4.8m。

施　設：壁溝。

遺　物：土師器と須恵器が出土している（第38図74～87）。74～79は須恵器。74は高台付壷の底部。75は高台付坏。体部が湾曲して立ち上がる。76は坏蓋の口縁部。内部に返りが付いている。宝珠形のつまみが付く蓋と思われる。77は小型の壷の頸部から体部。体部中央が算盤玉状に膨らんでいる。78は甕の体部片。79はやや扁平な坏。80～87は土師器の甕の口縁部・体部片で外反し、頸部以下の外面にハケ目が残る。

時　期：74～76の須恵器は江津市久本奥窯跡編年のⅣ～Ⅴに比定できる資料であろう。このことから本住居址の年代は7世紀後葉から8世紀の初め頃に求めることができると思われる。

2．掘立柱建物跡と出土遺物について

掘立柱建物跡は16棟が検出された。これらのいくつかは奈良時代の竪穴住居址と重複し、その新旧関係では掘立柱建物が住居址廃絶後に建てられたことを示す事例が認められている。以下、各建物跡について記載する。柱穴の形状・大きさ（メートルで表示）・深さ（センチメートルで表示）・柱間距離（メートルで表示）については測定値を表で示す。測定は検出面を基準とする。

（1）1号建物跡（第14・37図）

検出位置・状態：調査区域の東部でSB－23と重複し、SB－14・17にも柱穴が掘り込まれていた。SB－23の床面からはP2～P4の下部が検出された。さらに、奥行き南側ライン中間に一穴が検出されている。P5としたが、この建物に属するか否かは不明。奥行き北側に中間柱が無いとすれば奥行き1間となる。SB－23内で検出された柱穴中の埋土には礫が含まれていた。

平　面：間口3間（5.64m）、奥行き1間（4.2m）か。間口ラインはほぼ南北線上にある。

柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	円	円	円	円	
大きさ	0.6	0.6	0.7	0.6	
深　さ					

柱穴No	P6	P7	P8	P9
形　状	円	円	円	隅円方
大きさ	7	0.6	0.5	0.6×0.6
深　さ				

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	2.2	1.8	1.6		

柱穴間	P6～P7	P7～P8	P8～P9	P9～P1
距　離	2.0	1.9	2.0	4.2

遺　物：無し。

時　期：奈良時代か。

（2）2号建物跡（第14・20図）

検出位置・状態：調査区の中央で検出。確認された柱穴は間口東側の4穴と奥行きと北側の1穴で他の西側間口ライン上の柱穴は未確認。SB－05、「寄地」と重複し、SB－04とも一部重なる。新旧関係は竪穴住居址の方が古いと考える。

平　面：間口3間（6.7m）、奥行きは推定で1間（4.4m）。間口ラインはほぼ南北線上にある。

柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4
形　状	楕円	円	楕円	楕円
大きさ	1.0×1.3	0.5×0.6	0.8×0.6	0.9×0.7
深　さ				

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4
距離	2.2	2.2	2.3

遺　物：無し。

時　期：奈良時代後半期かそれ以降。

（3）3号建物跡（第14・40図、図版Ⅸ－3）

検出位置・状態：調査区の中央で検出。10個の柱穴を確認。2号建物跡の北西約3m離れている。

平　面：間口3間（6.3m）、奥行き2間（4.3m）。間口ラインはほぼ南北線上にある。

柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	隅円方	隅円方	隅円長方	円	楕円
大きさ	1.0×0.9	0.9×0.9	0.8×1.0	0.8×0.7	1.1×0.8
深　さ	78	54	90	78	78
柱穴No	P6	P7	P8	P9	P10
形　状	円	楕円	円	円	円
大きさ	1.0×0.9	0.8×0.7	0.8×0.8	0.9×0.8	0.6×0.7
深　さ	52	45	42	52	54

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	2.2	2.0	2.1	2.3	2.3
柱穴間	P6～P7	P7～P8	P8～P9	P9～P10	P10～P1
距　離	2.0	2.1	1.8	2.3	2.1

遺　物：無し。

時　期：奈良時代かそれ以降。

（4）4号建物跡（第14・41図、図版Ⅳ－3）

検出位置・状態：調査区域の中央で検出。3号建物跡の南2mにあり、間口のラインが3号のそれと一直線状に重なる。柱穴10個を確認。SB－09・10と重複する。

平　面：間口3間（5.1m）、奥行き2間（4.2m）。間口ラインはほぼ南北線上にある。

柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	円	楕円	円	楕円	円
大きさ	1.0×0.9	0.7×0.5	0.6×0.5	0.7×0.5	0.7
深　さ	81	82	83	34	38
柱穴No	P6	P7	P8	P9	P10
形　状	円	楕円	楕円	円	円
大きさ	0.8	1.0×089	0.9×0.7	0.7	0.8×0.6
深　さ	40	38	68	66	67

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	1.7	1.6	1.8	2.2	2.0
柱穴間	P6～P7	P7～P8	P8～P9	P9～P10	P10～P1
距　離	2.0	1.7	1.8	2.0	2.1

遺　物：無し。

時　期：奈良時代後半期かそれ以降。

（5）5号建物跡（第14・42図）

検出位置・状態：調査区域の中央南端で検出。柱穴10個を確認。4号建物跡の南約2m強の位置。SB－10と一部重複する。新旧関係では本建物跡が新しい。

平　面：間口3間（6.2m）、奥行き2間（4.5m）。間口ラインはほぼ南北線上にある。

柱　穴：右表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	楕円	円	円	円	円
大きさ	0.8×0.6	0.6	0.5	0.6	0.4
深　さ	21	44	52	30	6
柱穴No	P6	P7	P8	P9	P10
形　状	楕円	円	隅円方	円	隅円方
大きさ	0.7×0.5	0.6	0.7×0.6	0.8	0.7×0.6
深　さ	33	20	29	25	25

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	2.2	2.3	1.7	1.8	2.6
柱穴間	P6～P7	P7～P8	P8～P9	P9～P10	P10～P1
距　離	1.7	2.2	2.1	2.4	2.1

遺　物：無し。

時　期：奈良時代後半期かそれ以降。

（6）6号建物跡（第14・43図）

検出位置・状態：調査区域の中央やや西寄りで検出された。8個の柱穴を確認。7号建物跡と大きく重なっている。東隣の3号建物跡とは約2m西になる。新旧関係は本建物跡のP7が7号のP8を切って掘り込まれているので本建物跡が新しいことになる。

平　面：間口3間（6.3m）、奥行き1間（4.1m）。間口ラインは南北線上にある。

柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	円	隅円長方	円	円	隅円方
大きさ	0.5	0.7×0.6	0.7	0.5	0.5×0.5
深　さ	46	51	46	62	22
柱穴No	P6	P7	P8		
形　状	円	円	隅円長方		
大きさ	0.6	0.6	0.8×0.6		
深　さ	13	20	18		

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	2.4	1.9	1.9	4.1	1.8
柱穴間	P6～P7	P7～P8	P8～P1		
距　離	2.1	2.6	4.1		

遺　物：無し。

時　期：奈良時代か。

（7）7号建物跡（第14・43図）

検出位置・状態：6号建物跡と80%程度重複する。柱穴9個を確認。奥行き北側の中間ではライン上にのる柱穴は不明である。7号に先行する建物跡。

平　面：間口3間（6.1m）、奥行き1間か2間（4.3～4.4m）。間口ラインは南北線上にある。

柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	楕円	楕円	楕円	楕円	円
大きさ	0.5×0.4	0.5×0.6	0.7×0.5	0.7×0.5	0.4
深　さ	45	53	68	50	71
柱穴No	P6	P7	P8	P9	
形　状	楕円	円	円	円	
大きさ	0.6×0.4	0.4	0.4	0.4	
深　さ	50		21	30	

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	2.0	2.0	2.0	2.1	2.3
柱穴間	P6～P7	P7～P8	P8～P9	P9～P1	
距　離	3.0	1.2	1.8	4.4	

遺　物：無し。

時　期：奈良時代か。

（8）8号建物跡（第14・24図）

検出位置・状態：調査区域の西南寄りで検出。南列（間口側）と西列（奥行き側）は柱穴を確認できなかった。9号建物跡と90%程度重複する。新旧関係は本建物跡のP1、P2、P4～P6が9号の同番号柱穴と切り合い状態にあり、本建物跡が後出で、おそらくは9号を北東方向に少しずらして建て替えたことよるものと判断される。また、この2棟の建物はSB--06・07・08とも重なり、それらよりも新しい遺構と考えられる。

平　面：間口3間（5.6m）、奥行き2間（4.5m）。間口ラインは東西ラインより10度北に振れる。
柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	円	楕円	楕円	隅円方	楕円
大きさ	0.7	0.9×0.8	0.7×0.5	0.9×0.9	0.6×0.5
深　さ	73	83	32	60	44

柱穴No	P6
形　状	楕円
大きさ	0.7×0.5
深　さ	48

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	2.3	2.2		1.8	1.8

柱穴間	P6～P1
距　離	2.0

遺　物：無し。
時　期：奈良時代後半期かそれ以降。

（9）9号建物跡（図版14・24図）

検出位置・状態：調査区域の西南で検出。8号建物跡とほぼ全面的に重複する。SB－06・07・08との複合状態も8号と同様である。南列（間口側）西列（奥行き側）の柱穴は未確認。
平　面：間口3間（6.0m）、奥行き2間（4.4m）。間口ラインの方向は8号建物跡と同じである。
柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	楕円	楕円	楕円	円	楕円
大きさ	0.8	0.7×0.6	0.5×0.3	0.6	0.7×0.6
深　さ	50	42	14	53	44

柱穴No	P6
形　状	円
大きさ	0.5
深　さ	30

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	2.2	2.3		2.2	1.9
柱穴間	P6～P1				
距　離	1.8				

遺　物：無し。

時　期：奈良時代後半期かそれ以降。

（10）10号建物跡（第14・44図、図版Ⅶ－2、3・X－1）

検出位置・状態：調査区域の西北寄りで検出。6号建物跡の北西角より約2.5mの位置に本建物跡の東南角が位置している。11号建物跡と90%程度重複する。新旧関係は11号P2を本建物跡P3が切り込んで掘られているので11号が先行といえるが、建物の構造と複合状態から建て替えと見るのが妥当かと思われる。

平　面：間口3間（5.9m）、奥行き2間（4.2m）。間口ラインは東西線より10度北に振れる。3間×2間の建物跡の西側には間口ラインに並行する4個の小さい柱穴（P11～P14）が並んでいる。また、奥行きラインの東側延長上でP3とP11の中間にも1個の柱穴（P15）がある。これらの小柱穴群は本体に付設された廂か縁台状の構造物の遺構と考えられる。この付設構造物は間口3間（5.7m）、奥行き1間ないし2間（2.9m）である。

柱　穴：下表による。付設構造物の柱穴は円形。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	円	隅円方	隅円方	円	隅円長方
大きさ	0.7	0.5×0.6	0.6×0.6	0.6	0.6×0.7
深　さ	52	46	46	25	38
柱穴No	P6	P7	P8	P9	P10
形　状	円	円	円	円	円
大きさ	0.6	0.6	0.7	0.6	0.7
深　さ	24	26	26	37	44
柱穴No	P11	P12	P13	P14	P15
形　状	円	円	円	楕円	円
大きさ	0.3	0.3	0.3	0.5×0.4	0.3
深　さ	26	45	46	50	

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	1.9	2.3	2.0	2.0	1.9
柱穴間	P6～P7	P7～P8	P8～P9	P9～P10	P10～P1
距　離	2.1	2.1	1.9	1.9	1.8
柱穴間	P11～P12	P12～P13	P13～P14	P3～P15	P15～P11
距　離	2.0	1.9	1.8	1.1	1.8

遺　物：無し。

時　期：奈良時代か。

(11) 11号建物跡（第14・44図、図版Ⅷ－2、3・X－1）

検出位置・状態：10号建物跡とほぼ全面的複合する状態で検出されている。柱穴の切り合い状態から本建物跡が先行して建てられたものと思われる。南東側に隣接する6号建物跡との距離は2m弱である。

平　面：間口3間（5.7m）、奥行き2間（4.4m）。建物の方向、廂ないし縁台状の張り出し部の形は10号建物跡とまったく同じである。この付設構造物の間口は3間（5.8m）、奥行き1間ないし2間（2.1m）である。

柱　穴：下表による。付設構造物の柱穴形状は円形。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	隅円方	楕円	隅円方	隅円方	隅円長方
大きさ	0.6×0.6	0.7×0.6	0.5×0.5	0.5×0.5	0.6×0.4
深　さ	37	32	34		
柱穴No	P6	P7	P8	P9	P10
形　状	隅円方	隅円長方	円	隅円方	隅円方
大きさ	0.6×0.6	0.8×0.5	0.7	0.5×0.6	0.6×0.6
深　さ	32	16	18	48	44
柱穴No	P11	P12	P13	P14	P15
形　状	円	円	円	円	円
大きさ	0.2	0.3	0.2	0.2	0.3
深　さ	28	19	50	63	

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	2.4	2.0	1.9	1.9	1.9
柱穴間	P6～P7	P7～P8	P8～P9	P9～P10	P10～P1
距　離	2.3	2.1	2.0	1.8	1.4
柱穴間	P11～P12	P12～P13	P13～P14	P3～P15	P15～P11
距　離	1.8	1.8	2.2	1.1	1.0

遺　物：無し。

時　期：奈良時代か。

（12）12号建物跡（第14・45図）

検出位置・状態：調査区域の西の中程から検出された。掘立柱建物跡の中では唯一1間×1間の建物で4個の柱穴は瓢状を呈していることから建て替えが行なわれたものと判断される。13号建物跡と重複しているが、新旧関係は不明。

平　面：間口1間（2.4m）、奥行き1間（2.4m）。方向は東西線より10度北に振れている。

柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4
形　状	楕円	楕円	円	円
大きさ	0.6×0.5	0.7×0.6	0.5	0.5
深　さ	48	48	58	40

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P1
距離	2.4	2.0	2.3	2.5

遺　物：無し。

時　期：奈良時代か。

（13）13号建物跡（第14・45図）

検出位置・状態：調査区域の西中程で12号建物跡と重複した状態で検出された。柱穴9個を確認。北西角の柱穴は大型の土坑と複合しており、検出できなかった。土坑との新旧関係は、土坑の埋土に柱穴の痕跡が認められなかったことから本建物が先行すると考える。

平　面：間口3間（5.9m）、奥行き2間（4.1m）。間口ラインは東西線より10度北に振れる。

柱　穴：右表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	楕円	円	円	円	円
大きさ	0.9×0.8	0.6	0.6	0.5	0.5
深　さ	44	45	50	45	50
柱穴No	P6	P7	P8	P9	P10
形　状	円	楕円		円	円
大きさ	0.5	0.7×0.6		0.8	0.6
深　さ	35	50		50	47

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P3～P4	P4～P5	P5～P6
距　離	1.9	2.2	2.0	2.1	1.8
柱穴間	P6～P7	P9～P10	P10～P1		
距　離	2.1	2.0	2.0		

遺　物：無し。

時　期：奈良時代か。

（14）14号建物跡（第14・46図、図版Ⅷ－2、3）

検出位置・状態：調査区域の北西端で検出。建物跡の半分（柱穴5個）を確認した。残り半分は調査区外のため未検出。奥行きラインが10号・11号建物の奥行きラインと並行し、距離は10号との間が1.7m、11号とは2.5mである。

平　面：間口2間以上（3.2m以上）、奥行き2間（4.2m）。間口ラインは東西線より10度北に振れ、これを延長すると11号の間口ライン上に完全に一致する。同一方向に建てられたことが判明する。15号建物跡と重複しているが、新旧関係は不明。

柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	P1	P2	P3	P4	P5
形　状	円	楕円	円	円	円
大きさ	0.6	0.7×0.5	0.7	0.7	0.7
深　さ	32	40	52	54	36

柱穴間隔

柱穴間	P1～P2	P2～P3	P5～P1
距　離	2.0	2.2	2.0

遺　物：無し。

時　期：奈良時代か。

（15）15号建物跡（第14・46図、図版Ⅷ－２）

検出位置・状態：調査区の西端で建物跡の４分の１程度、柱穴４個が検出されている。14号建物跡と重なるが、新旧関係は不明である。10号建物跡とは約2.6m程離れているが、建物の方向は同一。Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３ラインの南延長線上に…ピットがあり、これが本建物の付設構造物柱穴の可能性が無くもない。よってＰ５としてＰ３～Ｐ５の距離を求めた。

平　面：間口１間（1.6m以上）、奥行き２間（4.2m）。間口ラインは14号建物跡に並行する。奥行き方向と見られるライン上には大型の柱穴３個とその前方に小柱穴（Ｐ５）１個がある。この小柱穴を張り出しの構造物にともなうものとすると本建物も廂か縁台付きであった可能性がある。

柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５
形　状	円	円	隅円方	円	円
大きさ	0.8	0.6	0.6×0.7		0.5
深　さ	52	44	49	45	

柱穴間隔

柱穴間	Ｐ１～Ｐ２	Ｐ２～Ｐ３	Ｐ３～Ｐ５	Ｐ５～Ｐ１
距　離	2.1	2.1	2.9	1.6

遺　物：無し。

時　期：奈良時代か。

（16）16号建物跡（第14・47図）

検出位置・状態：調査区域の中央南端で所在が判明した建物跡。90%以上が調査区域の外になり、大半の柱穴（２個確認）が未検出である。５号建物跡の真南に位置し、それぞれの奥行きラインが並行していることから一連の建物跡と見ることができる。５号との間隔は約1.5m。

平　面：間口１間以上（不詳）、奥行き２間か（2.5m以上）。

柱　穴：下表による。

柱穴形状・規模

柱穴No	Ｐ１	Ｐ２
形　状	円	円
大きさ	0.6	0.6
深　さ		

柱穴間隔

柱穴間	Ｐ１～Ｐ２
距　離	2.2

遺　物：無し。
時　期：奈良時代か。
以上16棟の建物跡以外にも明らかに掘立柱建物の柱穴と思われるピットが調査区域の西半分の範囲、すなわち3号建物跡から16号建物跡が分布する一帯から検出されている。想定した以外にも建物が存在した可能性は否定できない。

3．その他の遺構と出土遺物

（1）窪地（第14・20・23図、図版XV）
検出位置・形態：調査区域の中央、SB－04とSB－05の間に挟まるような状態で検出された。2棟の住居址よりも後出の遺構と考えられるが、2号建物跡との新旧関係は不明である。
形状と規模：平面形は不整円形で底の浅い盤状の土坑である。規模は径約2.9×2.6m、深さは0.5m前後。なお、坑底に接して大小の角礫を円形に並べた遺構があり、内部には小さい円礫が残っていた。これがどのような性格の遺構かは不明である。
遺　物：坑の底からやや浮いた位置や坑壁に付着するような状態で須恵器や割り石が多数出土している。須恵器には奈良時代の坏や甕に混じって古墳時代の鬷（第23図34）等も見出される。掘立柱建物群の建設にともなう整地作業の際に土器や石をまとめて廃棄されたことが考えられる。
時期と性格：奈良時代後半期に掘られた廃棄土坑かと思われる。ただし、この廃棄用土坑は先行する土坑を拡大して掘られたことも考慮しておく必要があるのかも知れない。
（2）SK－01（第14・45図、図版Ⅷ－2）
検出位置・状態：調査区域の西外れで13号建物跡と重複する。検出状態は13号の北西角の柱穴が本土坑の中に位置すると思われたが、覆土中には柱穴の掘削を示すような土層が観察されなかったので13号建物消滅後に掘られた土坑と判断した。
形状・規模：楕円形を呈する。規模は長径3.7m、短径2.4m。深さ約0.5m。
遺物：無し。
時期と性格：不明。
（3）SK－02（第14・26図）
検出位置・状態：SB－08の南に接して検出されたが、本土坑と住居址の共存はその接近状態から否定される。
形状・規模：形状は不整楕円形。規模は長径3.6m、短径2.5m。深さ不詳。
遺物：無し。
時期と性格：不明。
（4）SD－01（第14・39図）
検出位置・状態：調査区域の中央で「窪地」遺構から西向きに走り、その後に急角度で折れて南西方向に向かう。4号建物跡の北東角柱穴と重複し、同建物跡の　柱穴で止められている。SB－09との新旧関係は不明。覆土中からは須恵器が出土している。
形状・規模：断面が台形状を呈し、規模は長さ約11m、巾0.4～0.9m。深さ約0.7m。
遺物：覆土下部よりほぼ完形に近い須恵器坏身が出土（第39図88）。口径が小さく、体部から口縁

部にかけて直立状になる。おそらく、宝珠形のつまみが付き、口縁部に返りのある蓋とセット関係をもつと思われる。
時期・性格：7世紀前半頃。排水用か。
（5）土器溜り
SB－10、SB－11の埋土上面からは大量の土器と割り石や礫が検出されている。これらは、おそらく、掘立柱建物の建設に当って旧来の竪穴住居等の建築物や遺構と化した施設を処理した際に出た日用什器類その他をまとめて廃棄したものか、または、何等かの行事で使用したものを一括廃棄したものかと思われる。出土品で目立つのは奈良時代後半期の須恵器で、とくに輪状つまみの付いた蓋坏が集中的に出土した。

4．遺構外から出土した遺物について

寺の前区では遺構にともなって出土した遺物よりもはるかに多くの量の遺物、とくに土器類が出土している。それらは弥生土器、土師器、須恵器、中・近世陶磁器等があり、長期間継続した本遺跡の特徴を示すものとなっている。以下、種類・形状の明らかなものについて説明を加える。
A．遺構上面の覆土より出土した土器（遺構内出土遺物は既述）
（1）弥生土器（第48図89～93、図版XII）
89、90、93は甕の口縁部。89は小さく外反する口縁部で端部を上下に拡張する。外面には凹線3条。内面頸部以下ケズリ。Ⅳ－2か。90、93は口縁部が複合状を呈し、90では並行沈線3条以上、93は櫛歯状工具による連続の刺突文を施す。両者体部にも櫛歯状工具の連続刺突文が見られる。内面頸部以下ケズリ。Ⅴ－2であろう。91は体部片で連続刺突列点文が巡る。Ⅳ－1か2と思われる。92は高坏の脚裾。端部に凹線が2条巡る。Ⅳ－2。
（2）土師器（第48図94～105、図版XII）
94～96は坏・塊である。浅く湾曲する底部に内湾しながら上方で開く体部・口縁部をもつ。97、98は内湾する体部・口縁部で塊か小型の鉢と見る。以上の5点は古墳時代に属する土師器と考える。
99～102は甕である。99～101は口頸部が外反し「なで肩」の上体部。102は体部がほとんど膨らみをもたない。99、100は古墳時代中頃のものか。103～105は牛角形の把手。
（3）須恵器（第49～50図106～132、図版XII・XX）
106～109は蓋坏の身である。106は受け部が水平方向に小さく突出し、立ち上がり部は高く直立する。口縁端部の内側には小さい段状の切込みがある。出雲（大谷編年、以下同様）2期に相当するか。107、108は受け部の位置が高く、かつ斜目上方に突出し、立ち上がり部が低く内傾している。出雲4～5期に比定できる。109は口径が小さく、出雲6期に相当すると考える。110は壷の体部片。並行沈線内を有軸羽状文で埋めている。出雲5期併行。117ははそうの頸部付近の破片。器壁が薄く、口縁部との境が鋭角の段をなしている。頸部が短いタイプで出雲1期に溯る可能性がある。
111は墨書土器。平底は回転糸切りで体部が直線的に開いている。灰釉陶器の可能性がある。9世紀後半か。112、114は大型壷の体部下位。113は無脚の円面硯片。海部に墨が薄く付着している。115は高台が付く甑と思われるもので、底部に円形の穿孔が行なわれている。112～114は奈良時代後半を中心とした時期のものと思われる。116～132は甕の口縁部・上胴部である。116、119、121、1

22は口頸部が外反し、118、120は直立気味である。いずれも口縁部が肥厚しているが、118、120は幅広い突帯状を呈する。123～132は外面に併行叩き目、内面に車輪ないし花弁状の当て具痕が見られる。116、118～132は奈良時代後半前後に時期比定されよう。

（4）瓦質土器と土師系土器（第51図133～137、図版XX）

133は鉢の破片と思われる。口縁部が小さく肥厚する。内面にヨコハケが見られる。風化が進み、判定が難しい土器片。弥生土器の可能性もある。135は壺の口縁部か。内面に網目様の圧痕がある。黄橙色を呈する。134は瓦質の土鍋。136、137も瓦質土器で火鉢片であろう。

（5）陶器・陶磁器類（第51図138～155、図版XX・XX）

138は東播系の鉢。139は備前焼の擂鉢片。口縁部が内傾し、端部巾がやや広くなっている。ⅣBで15世紀前半に属する。140、141は肥前系の陶器片。140は擂鉢、141は大皿の破片である。142は石見焼の鉢片。

143～149は中国製陶磁器。143は白磁の底部で所属期は13世紀頃と思われる。144～148は青磁の破片。144、145は龍泉系で12世紀中頃から13世紀中頃。148は香炉片である。149は青花の碗片。中世末のもの。150、151は朝鮮系の磁器碗。

152、153は伊万里焼の碗。154は瀬戸美濃系の塊。155は唐津の塊で16世紀末から17世紀前半に属する。

B．表面採集された土器（第52図156～161）

156～159は須恵器の蓋坏の蓋と身。156は輪状つまみが付く蓋。天井が高く、口径が小さい。口縁端部が鳥嘴状にわずかに尖る。石見空港編年のⅢ期と見られる。157から159は坏身。体部から口縁部にかけて逆「ハ」字状に直線的に開いている。158は高台が底部縁に付いている。これらは156の蓋と同時期であろう。160は甕の体部下位片。161は紡錘形の土錘。以上の他にも多数の須恵器・土師器の破片が採集されている。

C．出土箇所不特定の土器（第53～54図162～174、図版XX）

162～174では寺の前区出土で出土箇所を特定できなかった遺物中、種類・器種・形状が明らかな土器の図を示した。162は土師器の坏の完形品。焼成が悪いが器形全体をうかがうことのできるものである。時期は古墳時代。163～168は須恵器。163～165は奈良時代に属する高台付の坏（163）、壷体部（164）、甕体部（165）である。165の内面には2種類の車輪状もしくは花弁状の当て具痕が認められる。166は古墳時代末の高坏脚。167は鉦状のつまみが付く坏の蓋。7世紀後半頃と思われる。168の鉢と169の高台は7～8世紀頃であろうか。170は瀬戸美濃系の天目茶碗の口縁部。171は土師器の大甕片。172は備前焼壺の口縁部。173は鎬蓮弁文のある青磁碗。龍泉系B1類。174は瓦質の火鉢片。

D．密集状態で発見された土器（第55～56図175～208、図版XX・XX）

SB－10・11の覆土上面から付近一帯で検出された須恵器である。175～183は輪状つまみが付く坏の蓋である。天井部が比較的高く、口縁端部が鳥嘴状に尖るのが特徴といえよう。微細な点で個体差がみられるが、おおよそ一型式の範囲に収まるものと思われる。184～207は坏身である。184は器高が高く口縁端部が丸味をもつ。185～199は平底で体部から口縁部までほぼ直線的に外傾し、口縁端部が尖る。底部にはヘラ起しの回転痕が明瞭に残り、焼成がやや甘く、体部には重ね焼きの

痕が見られる。200～207は高台付の坏身。高台が底部と体部の境の湾曲部に付き、体部が直線的に外傾し、口縁端部が尖っている。206、207は体部が直立に近く、他の高台付坏とは多少趣を異にしているが、偏差の範囲であろうか。いずれにしても175～207の蓋と身はその形状から石見空港編年Ⅲ期に比定され、実年代が凡そ8世紀後半～9世紀初頭に当るとしてよいと考えられる。208は底部に円孔があり、高台の付いた甑と思われる。209は高い高台。169と同類であるが、上部の器体は不明。

E. その他の遺物（第57～62図210～270、図版XX・XXI・XXII・XIII）

210～271は寺の前区出土でA～Dに属さない遺物である。

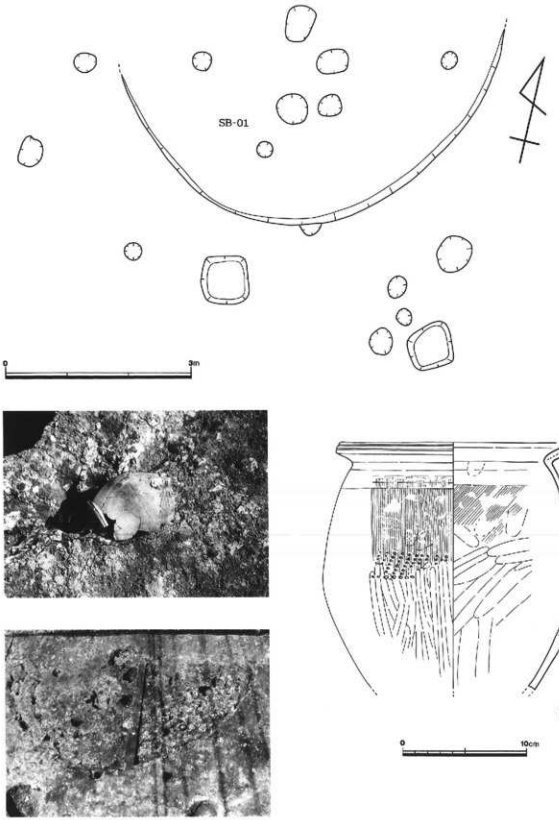
i）弥生土器（210～214）：210は甕。逆「ハ」字状に短く開く口・頸部。端部を上下に小さく拡大し、外面に凹線3条が巡る。内面頸部以下ケズリとなる。Ⅳ－2であろう。211～213は甕。211、212は複合口縁状。213は複合口縁。Ⅴ－2から3に相当する。214は多条の並行曲線文が施された甕の体部片か。Ⅳ期？

ii）土師器（215～230）：215～220は甕。口・頸部が大きく「く」字状に屈曲するもの（215～217）、短く強く屈曲するもの（218、219）、大きく外反するもの（220）が識別される。時期差であろうか。221、222は椀。前者は椀か小型の鉢に近い。223は牛角状把手が付く甑。224は高杯で坏部と脚部の接合部が稜のある段状を呈する。225、226は甑の底部。底部縁近くに円孔がある。227は環状把手。228、229は牛角状把手。230は甕で製塩土器かと思われる。以上の土師器は古墳時代から奈良時代に所属するものと考えられる。231は紡錘形　土錘。232、233釘状の土製品で瓦の焼成時の溶着を防ぐハセ。

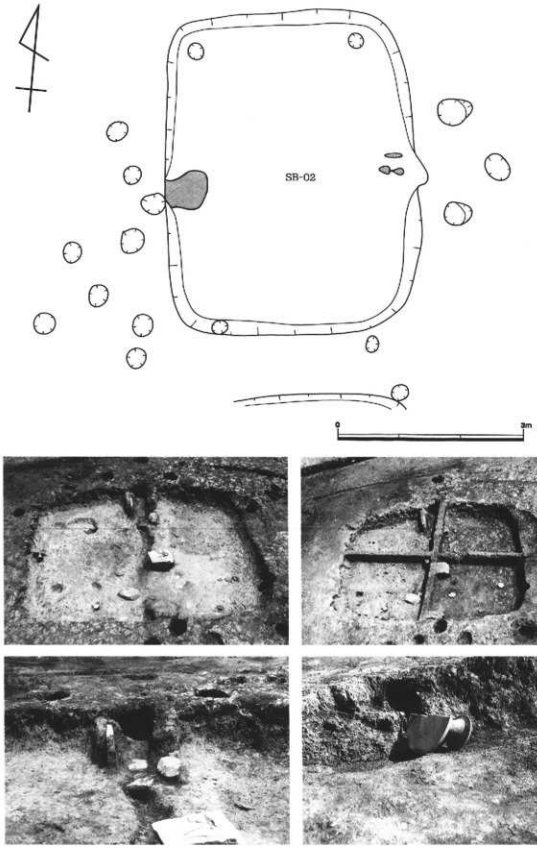
iii）須恵器（234～257）：234は坏の蓋。天井部と体部の境に突帯状の段がある。出雲4期か。235～243は坏身と蓋。235～237は石見空港編年Ⅲ期に属する。238は高台付の坏と思われる。239～242は回転糸切り痕が見られる。239は体部から口縁部に至る器壁が高く、やや古式の相を示すが、その他は9世紀末から10世紀初めに属し、おそらく、石見地方では最新型式の須恵器の一群と思われる。244～247は壺の体部でロクロの回転痕が明瞭に残っている。奈良時代かそれ以降と思われる。248は円面硯の脚であろう。奈良時代か。249～257は甕の口縁部・体部片。体部の外面には並行叩き目。内面には同心円状の叩き目や車輪状もしくは花弁状の叩き目が見られる。奈良時代を中心とする時期の甕であろう。

iv）土器以外の遺物（258～262）：258は石製の風字硯。陸部が相当窪み、かなり使用されたことが推定される。259は円礫の磨石。260は石皿か叩石。261は黒曜石の剥片。スクレイパーか。262は砥石で研ぎ面が大きく窪む。

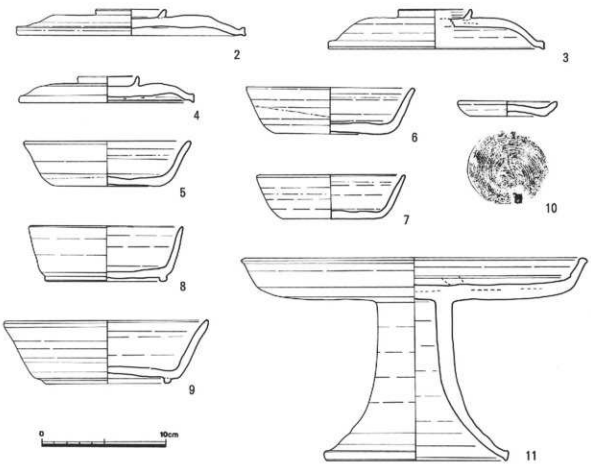
263～270は鉄関連遺物である。263は短冊状の鉄板で破面には合せ鍛えの状況が見て取れる。長辺の一方に刃部がある。鋤・鍬先鉄刃の両端着装部を欠出したものか。264は鉄鏃か鉇と思われる鉄片。265、268は刀子か。266、267は鎌の刃部。269は塊形滓。270は流動滓。



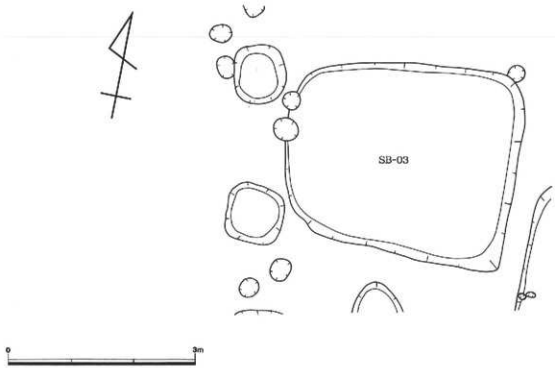
第15図　ＳＢ－01平面略図《上段》・遺構遺物検出写真《下段左上－土器出土状態、左下－全景（南上方より）》・出土遺物実測図《下段右》



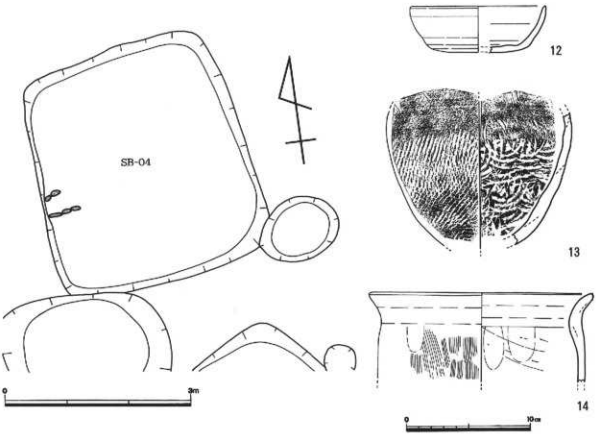
第16図　ＳＢ－02平面略図《上段》・遺構遺物検出写真《下段左上－全景（左側より）、左下－かまど（東側より）、右上－全景（東側より）、右下－遺物出土状態（北側より）》



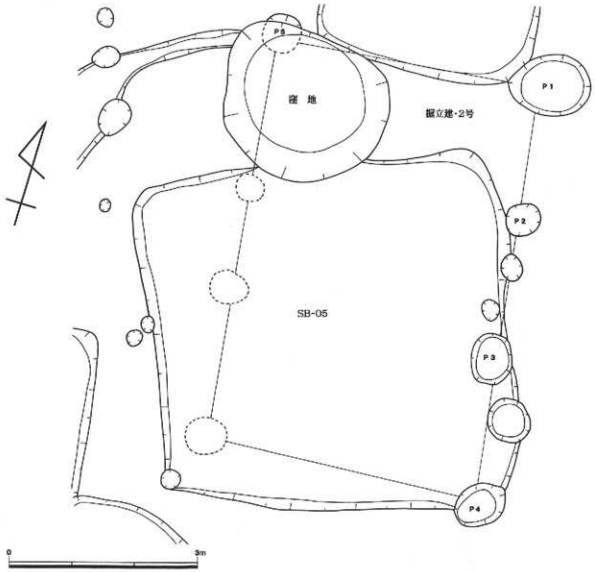
第17図　ＳＢ－02出土遺物実測図

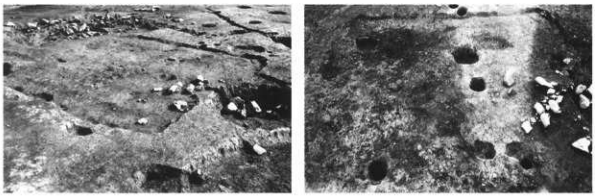


第18図　ＳＢ－03平面略図

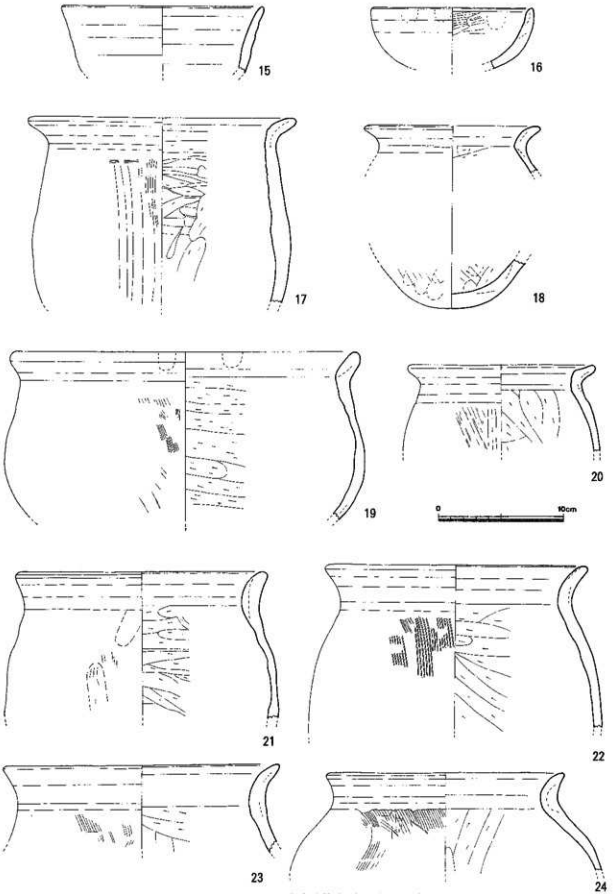


第19図　ＳＢ－04平面略図《上段左》・遺構遺物検出写真《下段左上－全景（南東側より）、左下－かまど、右上－全景（南側より）、右下－かまど》・出土遺物実測図《上段右》

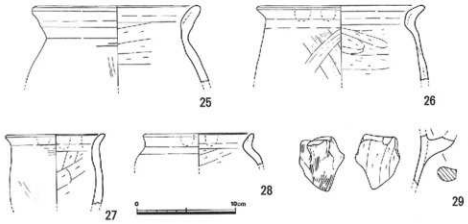




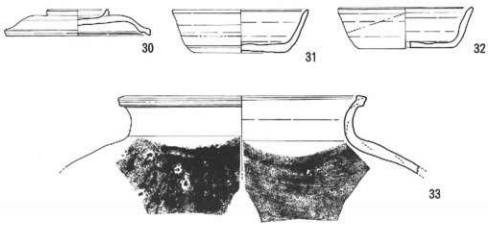
第20図　ＳＢ－05平面略図《上段》・遺構検出写真《下段右－全景（北東側より）、左－全景（北東側より）》

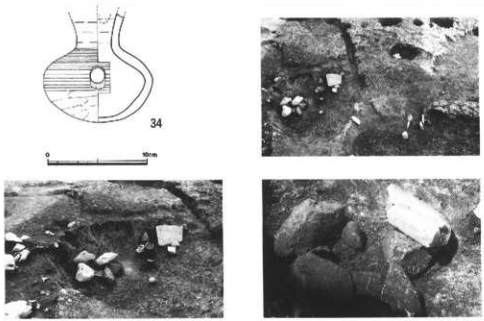


第21図　ＳＢ－05出土遺物実測図（その１）

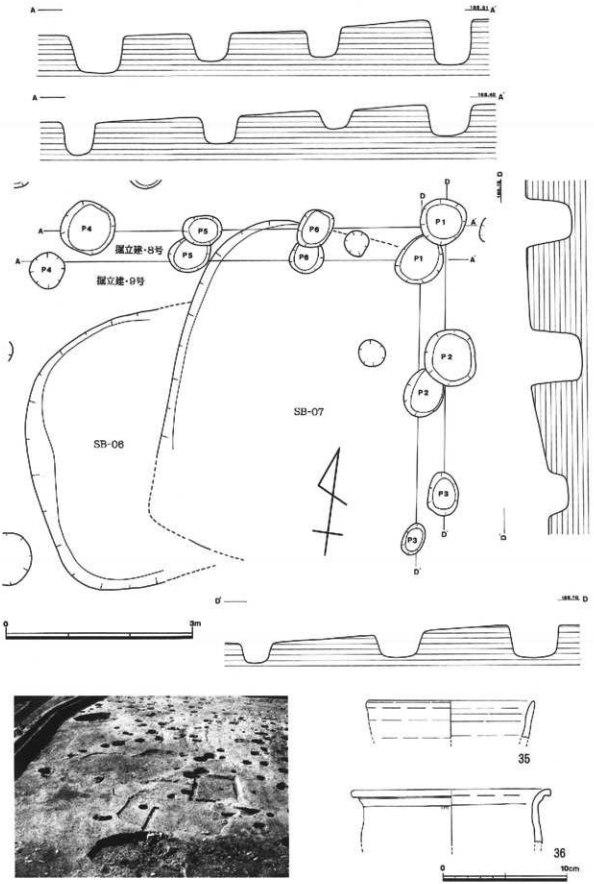


第22図　ＳＢ－05出土遺物実測図（その２）

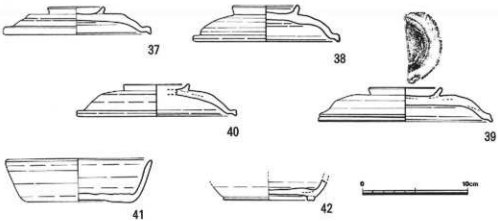




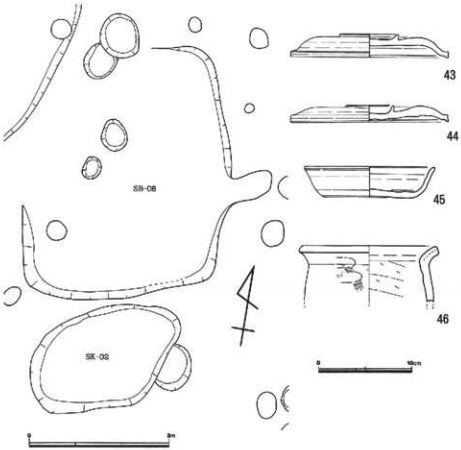
第23図　ＳＢ－05遺物実測図・「窪地」遺構遺物検出写真《左下－「窪地」全景（北東側より）、右上－「窪地」とＳＢ－04（北側より）、右下－「窪地」内の石囲い遺構》



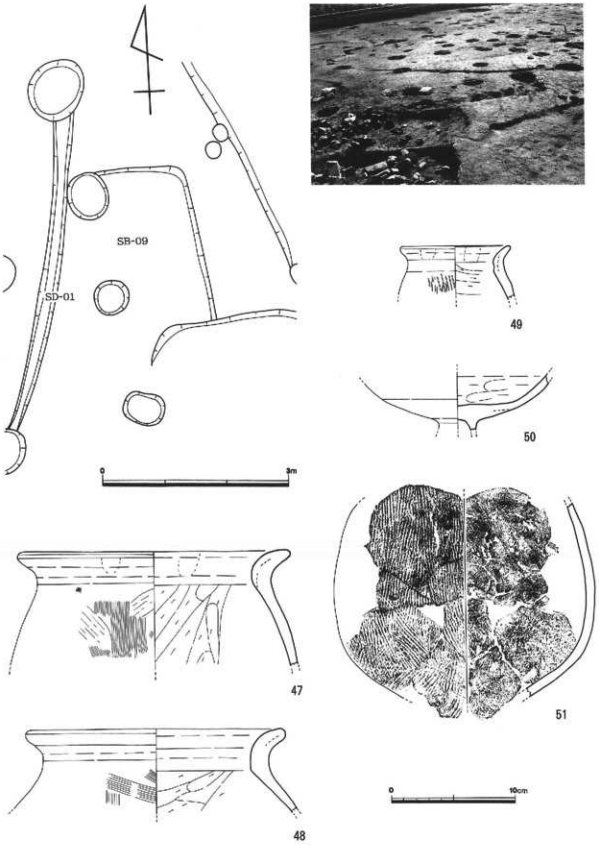
第24図　ＳＢ－06・07平面略図・８号・９号建物平面、断面図《上段》・遺構検出写真《下段左－東側より》・ＳＢ－06出土遺物実測図《下段右》



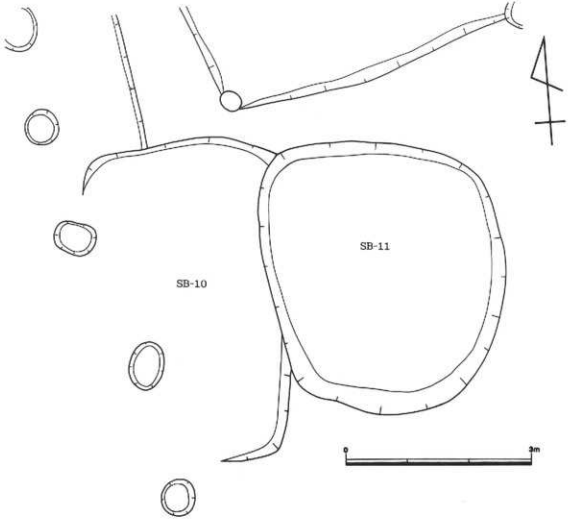
第25図　ＳＢ－07出土遺物実測図

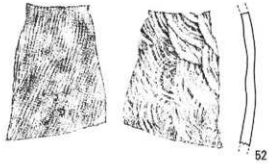


第26図　ＳＢ－08・ＳＫ－02平面略図《上段左》・遺構検出写真《下段左－全景（南側より）、右－かまど痕出穴》・出土遺物実測図《上段右》

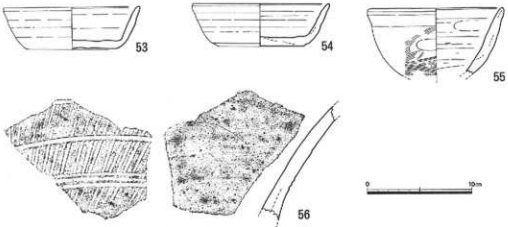


第27図　ＳＢ－09・ＳＤ－01平面略図《左上》、遺構検出写真《右最上－全景（北東側より）》・出土遺物実測図

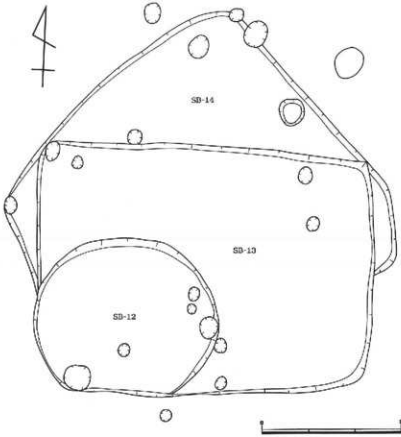


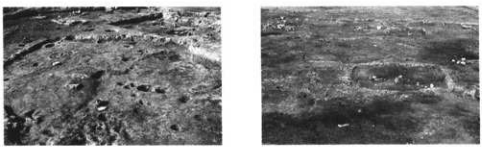


第28図　ＳＢ－10・11平面略図《上段》・遺構遺物検出写真《下段左－全景（南西側より）》・ＳＢ－10出土遺物実測図《下段右》

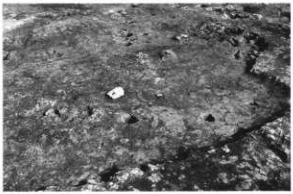


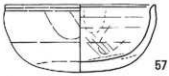
第29図　ＳＢ－11出土遺物実測図

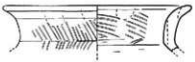


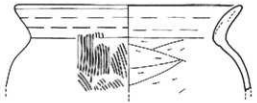


第30図　ＳＢ－12・13・14平面略図《上段》・遺構遺物検出写真《下段左－全景（東側より）、右－ＳＢ－12弥生土器出土状態》

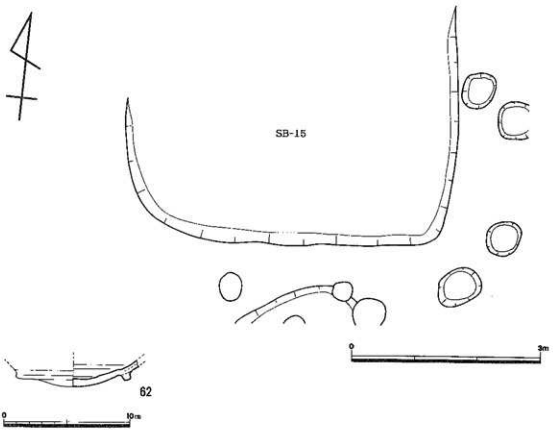




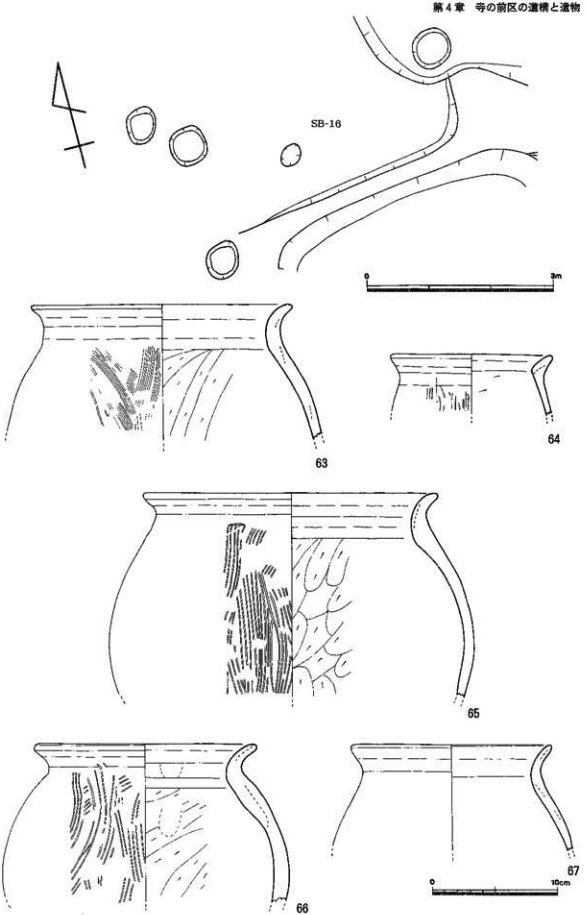




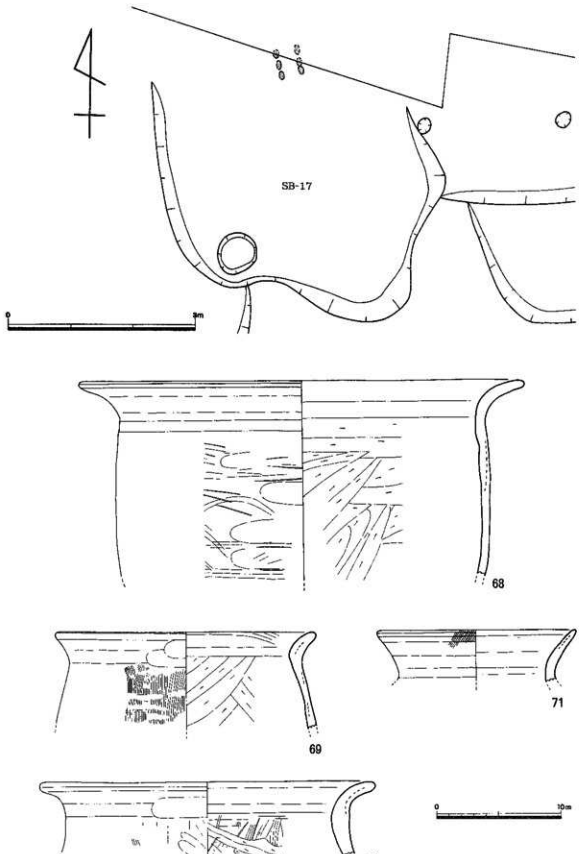
第31図　ＳＢ－12・13・14遺構遺物検出写真《左上－全景（北側より）、左中・右上－全景（南西側より）》・出土遺物実測図



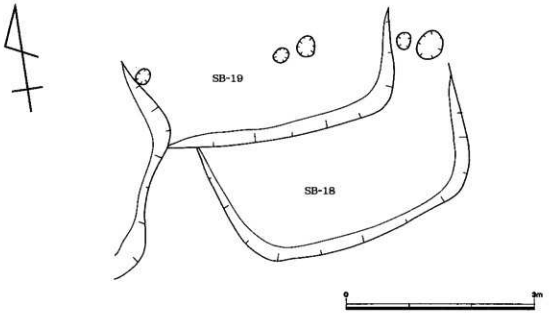
第32図　ＳＢ－15平面略図・出土遺物実測図



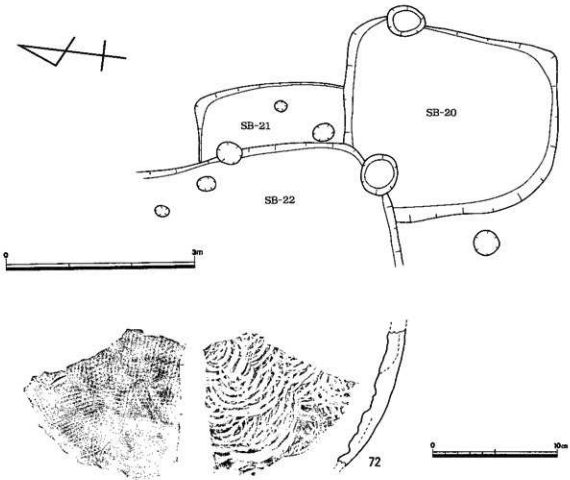
第33図　ＳＢ－16平面略図《最上段》・出土遺物実測図



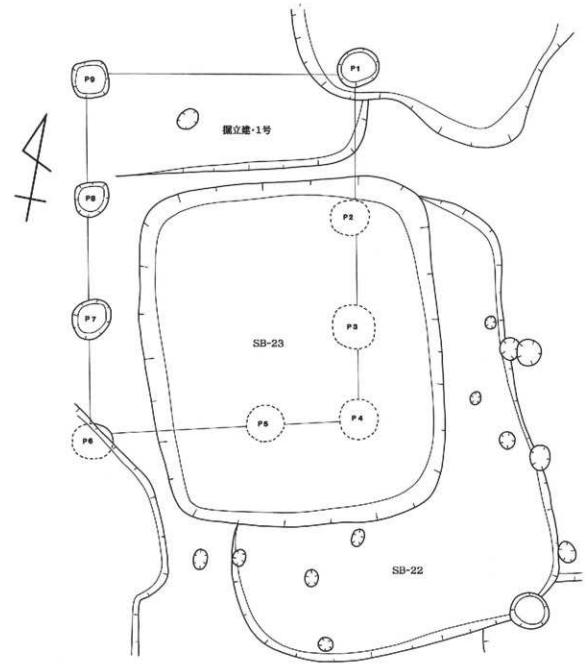
第34図　ＳＢ－17平面略図《最上段》・出土遺物実測図

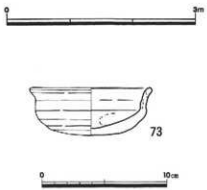


第35図　ＳＢ－18・19平面略図

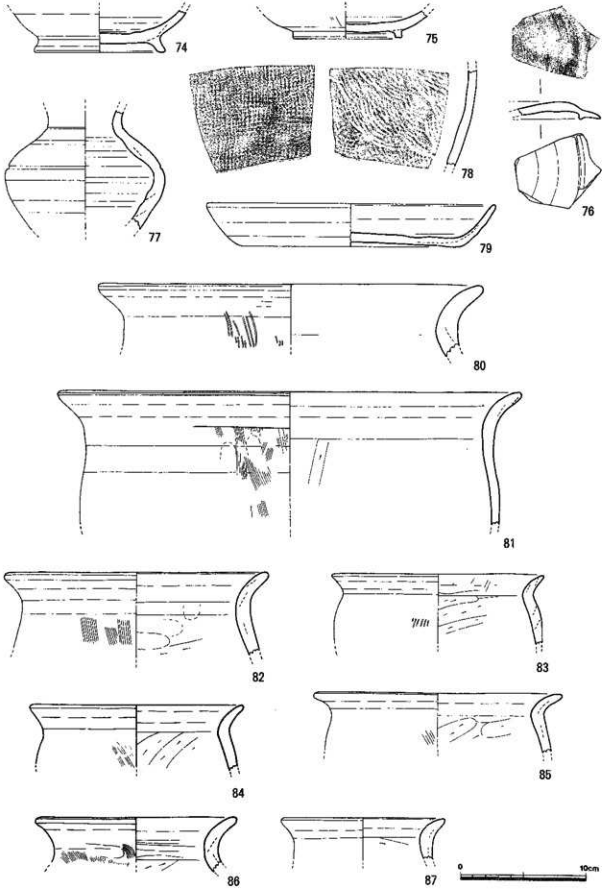


第36図　ＳＢ－20・21平面略図・ＳＢ－20出土遺物実測図

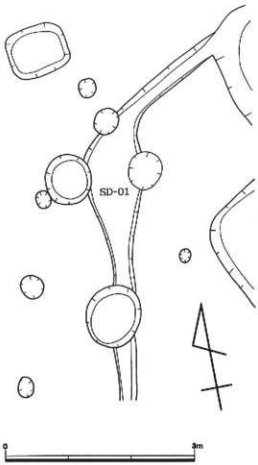




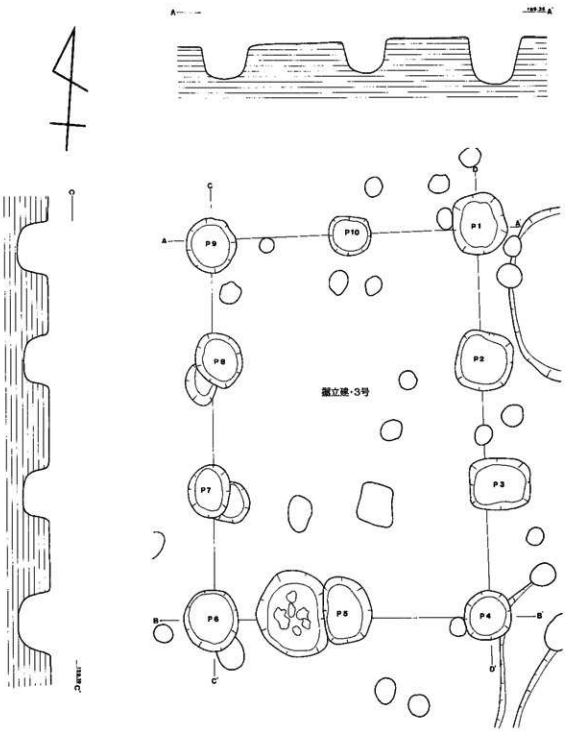
第37図　ＳＢ－22・23・１号建物平面略図・ＳＢ－23全景写真（西側より）・ＳＢ－22出土遺物実測図



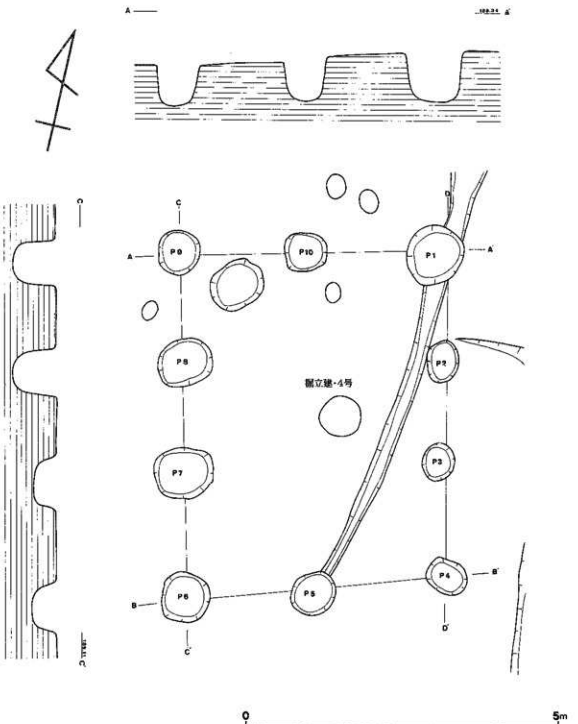
第38図　ＳＢ－23出土遺物実測図



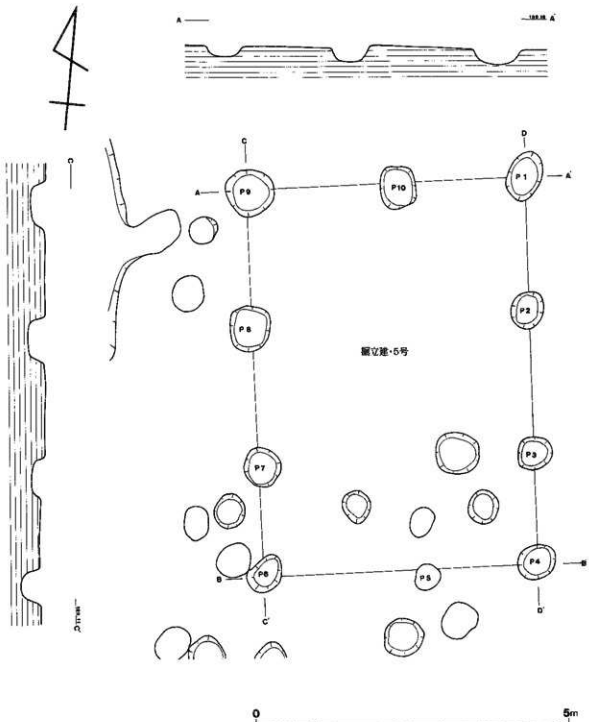
第39図　ＳＤ－01平面略図・検出状態写真《右上（南側より）》・出土遺物実測図



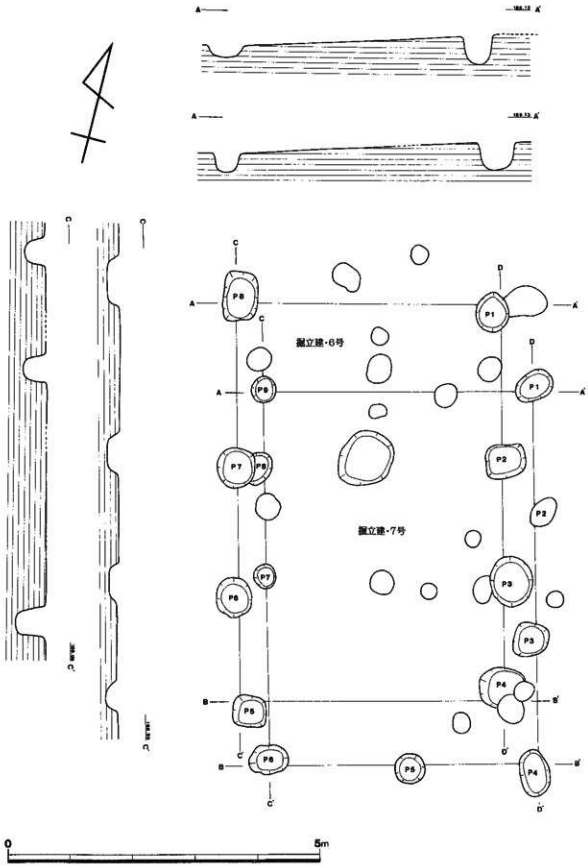
第40図　3号建物跡平面・断面図



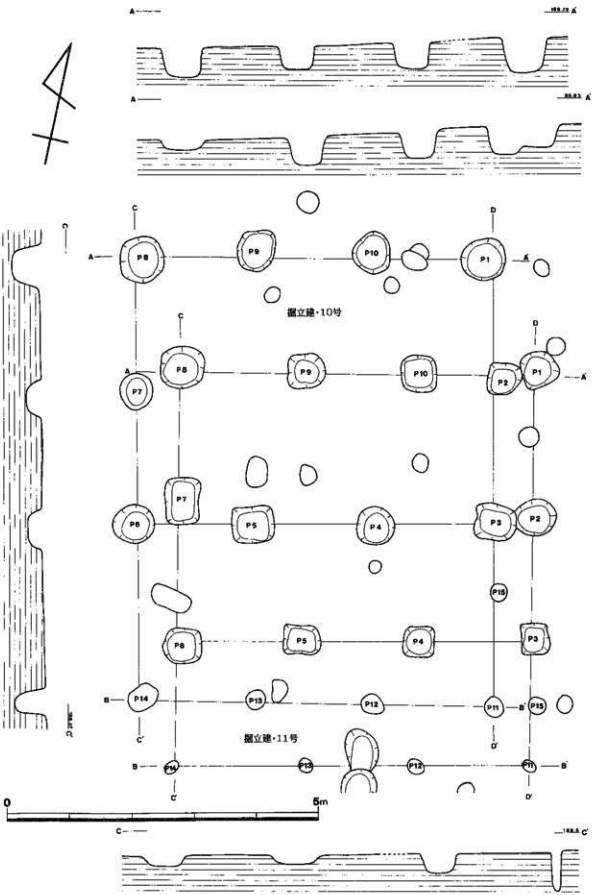
第41図　4号建物跡平面・断面図



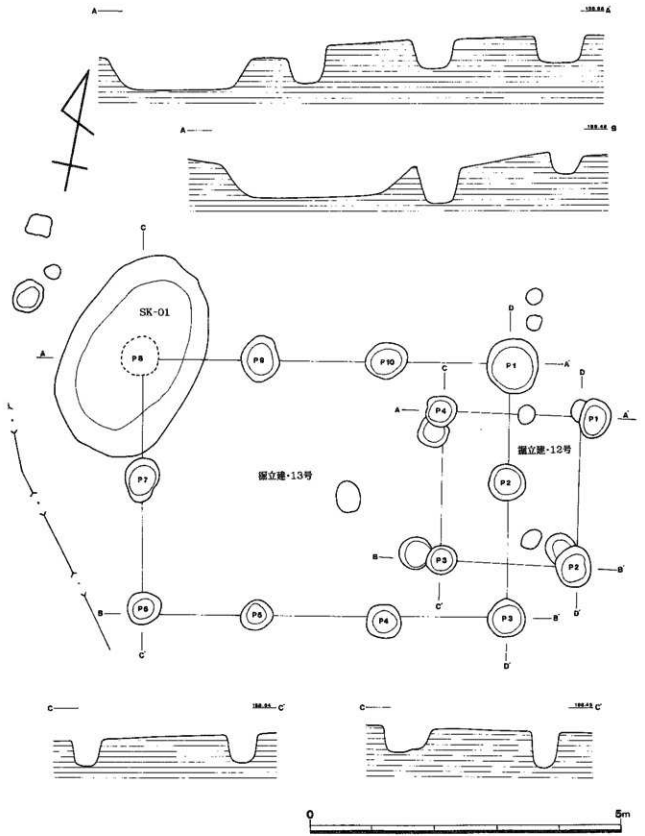
第42図　5号建物跡平面・断面図



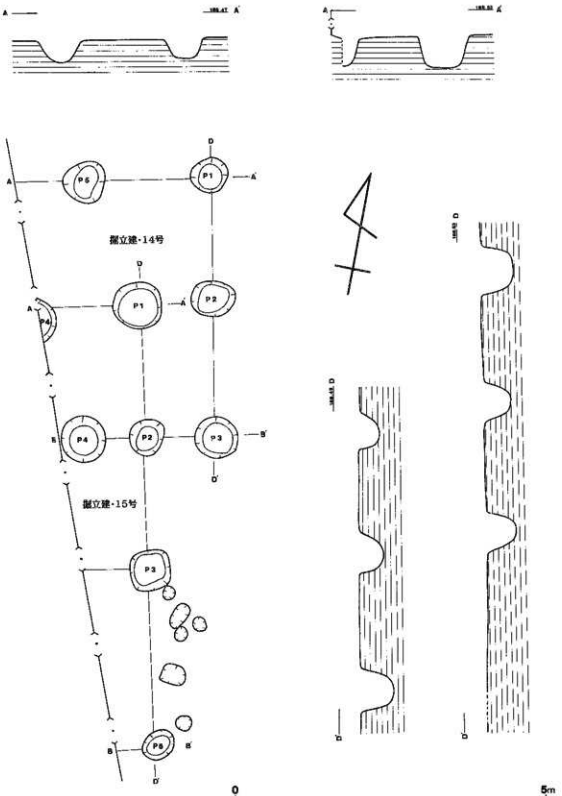
第43図　6号・7号建物跡平面・断面図



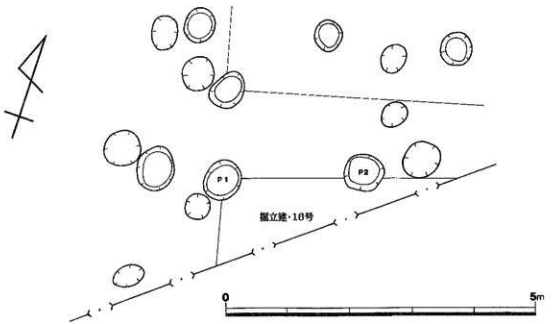
第44図　10号・11号建物跡平面・断面図



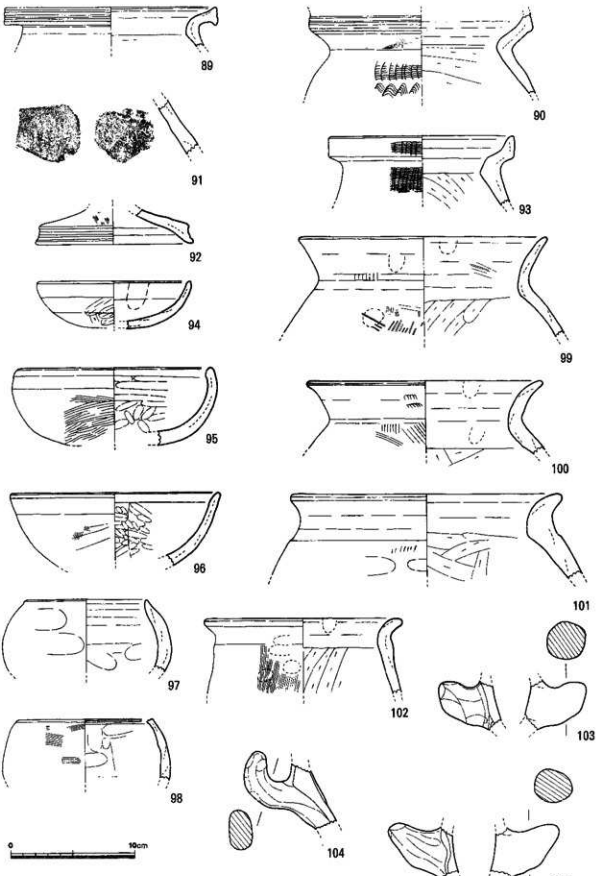
第45図　12号・13号建物跡平面・断面図



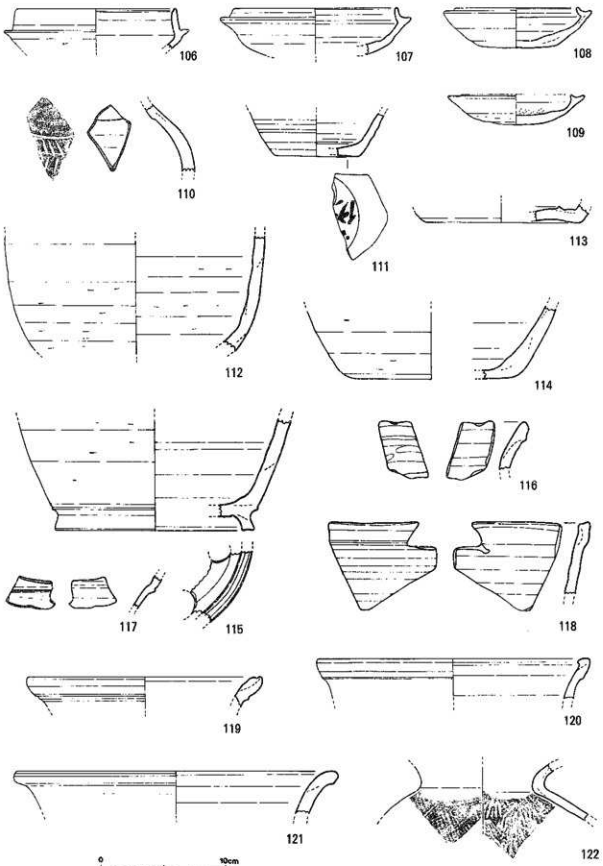
第46図　14号・15号建物跡平面・断面図



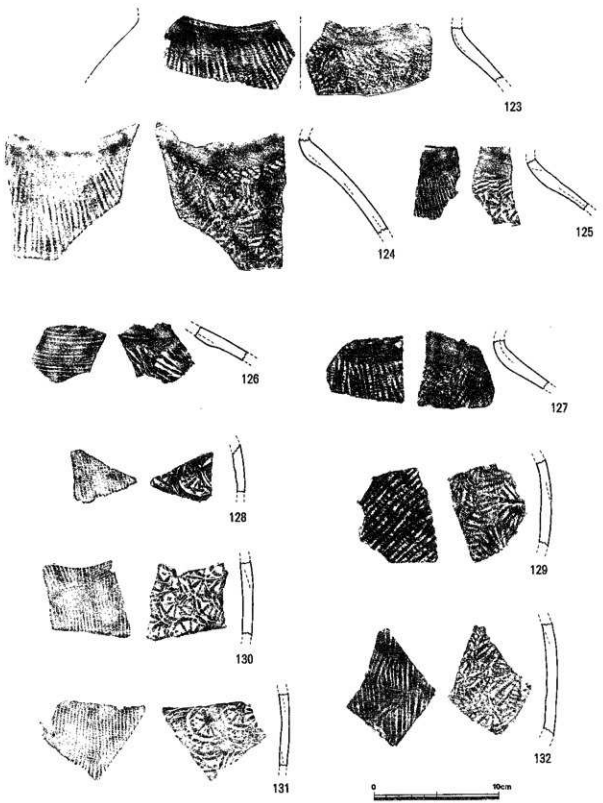
第47図　16号建物跡平面図



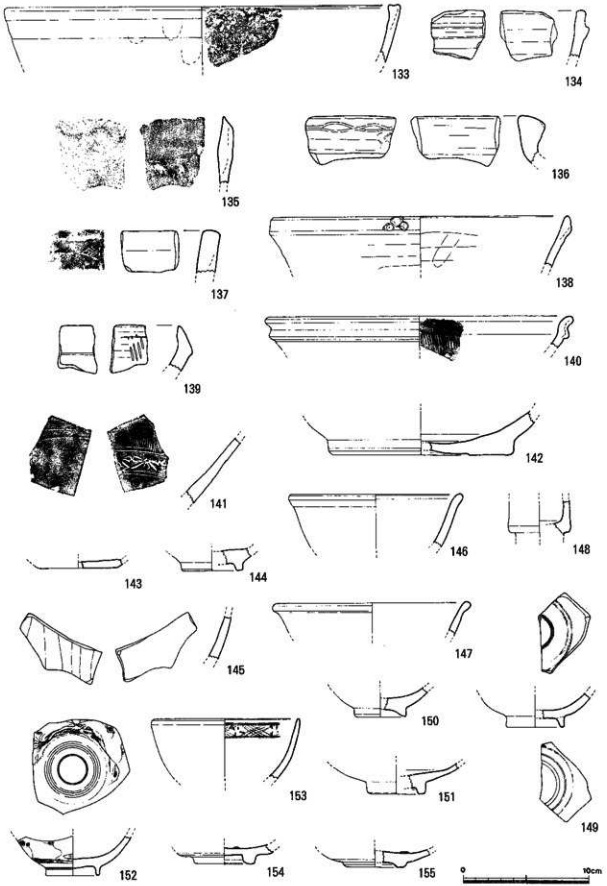
第48図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その1）



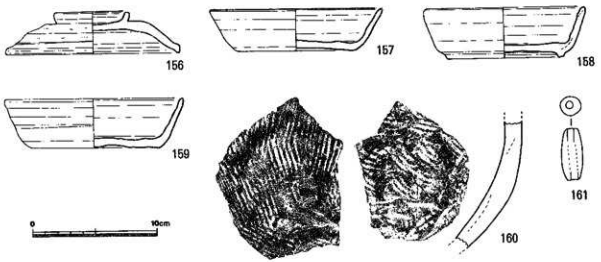
第49図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その２）



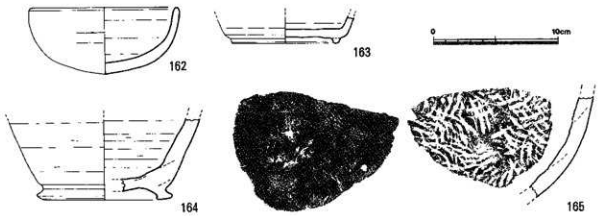
第50図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その３）



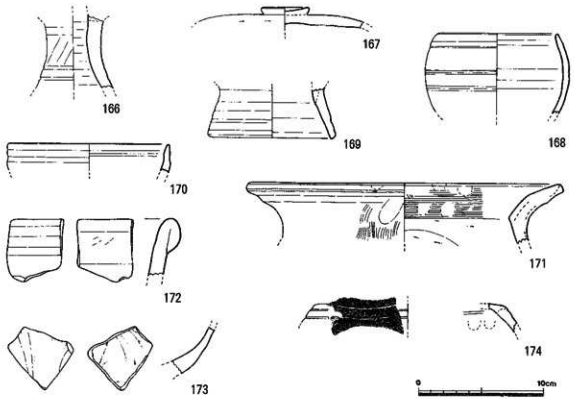
第51図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その４）



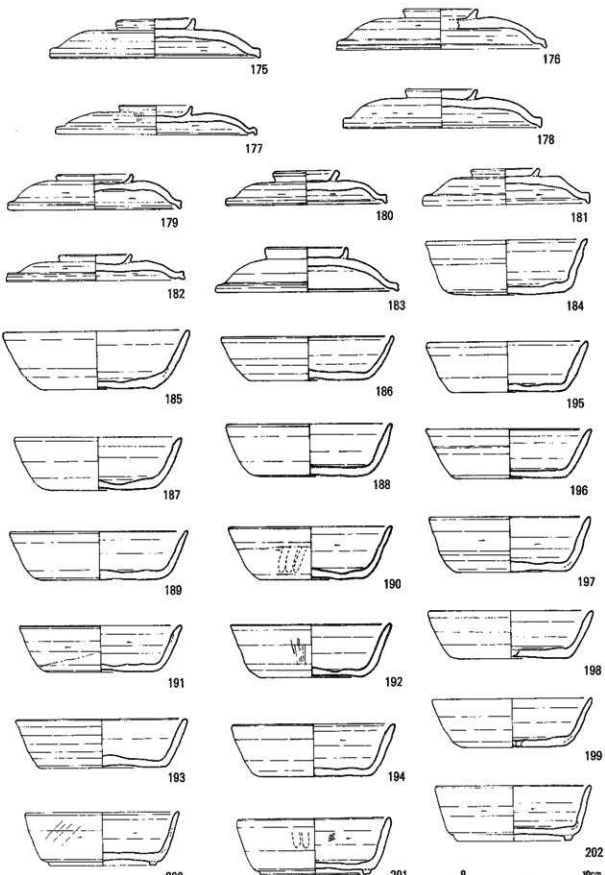
第52図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その５）



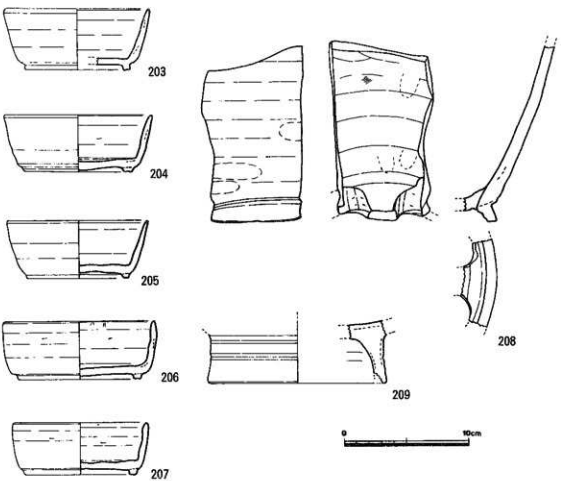
第53図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その６）



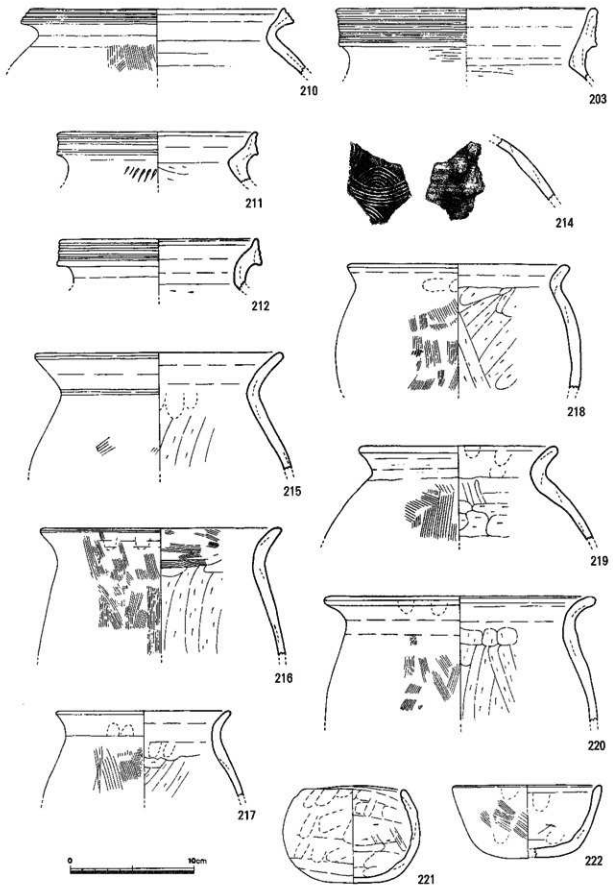
第54図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その７）



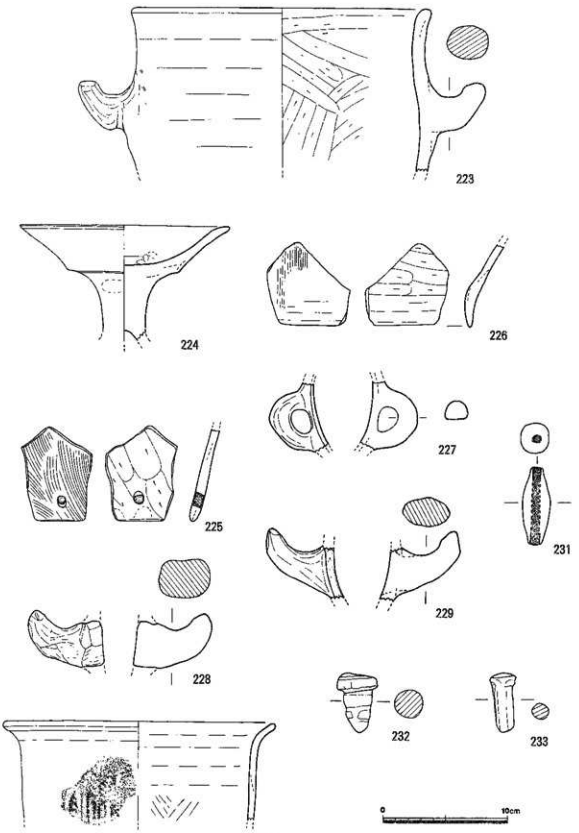
第55図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その８）



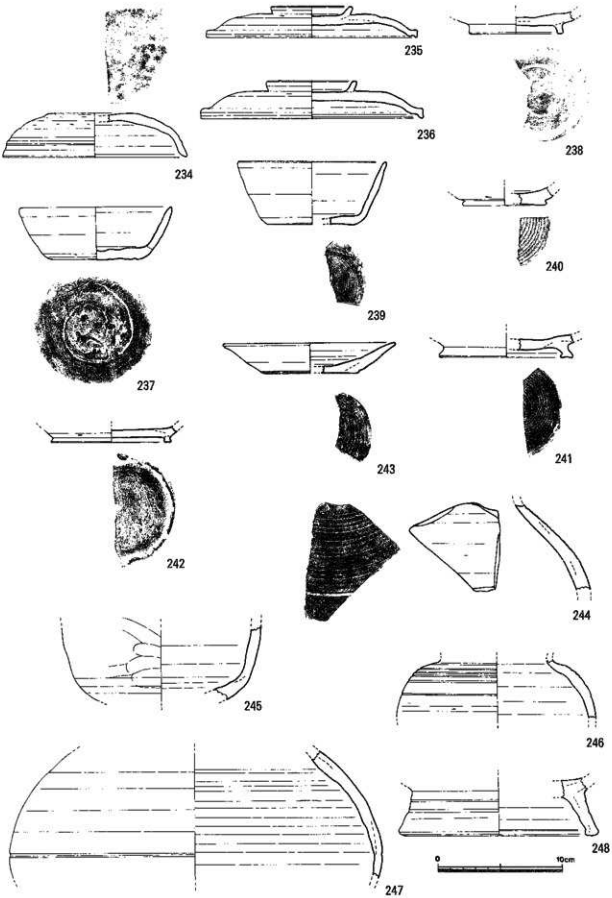
第56図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その９）



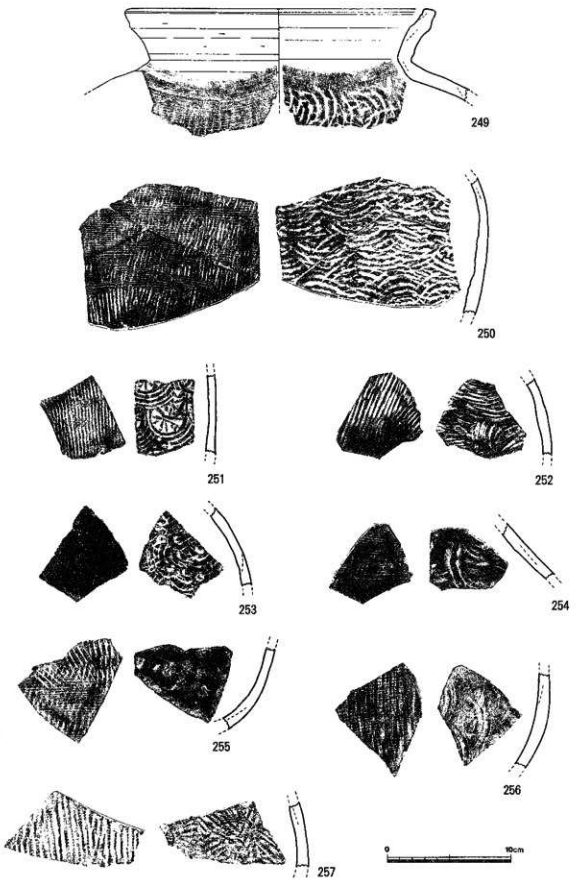
第57図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その10）



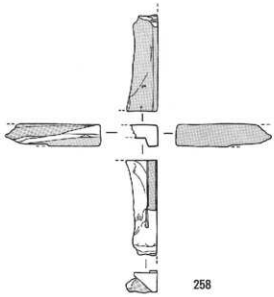
第58図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その11）

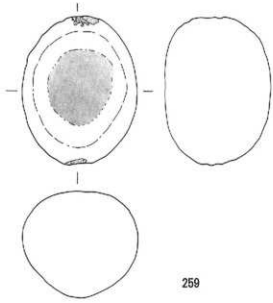


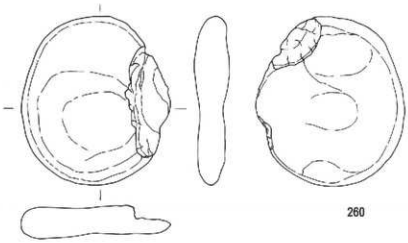
第59図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その12）

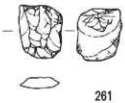


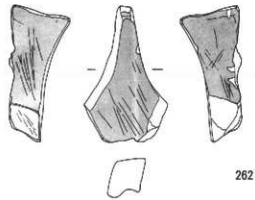
第60図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その13）



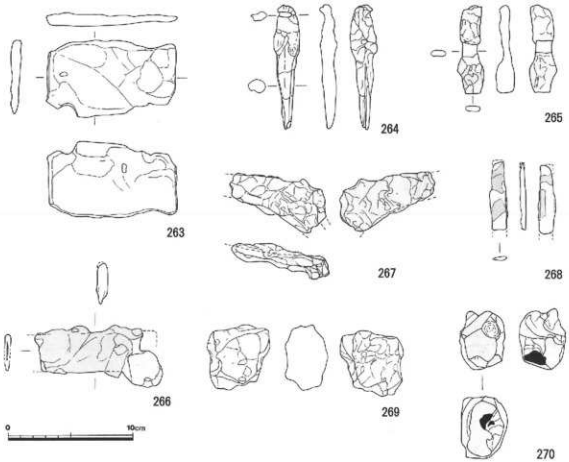








第61図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その14）



第62図　寺の前区遺構外出土遺物実測図（その15）

第3表　天蔵寺区出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	SB01	甕(弥生土器)	18.0	…	…	外：2条の凹線　刺突列点文 内：ハケ　ナデ	外：灰白色 内：浅黄橙色	～1㎜ 程度の砂粒を含む	良好	スス付着 Ⅳ－1期
2	SB02 －4	蓋 (須恵器)	18.4	2.2	つまみ径 5.2	外：天－回転ヘラケズリ 回転ナデ 内：回転ナデ	褐灰色	～2㎜ 〃	〃	貼り付け輪状つまみはほぼ完形品
3	…10	蓋 (須恵器)	17.4	3.2	つまみ径 6.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色 (内面に黒点)	～2㎜ 〃	〃	貼り付け輪状つまみ
4	…8	蓋 (須恵器)	14.0	2.1	つまみ径 4.8	強い回転ナデ	褐灰色	～2㎜ 〃	〃	輪状つまみ
5	6	坏 (須恵器)	13.6	3.6	8.6	外：回転ナデ 底－回転ヘラ切り痕のちナデ 内：回転ナデ	灰白色	～1㎜ 〃	やや不良	重ね焼き跡 (褐灰色)
6	…5	坏 (須恵器)	11.6	3.7	9.0	外：回転ナデ 底　回転ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ	灰白色	～1㎜ 〃	〃	重ね焼き跡 (灰色)
7	…11	坏 (須恵器)	12.0	5.5	8.0	外：回転ナデ 底－回転ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ	灰白色	～2㎜ 〃	〃	重ね焼き跡 (明褐灰色)
8	9	坏 (須恵器)	12.4	4.4	9.6	外：回転ナデ 底－回転ヘラ切り痕のちナデ 内：回転ナデ	灰色	～2㎜ 〃	良好	貼り付け高台
9	…3	坏 (須恵器)	16.4	5.0	10.0	外：強い回転ナデ 底－回転ヘラおこし 内：強い回転ナデ	灰色	～2㎜ 〃	〃	貼り付け高台 厚く施釉
10	－3－②	小皿 (土師器)	8.0	1.2	6.0	外：回転ナデ 底　回転糸切り痕 内：強い回転ナデ	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	～8㎜ 〃	〃	中世
11	…2	高坏 (須恵器)	28.0	16.2	14.6	外：口－回転ナデ 坏　ヘラケズリのちナデ 脚－回転ナデ 内：口－回転ナデのちナデのち指圧痕 脚－回転ナデ	灰白色	～4㎜ 〃	〃	
12	SB04 16	坏 (須恵器)	11.0	3.7	5.0	外：回転ナデ 底－回転ヘラナデ 内：回転ナデ	暗青灰色	～2㎜ 〃	〃	
13	…11	小型壺 (須恵器)	－	－	－	外：回転ナデ　クチ、ナナメ方向のタタキ目 体下　ところどころ回転ナデ 内：体下－回転ナデ　同心円状のタタキ目	明褐灰色	密	〃	
14	14	甕 (土師器)	18.0	－	－	外：口　ヨコナデ 体－ケズリのち指ナデ 内：口－ヨコナデ 体－ケズリのちナデ	明黄褐色	～2㎜ 程度の砂粒を含む	普	
15	SB05 －39	坏 (須恵器)	16.0	－	－	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～1㎜ 〃	良好	
16	…49	甕 (土師器)	13.0	－	－	外：ナデ　指圧痕 内：強いミガキ　指圧痕	灰白色	～2㎜ 〃	〃	
17	…26	甕 (土師器)	21.0	…	…	単純口縁 外：口　ヨコナデ 体－タテハケのちナデ 内：口－ヨコナデ 体－ケズリ	にぶい橙色	～5㎜ 〃	〃	
18	－21 －22	小型甕 (土師器)	16.0	約 14.5	…	単純口縁 外：口　ヨコナデ 体－ナデのち指圧痕　指ナデ 内：口－ヨコナデ 体　ケズリのち指圧痕	黄褐色	～2㎜ 〃	〃	金雲母
19	…18	甕 (土師器)	28.0	－	－	単純口縁 外：口－ナデのち指圧痕 体－ハケのちナデ 内：口－ナデのち指圧痕 体－ケズリ	にぶい黄橙色	～3㎜ 〃	普	金雲母
20		鉢 (土師器)	15.0	－	－	単純口縁 外：口－ヨコナデ 体　ナデ 内：口　ヨコナデ 体－ケズリ	黄褐色	～2㎜ 〃	良好	
21	…20	甕 (土師器)	20.0	…	…	単純口縁 外：口－ヨコナデのち指圧痕　指ナデ 体－ハケのちナデのち指ナデ 内：口－ヨコナデ 体－ケズリ	にぶい黄橙色	～4㎜ 〃	普	
22	46	甕 (土師器)	21.0	－	－	単純口縁 外：口－ヨコナデ 体－ハケ 内：口－ヨコナデ 体－ケズリ	明黄褐色	～2㎜ 〃	〃	風化

種図図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
23	SB05 −45	甕 (土師器)	22.0	−	−	単純口縁 外：口−ヨコナデ 体−ハケ目 内：口−ナデ 体−ケズリ	浅黄橙色	～3mm 程度の砂粒を含む	普	風化
24	−31	甕 (土師器)	19.0	−	−	単純口縁 外：口−ヨコナデ 体−粗いナナメのハケ 内：口−ヨコナデ 体−ケズリ	黄褐色	～3mm 〃	〃	風化
25	−37	甕 (土師器)	17.0	−	−	単純口縁 外：口−ヨコナデ 体−ハケのちナデ 内：口−ヨコナデ 体−ケズリ	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	～2mm 〃	〃	外：スス付着
26	−25	甕 (土師器)	17.0	−	−	単純口縁 外：口−ヨコナデのち指ナデ 体−ナナメ方向の粗いハケのち 雑なナデ 内：口−ヨコナデ 体−ケズリ	黄褐色	～2mm 〃	良好	
27	−24	小型甕 (土師器)	10.0	−	−	外：口−ナデのち指圧痕 体−ナデ 内：口−ナデのち指圧痕 体−ケズリ	にぶい黄橙色	～2mm 〃	普	風化
28	−24	甕 (土師器)	11.0	−	−	外：口−ナデのち指ナデ　指圧痕 内：口−ナデのち指ナデ　指圧痕 体−ケズリ	黄褐色	～2mm 〃	〃	
29	−43	把手 (土師器)	−	−	−	外：口−ハケのち指ナデ 内：ケズリ	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	～2mm 〃	良好	外：スス付着
30	SB05 上部遺地 −224	蓋 (須恵器)	つまみ径 6.2	2.0	14.5	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：暗灰色 内：灰色	密	〃	施釉状に自然釉がかかる 輪状つまみ
31	−225	坏 (須恵器)	13.8	4.4	8.8	外：回転ナデ 底−回転ヘラおこし 内：回転ナデ 底−強い回転ナデ	灰白色	～5mm 程度の砂粒を含む	〃	重ね焼き跡
32	−226	坏 (須恵器)	13.6	4.1	9.6	外：回転ナデ 底−回転ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ 底−強い回転ナデ	灰白色	～1mm 〃	〃	重ね焼き跡
33	−223	甕 (須恵器)	25.5			外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：灰オリーブ色 内：灰色	～2mm 〃	〃	施釉状に自然釉 (濃緑色)
34	−227	はそう (須恵器)			−	穿孔あり 外：口−回転ナデ 体−カキ目状の条痕　ナデ 内：口−回転ナデのち指圧痕 底−回転ナデ	灰色	微砂粒	〃	
35	SB06 −140	坏 (須恵器)	13.6		−	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：黄灰色 内：灰色	～2mm 程度の砂粒を含む	〃	
36	−139	甕 (土師器)	16.0	−	−	外：口　ヨコナデ 内：口−ヨコナデ	黄褐色	～2mm 〃	不良	風化
37	SB07 −126	蓋 (須恵器)	13.2	3.0	つまみ径 5.8	外：回転ナデ 内：天−回転ナデのち指圧痕	外：明褐灰色 内：灰色	～2mm 〃	良好	貼り付け輪状つまみ
38	−133	蓋 (須恵器)	18.4	3.4	つまみ径 6.4	外：強い回転ナデ 内：天−強い回転ナデのち指ナデ 体　回転ナデ	灰色	～2mm 〃	〃	輪状つまみ ほぼ完形品
39	−128	蓋 (須恵器)	18.6	3.2	つまみ径 7.0	外：回転ナデ 内：天−つまみ内に爪跡	外：灰色 内：暗灰色	～2mm 〃	〃	貼り付け輪状つまみ
40	−137	蓋 (須恵器)	15.0	3.4	つまみ径 6.4	外：回転ナデ	灰オリーブ	～3mm 〃	不良	貼り付け輪状つまみ 内：風化
41	−127	坏 (須恵器)	14.0	4.0	10.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底−強い回転ナデ	灰白色	～2mm 〃	〃	重ね焼き跡
42	−129	坏 (須恵器)	−	−	(高台径) 8.8	外：回転ナデ 底−回転ヘラおこしのちナデ 内：底　強い回転ナデのち指圧痕	灰色	～1mm 〃	良好	貼り付け高台
43	SB08 −119	蓋 (須恵器)	17.0	2.5	つまみ径 6.4	外：回転ナデ 内：回転ナデのち指ナデ	内：青灰色	～2mm 〃	〃	外：自然釉
44	−121	蓋 (須恵器)	17.0	1.7	つまみ径 5.2	外：回転ナデ 内：強い回転ナデ　つまみ内指圧痕	青灰色	～3mm 〃	〃	外：自然釉 輪状つまみ ほぼ完形品
45	−120	坏 (須恵器)	14.0	3.3	9.4	外：回転ナデ 底−回転ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ 底−強いナデのちナデ	灰褐色	～2mm 〃	〃	

神図図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
46	SB08 −123	小型甕 (土師器)	15.0	−	−	外：口−ヨコナデ 体−ハケのち指ナデ 内：口−ヨコナデ 体−ケズリ	黄褐色	～3㎜ 程度の砂粒を含む	普	風化
47	SB09 −110	甕 (土師器)	22.0		−	単純口縁 外：口−ヨコナデのち指圧痕 体−細いハケのちところどころナデ 内：口−ヨコナデのち指圧痕 体−ケズリ	外：浅黄橙色 内：にぶい黄橙色	～3㎜ 〃	良好	
48	−105	甕 (土師器)	21.0		−	単純口縁 外：口−ヨコナデ 体−細いハケのちナデ 内：口−ヨコナデ 体−ケズリ	明黄褐色	～4㎜ 〃	〃	外：スス付着
49	−108	小型甕 (土師器)	9.0	−	−	単純口縁 外：口−ヨコナデのち指圧痕 体−ハケ目 内：口−ヨコナデのち指圧痕 体−ケズリ	灰黄褐色	～2㎜ 〃	〃	
50	−107	高坏 (土師器)	−	−	−	内：ヨコナデのち指ナデ	明黄褐色	～1㎜ 〃	普	外：風化
51	−108	甕 (土師器)	−	−	−	外：太いハケ目 内：体（上）−ナデ 体（中～下）−ケズリ	にぶい黄橙色	～3㎜ 〃	良好	外：スス付着
52	SB10 −214	甕 (須恵器)	−	−	−	外：タテ、ナナメの平行タタキ目 内：同心円状のタタキ目	暗灰色	～3㎜ 〃(わずか)	〃	
53	SB11 −216	坏 (須恵器)	13.0	4.0	8.0	外：回転ナデ 底　回転ヘラおこし 内：回転ナデ	浅黄橙色	～1㎜ 〃	不良	風化
54	220	坏 (須恵器)	13.0	4.0	8.0	外：強い回転ナデ 底−回転ヘラおこしのちナデ 内：強い回転ナデ	灰色	～1㎜ 〃	普	重ね焼き跡
55	−116	坏 (土師器)	13.0	−	−	外：体上　ヨコナデ 体−多方向のハケのち指ナデ 内：体上　ヨコナデのち指ナデ 体−ケズリ	外：にぶい橙色 内：灰褐色	～2㎜ 〃	良好	内：スス付着
56	−218	大型甕 (須恵器)	−	−	−	外：ヘラによる斜目の幅広の連続線文のち横3条　1条の凹線文 内：ヨコナデ	外：灰色 内：淡灰色	～2㎜ 〃	〃	
57	SB12 13・14 −63	坏 (土師器)	12.0	5.4	−	外：ヨコナデのち指ナデ 内：ナナメ、タテ、ヨコナデのち指圧痕	にぶい黄橙色	～2㎜ 〃	〃	外・内：スス付着
58	−56	坏 (須恵器)	−	−	−	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～3㎜ 〃	〃	
59	−61	甕 (土師器)	15.0	−		外：幅広のクシ状工具のハケのちナデのち指圧痕 内：口−幅広のクシ状工具のハケのち指圧痕 体上　ケズリ	にぶい黄橙色	～1㎜ 〃	〃	外：スス付着
60	53	甕 (土師器)	18.8	−	−	単純口縁 外：口−ヨコナデ 体−ハケのちヨコナデ 内：口−ヨコナデ 体−ケズリ	明黄褐色	～2㎜ 〃	〃	
61	−56	甕 (土師器)	18.0	−	−	単純口縁 外：口−ヨコナデのち指圧痕 体−幅広のクシ状工具のハケ 内：口−ヨコナデ 体−ケズリ	明黄褐色	～3㎜ 〃	〃	外：スス付着
62	SB15 −104	壺 (須恵器)	−	−	(8合法) 9.2	外：回転ナデ 内：回転ナデのちナデ	白灰色	～2㎜ 〃	〃	貼り付け高台
63	SB16 −98	甕 (土師器)	21.0			単純口縁 外：口−ヨコナデ 体−ナナメハケのちナデ 内：口−ヨコナデ 体−ケズリ	明黄褐色	～2㎜ 〃	普	風化
64	−96	小型甕 (土師器)	13.0	−	−	単純口縁 外：口−ヨコナデ 体−ハケのちヨコナデ 内：口−ヨコナデ 体−ケズリ（？）	灰黄褐色	～2㎜ 〃	〃	風化
65	−99	甕 (土師器)	24.0	−	−	単純口縁 外：口−ヨコナデ 体−幅広のクシ状工具のタテハケ 内：口−ヨコナデ 体−ケズリ	外：明黄褐色 内：灰白色	～4㎜ 〃	良好	外：スス付着

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
66	SB16 −100	壺（上師器）	18.0	—	—	単純口縁 外：口ーヨコナデ 体ー横方向のクシ状工具のハケ 内：口　ヨコナデのち指圧痕 体ーケズリのち指圧痕	茶褐色	～5㎜程度の砂粒を含む	良好	内：スス付着
67	−101	壺（上師器）	16.0	—	—	単純口縁 外：口ーヨコナデ 内：口ーヨコナデ	明黄褐色	～2㎜ 〃	不良	外・内：体部ー風化
68	SB17 −94	甕（土師器）	36.0	—	—	単純口縁 外：口ーヨコナデ 体ー多方向のハケのちナデ 内：体ーケズリ	明褐色	～2㎜ 〃	普	口縁部は風化 古墳時代後期
69	−95	甕（土師器）	21.0	—	—	単純口縁 外：口　ナデのち指ナデ 体ーハケのちナデ 内：口ーナナメ、ヨコナデ 体　ケズリ	暗橙色	～3㎜ 〃	良好	外・内：スス付着 古墳時代後期
70	−84	甕（土師器）	27.0			単純口縁 外：口ーヨコナデのち指ナデ 体ーハケのち多方向のナデ 内：口ーヨコナデ 体　クシ状工具によるナデ	明黄褐色	～2㎜ 〃	〃	
71	−87	壺（須恵器）	16.0	—	—	単純口縁 外：ヨコナデのちハケ 内：ヨコナデ	灰色	～1㎜ 〃	〃	古墳時代
72	SB20 −83	蓋（須恵器）	—	—	—	外：多方向の平行タタキ目 内：同心円状のタタキ目	外：灰色 内：灰白色	～2㎜ 〃	〃	
73	SB22 −77	坏（土師器）	9.8	3.8	—	外：体ー回転ナデ 底　回転ヘラおこしのちヘラ工具によるナデのち指圧痕 内：体　回転ナデ 底ー回転ナデのち指ナデ	外：褐黄灰色 内：灰白色	～2㎝ 〃	〃	古墳時代後期
74	SB23 −64	坏（須恵器）	—	—	高台径 10.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰褐色	～2㎜ 〃	〃	削り出し高台
75	−65B	坏（須恵器）	—	—	高台径 8.8	外：ヨコナデのち一部にハケ 内：強い回転ナデ	外：明褐灰色 内：灰色	～2㎜ 〃	〃	貼り付け高台
76	−67B	蓋（須恵器）	19.4	—	—	外：天ー回転ヘラケズリ 縁　回転ナデ 内：強い回転ナデのち指圧痕	外：灰色 内：灰褐色	～2㎝ 〃	〃	つまみ付（?）
77	−70	小型壺（須恵器）	—	—	—	体部は最球形 外：回転ナデ 頸ー強い回転 体　1条の凹線 内：強い回転ナデ	外：灰褐色 内：青灰色	～2㎜ 〃	〃	
78	73	蓋（須恵器）	—	—	—	外：同心円状のタタキ目 内：同心円状のタタキ目	灰色	密	〃	
79	64	坏（須恵器）	23.0	3.4	19.8	外：体ー回転ナデ 底ーヘラケズリのちナデのち指圧痕 内：体ー回転ナデ 底ー強い回転ナデのちナデのち指圧痕	明褐灰色	～3㎜程度の砂粒を含む	〃	歪
80	−67−③	甕（土師器）	30.6	—	—	単純口縁 外：口　ヨコナデ 体ー太いハケ 内：風化	黄褐色	～2㎜ 〃	不良	
81	−67	甕（土師器）	37.0	—	—	単純口縁 外：口ーヨコナデ 体　ハケのちナデのち指圧痕 内：口ーヨコナデ	明黄褐色	～2㎜ 〃	普	内：風化
82	−69	甕（土師器）	21.0	—	—	単純口縁 外：口ーヨコナデ　体ータテハケ 内：口ーヨコナデ 体ーナデのち指ナデ　指圧痕 ケズリ	橙色	～3㎝ 〃	〃	外・内：スス付着
83	−67−① 床面直上	甕（土師器）	17.0	—	—	単純口縁 外：口ーヨコナデ 体　ハケ 内：口ーナデ 体ーケズリ	黄褐色	～1㎜ 〃	〃	風化 外・内：スス付着 金雲母
84	−67 B	甕（土師器）	17.0	—	—	単純口縁 外：口ーヨコナデ 体ーハケ 内：口ーヨコナデ 体ーケズリ	明黄褐色	～2㎜ 〃	〃	風化
85	−67−B	甕（土師器）	20.0	—	—	単純口縁 外：口ーヨコナデ 体ーハケのちナデ 内：口　ヨコナデ 体ーケズリ	明黄褐色	～3㎜ 〃	〃	風化

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
86	SB23－67（立替後かまど内盛土）	甕（土師器）	16.0	…	－	単純口縁 外：口－ヨコナデ 頸～体－ハケのち指ナデ 内：口　ヨコナデ 頸－ミガキ（？） 体－ケズリ	明黄褐色	～2㎜ 程度の砂粒を含む	良好	
87	－67－②床面直上	甕（土師器）	13.0	…	…	単純口縁 外：口　ヨコナデ 内：口－ヨコナデ 体－ケズリ	黄褐色	～3㎜ 〃	普	
88	SD01－117	坏（須恵器）	14.0	3.2	9.6	外：回転ナデ 底－回転ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ 底－強い回転ナデのちナデ	灰色	～2㎜ 〃	良好	
89	A（1）	甕（弥生土器）	17.0	－	－	端部は斜目上下に拡張 外：口　3条の凹線 体－ナデ 内：口－ヨコナデ 体－ケズリ	にぶい黄橙色	～2㎜ 〃	〃	Ⅳ－2
90	〃	甕（弥生土器）	18.0	－	－	端部は斜目上下に拡張 外：口－3条以上の沈線 体－クシ状工具による連続刺突文、波状文 内：口　ヨコナデ 体－ケズリ	橙色	～2㎜ 〃	〃	外：口縁部にコゲ付着 Ⅴ－1か2
91	〃	甕（弥生土器）	…	－	－	外：細いハケのち2段以上のクシ状工具（5条）による連続刺突文 内：ケズリ	灰黄色	～2㎜ 〃	〃	金雲母 Ⅳ－2
92	〃	甕（高坏）（弥生土器）	－	－	12.8	外：脚－細いハケのちナデ 端　3条の凹線 内：回転ナデ	外：浅黄橙色 内：橙色	～2㎜ 〃	〃	
93	〃	甕（弥生土器）	15.0	…	…	外：口－クシ歯状工具の押引文 体－クシ歯状工具の押引文 内：口－ヨコナデ 体－ケズリ	外：にぶい黄橙色 内：橙色	～2㎜ 〃	〃	
94	A（2）	坏（土師器）	12.4	－	－	外：タテ方向のナデ 内：ナデのち指圧痕	外：浅黄橙色 内：明赤褐色	～3㎜ 〃	〃	外・内：赤色顔料塗布
95	〃	坏（土師器）	16.0	－	－	底部は平坦 外：口－ナデ 体　ハケ 内：口　ナデ 体－ナデのちミガキ	橙色	～2㎜ 〃	〃	金雲母
96	〃	坏か埦（土師器）	17.0	－	－	外：口－ナデ 体－ハケのちナデ 内：口－ナデ 体－ナデのちミガキ	橙色	～1㎜ 〃	〃	外・内：赤色顔料塗布
97	〃	埦（土師器）	10.0	－	－	外：ナデのち指ナデ 内：ナデのち指ナデ	灰白色	～1㎜ 〃	〃	金雲母
98	〃	埦（土師器）	11.0	－	－	外：ハケのちナデ 内：ナデのち指ナデ	外：橙色 内：灰黄褐色	～1㎜ 〃	今や良	外・内：スス付着
99	〃	甕（土師器）	20.0	－	－	単純口縁 外：口　ナデのち指圧痕 頸－ハケのちヨコナデ 体－クシ状工具によるナデのち指圧痕 内：口－ナデ 体－ケズリ	外：浅黄橙色 内：橙色	～4㎜ 〃	良好	外：スス付着 古墳時代中頃
100	〃	甕（土師器）	19.0	－	－	単純口縁 外：口－ハケのちナデ 体－ハケのちナデ 内：口、頸－ナデのち指圧痕 体－ケズリ	にぶい黄橙色	～1㎜ 〃	〃	金雲母 古墳時代中頃
101	〃	甕（土師器）	22.0	－	－	単純口縁　厚手 外：口－ヨコナデ 体－ハケのちナデ　指ナデ 内：口－ヨコナデ 体－ケズリ	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	～3㎜ 〃	〃	金雲母
102	〃	甕（土師器）	16.0	…	…	如意口縁 外：口－ヨコナデ 頸－ナデのち指圧痕 体－細いハケ　指圧痕	外：淡黄色 内：にぶい黄橙色	～2㎜ 〃	〃	外：スス付着 金雲母
103	〃	把手（土師器）	－	－	－	牛角状　ナデ	橙色	～1㎜ 〃	〃	
104	〃	把手（土師器）	－	－	－	牛角状　ナデ	にぶい黄橙色	～3㎜ 〃	〃	
105	〃	把手（土師器）	－	－	－	牛角状　ナデ	浅黄橙色	～1㎜ 〃	〃	
106	A（3）	坏（須恵器）	13.0	－	－	外：回転ナデ 内：回転ナデ	青灰色	～3㎜ 〃	〃	

挿図図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
107	A (3)	坏 (須恵器)	13.3	—	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：口－青灰色 体－灰緑色 内：青灰色	～5mm 程度の砂粒を含む	良好	外：自然釉（下位）
108	〃	坏 (須恵器)	10.0	3.2	—	外：口－体－回転ナデ 底－ケズリのちナデ 内：回転ナデ	灰白色	～3mm 〃	〃	
109	〃	坏 (須恵器)	9.0	2.5	—	外：上部－ヨコナデ 下部－ケズリ 内：口－ナデ 底－指ナデ	暗青灰色	～2mm 〃	〃	
110	〃	壺 (須恵器)	—	—	—	外：回転ナデ 上－回線 下－浅い回線　連続刺突の羽状文 内：回転ナデ	外：暗青灰色 内：濃青灰色	～3mm 〃	〃	
111	〃	坏 (須恵器)	—	—	7.0	外：回転ナデ 底－回転糸切痕 内：回転ナデ	灰白色	緻密	〃	9C後～
112	〃	壺 (須恵器)	—	—	—	外：粗いケズリのちナデ 内：強い回転ナデ	外：黒灰色 内：灰白色	～3mm 程度の砂粒を含む	〃	黒い斑点様の粒子 奈良時代後期
113	〃	砲 (須恵器)	—	—	13.0	外：底－ハケのちナデ 内：回転ナデ	青灰色	密	〃	奈良時代後期
114	〃	人型壺 (須恵器)	-	—		外：ケズリのち回転ナデ 底－ナデ 内：回転ナデ	外：暗青灰色 内：灰緑色	1～3mm 程度の砂粒を含む	〃	内：自然釉 奈良時代後期
115	〃	甑様土器 (須恵器)	—	—	清台面 16.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：明灰黄色 内：灰褐色	～3mm 〃	〃	奈良時代後期
116	〃	甕 (須恵器)	—	—	—	突帯状の口縁部 外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～1mm 〃	〃	奈良時代後期
117	〃	はそう (須恵器)	—	—	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：青灰色 内：暗青灰色	～1mm 〃	〃	古式のはそう
118	〃	甕 (須恵器)	—	—	—	口縁は突帯状 外：回転ナデ 端－浅い溝 内：回転ナデ	暗青灰色	～1mm 〃	〃	奈良時代後期
119	〃	壺(?) (須恵器)	19.0	—	—	外面は突帯状で下方に突帯が巡る 外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～2mm 〃	〃	奈良時代後期
120	〃	甕 (須恵器)	22.0	—	—	口縁部は肥厚し、端部は内に折り込む 外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色 胎：にぶい褐色	～3mm 〃	〃	奈良時代後期
121	〃	甕 (須恵器)	22.0	—	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～3mm 〃	やや不良	奈良時代後期
122	〃	小型甕 (須恵器)	—	—	—	外：L R→R L 平行タタキ目のちナデ 内：花弁様タタキ目	灰色	～1mm 〃	良好	奈良時代後期
123	〃	甕 (須恵器)	-	—	—	外：R L のナナメ平行タタキ目 頸部との境－ナデ 内：カゴ底様タタキ目	灰色	～2mm 〃	〃	奈良時代後期
124	〃	甕 (須恵器)	-	-	—	外：帯目状のタチ方向のタタキ目 内：ザル底状の器具による同心円状のタタキ目	外：青灰色 内：灰青色	～2mm 〃	〃	奈良時代後期
125	〃	甕 (須恵器)	—	—	—	外：わずかにR L のナナメタタキ目 上方－ナデ 内：車輪様タタキ目 上方－ナデ	外：黄灰色 内：にぶい橙色	～1mm 〃	やや良	奈良時代後期
126	〃	甕 (須恵器)	—	—	—	外：カキ目 内：大きな車輪状タタキ目のちナデ	灰色	～1mm 〃	良好	奈良時代後期
127	〃	甕 (須恵器)	—	—	—	外：格子目のタタキ目 内：車輪様タタキ目	灰色	～4mm 〃	〃	奈良時代後期
128	〃	甕 (須恵器)	—	—	—	外：ナナメ平行タタキ目のち回転ナデ 内：車輪様タタキ目	外：黄灰色 内：にぶい褐色	～1mm 〃	〃	奈良時代後期
129	〃	甕 (須恵器)	—	—	—	外：R L ナナメタタキ目、太い縄目 内：花弁　ザル底様タタキ目	外：灰黄褐色 内：黄灰色	～1mm 〃	やや良	奈良時代後期
130	〃	甕 (須恵器)	—	—		外：タテ方向の平行タタキ目のち回転ナデ 内：車輪様タタキ目	外：灰黄色 内：にぶい黄橙色	～1mm 〃	〃	奈良時代後期
131	〃	甕 (須恵器)	—	—	—	外：タテ方向の平行タタキ目のち回転ナデ 内：車輪様タタキ目	外：灰白色 内：にぶい褐色	～1mm 〃	〃	奈良時代後期
132	〃	甕 (須恵器)	—	—	—	外：回転ナデのちタテ、ナナメの平行タタキ目 内：花弁様タタキ目	外：黄灰色 内：灰色	～2mm 〃	良好	奈良時代後期
133	A (4)	鉢 (瓦質?)	32.0	—	—	外：回転ナデのち指圧痕 内：回転ナデ（ハケ状痕）のち指圧痕	外：浅黄色 内：灰黄色 胎：黒色	～2mm 〃	〃	
134	〃	土鍋 (瓦質)	-	-	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：淡灰黒色 内：黒灰色	～2mm 〃	〃	貼り付け突帯

挿図図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
135	A (4)	直口壺(土師器系)	—	—	—	端部は尖り気味 外：ナデのち指頭圧痕 内：布目　ケズリ	にぶい黄橙色	～2㎜程度の砂粒を含む	良好	金雲母
136	〃	火鉢(瓦質)	—	—	—	外：端－浅い上下のナデ 頸－ヨコナデ　半目状の竹管文(3個) 内：ヨコナデ	外：黒灰色 内：黒色	～1㎜ 〃	やや不良	
137	〃	火鉢(瓦質)	—	—	—	外：ナデ（ミガキ？）花弁を刻む 頂－光沢をもつ 内：ヨコナデ	茶褐色	～1㎜ 〃	良好	
138	A (5)	鉢(陶磁器)	24.0	—	—	外：回転ナデ 口－焼成時に付着物 内：回転ナデのち指ナデ	灰白色	～2㎜ 〃	〃	重ね焼き跡 東播系 Ⅳ－B
139	〃	擂鉢(陶器)	—	—	—	外面は粗広の突帯状 外：回転ナデ 内：回転ナデ　擂目（4条）	外：灰褐色 内：暗灰褐色	～3㎜ 〃	〃	備前焼 15c前半
140	〃	擂鉢(陶器)	24.6（推定）	—		口縁部折り曲げて太縁状に段 外：回転ナデ 内：擂目	灰褐色	微砂粒	〃	肥前系　近世
141	〃	人皿(陶磁器)	—	—	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：暗赤灰色 内：褐灰色	緻密	〃	施釉　肥前系
142	〃	鉢(陶磁器)	—	—	14.4	底の目高台 外：回転ナデ　間入 内：回転ナデ　間入	外：灰色 内：オリーブ灰色	〃	〃	石見焼　施釉
143	〃	皿(陶磁器)	—	—	6.4	底部は平底 内：間入	明オリーブ色	〃	〃	白磁　中国製 13c
144	〃	碗(陶磁器)	—	—	高台径 4.8	高台付	オリーブ灰色	〃	〃	青磁　龍泉系 12c中～13c中
145	〃	碗(陶磁器)	—	—	—	外：削り出し鎬連弁文　間入 内：間入	黄褐色	〃	〃	青磁　龍泉系 12c中～13c中
146	〃	碗(陶磁器)	14.0	—	—	外：間入 内：間入	オリーブ灰色	〃	〃	青磁　15c
147	〃	碗(陶磁器)	16.0	—	—		オリーブ灰色	〃	〃	青磁　15c
148	〃	青炉(陶磁器)	—	—	—		オリーブ灰色	〃	〃	青磁　中国製
149	〃	碗(陶磁器)	—	—	高台径 4.6	高台付 外：1重線文　間入 内：3重線文　間入	明緑灰色 胎：黄色 文：藍色	〃	〃	青花　染付　中国製 16c後～17c 貼り付け高台
150	〃	碗(陶磁器)	—	—	高台径 4.6	高台付 外：間入 内：間入	灰色	〃	〃	朝鮮　施釉 削り出し高台
151	〃	碗(陶磁器)	—	—	高台径 4.6	高台付 外：間入 内：間入	灰白色	密	〃	朝鮮　施釉 削り出し高台
152	〃	碗(陶磁器)	—	—	高台径 4.4	外：体－植物、石、文様　1重線文 高　2重線文 底－1重線文	灰白色 文：藍色	緻密	〃	伊万里　施釉
153	〃	碗(陶磁器)	12.0	—		内：口－四方襷文	外：オリーブ灰色 内：灰白色 文：藍色	〃	〃	伊万里系 施釉
154	〃	埦(陶器)		—	高台径 4.8	高台付　見込み部分に胎土目	胎：灰白色 釉：淡黄茶色	密	〃	瀬戸交趾　施釉 削り出し高台
155	〃	埦(陶器)	—	—	高台径 4.5	高台付 内：見込み部分に胎土目	にぶい黄橙色 釉：明青灰色	〃	〃	唐津　施釉 削り出し高台 16c後～17c前
156	B	壺(須恵器)	14.0	3.3	ヘラミガ径 6.0	外：天井～体中－ケズリ 体中～口－回転ナデ 内：回転ナデ	外：暗緑色 内：灰白色	1～5㎜程度の砂粒を含む	〃	輪状つまみ 重ね焼き跡 （灰白色）
157	〃	坏(須恵器)	10.0	3.5	5.6	外：回転ナデ 底　回転ヘラおこし 内：回転ナデ 底－ハケ状工具によるナデ	緑灰色	～2㎜ 〃	〃	ほぼ完形
158	〃	坏(須恵器)	13.0	4.0	9.4	外：回転ナデのちナデ 内：回転ナデのちナデ	灰色	～2㎜ 〃	〃	
159	〃	坏(須恵器)	15.0	3.9	10.4	外：回転ナデ 底－回転ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ 底：強い回転ナデ	暗灰色	～3㎜ 〃	普	重ね焼き跡
160	〃	甕(須恵器)	—	—	—	外：R L、上下方向の平行タタキ目 下方－ナデ消し 内：同心円状のタタキ目	外：灰色 内：灰白色	～2㎜ 〃	やや不良	自然釉
161	〃	土錘(土師器)	(長さ) 4.2	(幅) 1.8	—		にぶい黄橙色	～1㎜ 〃	普	
162	C	坏(土師器)	12.0	5.3	—	内：ナデ	明黄橙色	～2㎜ 〃	不良	風化
163	〃	坏(須恵器)	—	—	ヘラミガ径 8.6	外：回転ナデ 底　回転ヘラおこしのナデ 内：回転ナデ 底－回転ナデのちナデ	灰色	～1㎜ 〃	良好	貼り付け高台

前区SD01遺物番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
164	C	壺(須恵器)	—	—	11.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：無い回転ナデ	灰色	～3㎜程度の砂粒を含む	良好	貼り付け高台
165	〃	壺(須恵器)	—	—	—	外：KL、LKの平行タタキLをナデ消す 内：2種類の平滑横ナデ+L	灰色	～1㎝〃	〃	
166	〃	高杯(須恵器)	—	—	—	外：上一回転ナデ 中一ジボリ痕 下一2条の凹線 内：回転ナデ	暗灰色	～2㎜〃	〃	古墳時代末
167	〃	壺(須恵器)	—	—	つまみ径4.0	外：回転ナデ　つまみ部分は指ナデ 内：強い回転ナデ	灰褐色	～1㎜〃	〃	擬宝珠状つまみ 7c後半
168	〃	鉢(須恵器)	10.0	—	—	外：回転ナデ 上一1条の沈線 中一2条の沈線 内：回転ナデ	灰色	～1㎜〃	〃	7c～8c
169	〃	脚(須恵器)	—	—	10.0	外：強い回転ナデ 内：強い回転ナデ	灰色	～1㎜〃	〃	上部に載せる容器は不明 7c～8c
170	〃	鍋(陶製器)	13.0	—	—		黒茶褐色	緻密	〃	天目　瀬戸天満
171	〃	壺(土師器)	26.6	—	—	外：タテハケのちヨコナデのち指ナデ 内：LIーハケのち指ナデ 体　ケズリ	外：灰褐色 内：暗橙色	～5㎜程度の砂粒を含む	〃	
172	〃	壺(陶製器)	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：暗茶褐色 内：黒褐色	2～3㎜〃	〃	備前
173	〃	鍋(陶製器)	—	—	—	外：削り出し高台　同人 内：同人	オリーブ灰色	緻密	〃	平尾 瓶子 3：窯 12c 中～13c 中
174	〃	火鉢(瓦質)	—	—	—	外：2条の線文の間に文様 内：ナデのち強ナデ	灰白色	密	〃	
175	D	壺(須恵器)	17.0	3.1	つまみ径6.4	外：天一ケズリ 回転ナデ　つまみ内に爪状の調整痕 内：回転ナデ	褐灰色	～2㎜程度の砂粒を含む	〃	光形品 貼り付け輪状つまみ
176	〃	蓋(須恵器)	17.0	3.2	つまみ径6.0	外：回転ナデ　つまみ内に爪状の調整痕 内：回転ナデ	灰色	～2㎜〃	〃	貼り付け輪状つまみ
177	〃	蓋(須恵器)	16.0	2.3	つまみ径6.0	外：回転ナデのちナデ 内：回転ナデのちナデ	灰色	～2㎜〃	〃	貼り付け輪状つまみ
178	〃	蓋(須恵器)	16.0	3.1	つまみ径5.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～2㎜〃	〃	貼り付け輪状つまみ
179	〃	蓋(須恵器)	14.0	2.8	つまみ径6.2	外：回転ナデ　つまみ内に爪状の調整痕 内：回転ナデ	灰色	～1㎜〃	〃	貼り付け輪状つまみ
180	〃	蓋(須恵器)	13.0	2.7	つまみ径5.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～3㎜〃	〃	貼り付け輪状つまみ
181	〃	蓋(須恵器)	13.5	2.8	つまみ径5.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～2㎜〃	〃	貼り付け輪状つまみ スス付着
182	〃	蓋(須恵器)	14.4	2.1	つまみ径5.8	外：回転ナデ　つまみ内に爪状の調整痕 内：回転ナデ	灰色	～5㎜〃	〃	貼り付け輪状つまみ
183	〃	蓋(須恵器)	14.6	3.6	つまみ径6.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：灰白色 内：黄灰色	密	不良	貼り付け輪状つまみ 5/8残存 SD8と接合 SD8出土
184	〃	坏(須恵器)	13.6	4.4	—	外：回転ナデ 底　ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ　端部直下に浅い凹線状の回転痕	灰白色	～2㎜程度の砂粒を含む	やや不良	壊れ焼き跡
185	〃	坏(須恵器)	15.0	4.1	9.0	外：回転ナデ 底ーヘラおこし 内：回転ナデ 底ー調整状の調整痕	灰白色	～1㎜〃	〃	
186	〃	坏(須恵器)	13.9	3.5	9.3	外：回転ナデ 底ーヘラおこし 内：回転ナデ 底ー強いナデ	灰色	～1.5㎜〃	〃	
187	〃	坏(須恵器)	13.6	4.2	9.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底　強いナデ	灰褐色	～1㎜〃	〃	
188	〃	坏(須恵器)	13.4	4.2	9.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底ー強いナデ	灰白色	～2㎜〃	〃	
189	〃	坏(須恵器)	14.5	3.9	9.0	外：回転ナデのちナデ 内：回転ナデ 底ー強いナデ	黄褐灰色	～2㎜〃	〃	風化
190	〃	坏(須恵器)	13.2	4.2	8.4	外：回転ナデ 底ーヘラおこし 内：回転ナデ	外：灰色 内：灰白色	～2㎜〃	〃	重ね焼き跡
191	〃	坏(須恵器)	13.0	3.7	8.5	外：回転ナデのちナデ 内：回転ナデのちナデ	灰白色	～3㎜〃	〃	重ね焼き跡
192	〃	坏(須恵器)	13.0	3.2	7.9	外：回転ナデのちナデ 内：回転ナデのちナデ	灰白色	微砂粒	〃	風化

時間関係番号	山土地点	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎上	焼成	備考
193	D	坏（須恵器）	13.8	3.8	10.0	外：回転ナデ 底－ヘラおこし 内：回転ナデ 底－強いナデ	灰白色	～1.5mm 程度の砂粒を含む	やや不良	
194	〃	坏（須恵器）	13.2	4.2	8.8	外：回転ナデ 底－ヘラおこし 内：回転ナデ 底　渦巻状のナデ痕	外：灰色 内：灰白色	微砂粒	〃	
195	〃	坏（須恵器）	13.0	4.0	9.4	外：回転ナデ 底－ヘラおこし 内：回転ナデ 底－渦巻状のナデ痕	灰白色	～1mm 程度の砂粒を含む	〃	
196	〃	坏（須恵器）	12.4	3.8	9.0	外：回転ナデ 底－ヘラおこし 内：回転ナデ 底－渦巻状のナデ痕	灰白色	～1mm 〃	〃	重ね焼き跡 完形品
197	〃	坏（須恵器）	13.0	4.4	9.0	外：回転ナデ 底　ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ 底－渦巻状のナデ痕	灰白色	～1mm 〃	〃	重ね焼き跡
198	〃	坏（須恵器）	13.4	3.8	9.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白色	～1mm 〃	〃	
199	〃	坏（須恵器）	12.8	3.9	8.2	外：回転ナデ 底－焼成後の穿孔 内：回転ナデ	灰色	～1.5mm 〃	〃	内：黒くすすける
200	〃	坏（須恵器）	12.4	4.2	8.4	外：回転ナデ 底－ヘラおこし 内：回転ナデのち指ナデ	灰色	～1mm 〃	良好	貼り付け高台
201	〃	坏（須恵器）	12.4	4.5	8.8	外：回転ナデのち指ナデ 底－回転ナデのちナデ 内：回転ナデのち指ナデ	灰白色	～1mm 〃	〃	貼り付け高台
202	〃	坏（須恵器）	13.6	4.4	9.4	外：回転ナデ 底－回転ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ	灰色	～2mm 〃	〃	貼り付け高台
203	〃	坏（須恵器）	11.8	4.9	8.6	外：回転ナデ 底－爪状の調整痕 内：回転ナデ	明青灰色	～1.5mm 〃	〃	貼り付け高台
204	〃	坏（須恵器）	12.0	4.6	8.7	外：回転ナデ 底－強い回転ヘラおこし 内：回転ナデのち指ナデ	灰色	～2mm 〃	〃	貼り付け高台
205	〃	坏（須恵器）	11.4	4.6	8.2	外：回転ナデ 底－ヘラおこし 内：回転ナデ	灰色	～2mm 〃	〃	貼り付け高台 内：自然釉付着
206	〃	坏（須恵器）	12.4	4.7	9.8	外：回転ナデ 底－回転ヘラおこしのちナデ 内：回転ナデ（人念）	暗灰色	～2mm 〃	〃	貼り付け高台
207	〃	坏（須恵器）	11.0	4.1	9.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底－指ナデ	青灰色	～2mm 〃	〃	貼り付け高台
208	〃	鉢？（須恵器）	－	－		外：回転ナデのち指ナデ 底　2ヶ所の頑湿孔 内：回転ナデのち指圧痕	灰色	～1mm 〃	〃	
209	〃	硯（須恵器）	－	－	－	外：強い回転ナデ 内：回転ナデ	灰色	～3mm 〃	〃	
210	E i）	壺（弥生上器）	22.0	－	－	外：口端－3条の凹線 頸－ヨコナデ 体－多方向のハケのちナデ 内：口－ヨコナデ 体－ケズリ	にぶい黄橙色	～2mm 〃	〃	
211	〃	壺（弥生十器）	16.0		－	外：口－3条の凹線 体－ヘラ工具による"ノ"字状の連続刺突文 内：口　ナデ 体－ケズリ	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	～2mm 〃	〃	外、内：スス付着
212	〃	壺（弥生十器）	16.0		－	外：口－4条の平行曲線 頸－ナデ 内：口～頸－ナデ 体　ケズリ	外：浅黄橙色 内：橙色	～2mm 〃	〃	わずかに金雲母 外：スス付着
213	〃	壺（弥生土器）	21.0	－	－	外：口－7条の凹線のちナデ 頸～体－ナデ 内：口－強いナデ 体－ケズリ	外：にぶい黄橙色 内：浅黄色	～1mm 〃	やや不良	風化　金雲母 V－2～3
214	〃	壺（弥生十器）	－			外：6条の太い平行沈線の上下に半円の同心円文2重円弧文 内：ミガキ	灰黄褐色	～1mm 〃	良好	IV類
215	E ii）	壺（上師器）	20.0	－	－	単純口縁 外：口－ナデ 体－ハケのちナデ 内：口－ナデ 体　ケズリのち指圧痕	外：橙色 内：にぶい黄橙色	～2mm 〃	やや不良	風化　金雲母

挿図図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
216	E ii)	壺(土師器)	19.4	—	—	如意口縁 外：口ーナデのちハケのち指圧痕 体ーハケ 内：口ーハケのちナデ 体ーケズリ	外：浅黄色 内：にぶい黄橙色	～2㎜程度の砂粒を含む	良好	スス付着 金雲母
217	〃	壺(土師器)	14.0	—	—	単純口縁 外：口ーナデのち指圧痕 体ー多方向のハケ 内：口ーナデ 体ーケズリ　指圧痕	黄橙色	～1.5㎜ 〃	〃	スス付着
218	〃	壺(土師器)	18.0	—	—	単純口縁 外：口ーヨコナデ　指圧痕 体ー多方向のハケ　指圧痕 内：口ーナデ 体ーケズリ	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	～3㎜ 〃	〃	スス付着 金雲母
219	〃	壺(土師器)	16.0	—	—	単純口縁 外：口ーナデのち指圧痕 体ー多方向のハケ 内：口ーナデのち指圧痕 体ー粗いケズリ	外：灰褐色 内：にぶい黄橙色	～3㎜ 〃	〃	外：スス付着
220	〃	壺(土師器)	22.0		—	如意口縁 外：口ーヨコナデのち指圧痕 体ーハケのちナデ 内：口ーヨコナデ 体ーケズリ	暗灰色	～2㎜ 〃	〃	金雲母
221	〃	甕(土師器)	8.4	7.7	4.0	外：指ナデ　指圧痕 内：ケズリのちナデ	褐灰黄色	～2㎜ 〃	〃	
222	〃	鉢(土師器)	12.0	—	—	端部は平坦 外：多方向のハケのち指圧痕 内：ナデのち指圧痕	橙色	～1㎜ 〃	やや不良	
223	〃	瓶(土師)	21.0	—	—	牛角状の把手付属 外：ナデ 内：ケズリのちナデ(入念)	外：橙色 内：明赤褐色	～1㎜ 〃	良好	内：スス付着
224	〃	焙烙(土師)	17.0	—	—	内：ミガキ(?)	橙色	～2㎜ 〃	やや不良	風化
225	〃	鍋(土師)	—	—	—	穿孔あり 外：ハケ 内：ケズリ　指圧痕	橙色	～2㎜ 〃	良好	金雲母
226	〃	鍋(土師)	—	—	—	外：口ーヨコナデ 体ータタキ 内：口ーヨコナデ 体ーケズリ	外：浅黄橙色 内：黄灰色	～1㎜ 〃	やや不良	
227	〃	把手(土師)	—	—	—	瘤状把手	赤褐色	～1㎜ 〃	良好	
228	〃	把手(土師)	—	—	—	牛角状把手	にぶい黄橙色	～1㎜ 〃	〃	
229	〃	把手(土師)	—	—	—	牛角状把手	浅黄橙色	～1㎜ 〃	〃	
230	〃	製塩土器(土師器)	21.4	—	—	外：口ーヨコナデ 体ー平行タタキ目 内：口ーヨコナデ 体ーナデ	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	～4㎜ 〃	〃	玄界灘式か?
231	〃	土錘(土師器)	(長さ) 6.3	(幅) 2.25	—		にぶい黄橙色	～1㎜ 〃	普	
232	〃	釘状土製品(土師器)	(長さ) 4.8	(幅) 0.3	—		橙色	～1㎜ 〃	良好	鵜尾の釣か?
233	〃	釘状土製品(土師器)	(長さ) 4.8	(幅) 2.1	—		にぶい橙色	～1㎜ 〃	〃	鵜尾の釣か?
234	E 面)	蓋(須恵器)	16.0	3.5	—	外：太ーケズリ 回転ナデ 内：回転ナデ	青灰色	1～2㎜ 〃	〃	黒点状の粒
235	〃	蓋(須恵器)	17.0	2.5 つまみ部 6.5	—	外：太ーケズリ 回転ナデ 内：回転ナデ	暗青灰色	1～2㎜ 〃	〃	貼り付け輪状つまみ 焼成時の歪み
236	〃	蓋(須恵器)	18.0	3.0 つまみ部 7.4	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ(入念)	外：淡灰色 内：明灰褐色	1～2㎜ 〃	〃	貼り付け輪状つまみ
237	〃	坏(須恵器)	12.5	4.2	7.0	外：回転ナデ 底ー回転ヘラ切り痕 内：回転ナデ	灰白色	0.5～1㎜ 〃	〃	
238	〃	坏(須恵器)	—	—	7.6	外：回転ナデ 底ーヘラおこしの過程が明瞭に残る 内：回転ナデ 底　指ナデ状の凹部あり	青灰色	～1㎜ 〃	〃	貼り付け高台
239	〃	坏(須恵器)	12.0	5.0	7.0	外：回転ナデ(入念) 底ー回転糸切り痕 内：回転ナデ	青灰色	1㎜微砂粒	〃	
240	〃	坏(須恵器)	—	—	6.9	外：回転ナデ 底ー回転糸切り痕 内：回転ナデ	外：青灰色 内：淡青灰色	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	大型古墳遺跡に類品

図版番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
241	E区	坏（須恵器）	—	—	11.0	外：回転ナデ　底－回転糸切り痕 内：回転ナデ	淡青灰色	微砂粒	良好	
242	〃	坏（須恵器）	—	—	9.7	外：回転ナデ　底－回転糸切り痕のち 内：回転ナデ	外：暗灰白色 内：灰白色	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	貼り付け高台
243	〃	皿（須恵器）	14.0	2.4	8.0	回転盤 外：口－体－回転ナデ（人念）　底－回転糸切り痕のち一部ナデ 内：回転ナデ	青灰色	1～3㎜ 〃	〃	
244	〃	蓋（須恵器）	—	—	—	外：上－多条の平行沈線　下－太い沈線で廻す 内：回転ナデ	外：暗灰色 内：灰色	1～2㎜ 〃	〃	
245	〃	壺（須恵器）	—	—	—	外：回転ナデのちナデ 〃 内：回転ナデ	灰色	1㎜ 〃	〃	奈良時代
246	〃	壺（須恵器）	—	—	—	外：回転ナデ　回転盤を強く当てて沈線とする 内：強い回転ナデ	白灰色	1～2㎜ 〃	〃	搬入品か？
247	〃	甕（須恵器）	—	—	—	外：回転ナデ　凹－1条の凹線 内：回転ナデ	灰色	密 〃	〃	奈良時代
248	〃	硯（？）（須恵器）	—	—	—	外：回転ナデ　上下位に2条の凹線 内：回転ナデ	外：青灰色 内：暗青灰色	1～2㎜程度の砂粒を含む 〃	〃	奈良時代
249	〃	甕（須恵器）	25.0	—	—	外：口、頸－回転ナデ　タタキ目のち回転ナデ 内：口、頸－回転ナデ　同心円状のタタキ目	外：灰青色 内：灰白色	1～5㎜ 〃	〃	
250	〃	甕（須恵器）	—	—	—	外：上下方向の平行タタキ目　回転ナデ 内：同心円状のタタキ目	灰色	〜2㎜ 〃	〃	
251	〃	甕（須恵器）	—	—	—	外：タテ方向の平行タタキ目 内：車輪様のタタキ目	外：灰黄色 内：にぶい黄橙色	〜1㎜ 〃	やや不良	
252	〃	甕（須恵器）	—	—	—	外：上下方向の平行タタキ目　下　回転ナデ 内：同心円状のタタキ目	灰色	〜1㎜ 〃	良好	
253	〃	甕（須恵器）	—	—	—	外：ナデ 内：青海文護　同心円状の2種類のタタキ目	灰色	〜1㎜ 〃	〃	
254	〃	甕（須恵器）	—	—	—	外：R L の平行タタキ目　回転ナデ 内：同心円状上のタタキ目のちナデか？	外：暗灰色 内：褐灰色	〜1㎜ 〃	〃	
255	〃	甕（須恵器）	—	—	—	外：R L →ト→ L R の平行タタキ目を重ねのち回転ナデ 内：タタキ目をナデ消す	黄灰色	〜1㎜ 〃	やや不良	外：白然釉
256	〃	甕（須恵器）	—	—	—	外：タテ方向の太い平行タタキ目 内：同心円状のタタキ目　ナデ	外：灰白色 内：灰色	〜2㎜ 〃	〃	
257	〃	甕（須恵器）	—	—	—	外：タテ方向の平行タタキ目 内：ザル底のタタキ目	黄灰色	〜1㎜ 〃	〃	

挿図図版番号	出土地点	器種	法量(cm)				材質	備考
			器長	器幅	器厚	重量(kg)		
258	E iv)	鞍 (須恵器)	−	−	−	−	石	
259	〃	磨石 敲石?	11.9	9.3	8.5	1,230		敲打痕
260	〃	凹み石か?	13.5	12.1	2.8	660		浅い凹み
261	〃		2.15	1.8	0.4	1.9		
262	〃	砥石	15.9	6.8	4.8	190		線状痕
263	〃	鋤・鍬先? (鉄器)	10.4	6.2				短冊状の鉄板
264	〃	鉄鏃 (鉄器)						
265	〃	刀子(?) (鉄器)						
266	〃	鎌 (鉄器)						着柄部が刃部に対して直角に折れる
267	〃	鎌 (鉄器)						着柄部は端部を斜めに折り曲げる 鈍角着柄のナタ鎌 (払い鎌)
268	〃	刀子 (鉄器)						
269	〃	梭形滓(?)						
270	〃	流動滓						刺突痕

第5章 ま と め

第1章から第4章に分けて記述してきた天蔵寺・寺の前遺跡についてその特徴的な様相と事象について以下にまとめをしておく。

1．遺跡の立地・規模・時期について

天蔵寺・寺の前遺跡は井原川右岸の河岸段丘上にあり、その範囲は東西約300m、南北約400mに及ぶと考えられ、規模の点では於保知盆地内でも最大級の遺跡とすることができよう。時期的には、検出された遺構と出土遺物から弥生時代中期を始発として古代から中・近世に至る長大な期間にわたり継続的に営まれた遺跡といえる。とくに、古代（奈良時代）の遺跡としては、その構造・規模・性格の面で石見町域はもちろん、周辺に類を見ない規模と特徴を有しており、江の川流域を中心とした石見中山間地域における古代史の検討に欠かせない遺跡とすることができよう。

2．検出された遺構について

天蔵寺区においては緩斜面から中・近世古墓2基の他ピット等の遺構群が検出された。出土遺物からすると現在の境内付近に弥生時代から中・近世に集落等が営まれた様子がうかがえた。今回の発掘区域は川沿いの段丘平坦面と天蔵寺境内一帯の間のいわば緩衝地帯的な場所として存在したことが考えられよう。

寺の前区からは住居址23棟、掘立柱建物跡16棟以上を検出することができた。時期のほぼ明確な住居址は弥生時代中期後葉のものが1棟、後期のものが1棟以上、古墳時代のものが5棟以上、奈良時代前半期が1棟、奈良時代後半期のものが10棟である。弥生時代の住居址は例数が少なく、出土土器量も乏しいので小規模集落が短期間存在したと推定しておく。古墳時代の住居址は調査区域の東よりに密集している。互いに重複し、出土土器にも古墳時代前半期に属するもの、明らかに後期の須恵器等が散見されるので古墳時代の全時期に安定的に集落が継続したと思われる。奈良時代に属する住居址は調査区域の中央から南西にかけて存在し、SB－06～08、SB－09～11のように位置を少しずらしながら重複する例があるので時代の中でも変遷のあったことが想定される。

掘立柱建物については1号が東寄りに位置する以外は調査域の西半分に集中していた。これらは、10号、11号の廂のような付設構造物を有する建物を中心にきわめて計画的に建設されたことが知られる。とくに、3号、4号、5号、16号の建物は間口ラインを南北に揃え、建物間も1.5～2.0mの間隔を保っている。おそらく、10号、11号が本殿的建物で2号～7号、16号を脇殿的建物として配置した南面開きの官衙的集落が復元される。この南面する一群の建物とは90度方向を異にする13号～15号の建物群が西寄りで顔を出している。さらに西側の町営住宅付近に中心を置く建物群が存在した可能性も高い。この西端群と南面群との併行・前後関係は不明であるが、南面群にも10号と11号、6号と7号の重複に見られるように明らかに変遷のあったことが判明する。それがいかなる理由によるかは皆目不詳であるが、掘立柱建物が先行する住居を解体・廃棄して造立された気配のあることや出土土器等の遺物に奈良時代後半期のものが大量に存在することなどから比較的短期間に

大規模な建て直しの行なわれたことが考えられる。

3．出土遺物について

出土遺物では弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器の他に製鉄関連遺物等の存在が注目された。弥生土器は天蔵寺区と寺の前区合わせても数点で、これらから井原地区での本遺跡の占める位置を想定することはできない。同じく古墳時代の遺物についても土器以外のものには接しえなかったので詳細は語りえないことになる。刮目されるのは奈良時代後半期を中心とする時期の土器、とくに須恵器の量と器種の豊富さである。蓋坏類では明らかに製法のことなるものが存在した。例えば「窯地」からえられた多くの蓋坏は焼成がやや甘く、坏外面に重ね焼きの痕が明瞭に残っていて特定の窯から一括して供給された様子がうかがわれたところである。壺・甕類のバラェティーの多いことや須恵器の円面硯の出上等にも本遺跡の性格の一端が表われている。

古代末から中世の輸入陶磁器類が少なからず出土したことも注意すべきであろう。碗皿類に加えて香炉が得られたことは中世期にあっても本遺跡が地域の中核的な集落として存在したことを物語っている。これらの遺物を伴なう遺構は未検出であるが、将来さらに周辺域を精査し、背後の山城の調査等も併せて本遺跡を位置づけることが望まれる。

4．全体として

邑智郡石見町井原所在の天蔵寺・寺の前遺跡について、これが奈良時代後半頃に最盛期をもつ官衙的集落であり、その前史と後史も連続的に辿れる稀有の遺跡であることを明らかにした。顧みると、多額の調査費と人力を投じた発掘事業であったが、調査者の経験不足と非力、多事多忙の職務等々のために遺跡がもつ諸側面を正確に把握することができなかった。とりわけ、地層の把握と記録、住居址構造細部の認識と記録において欠けることが多かったことは遺憾の極みであり、深く反省するところである。願わくは、本書を紐解かれる諸賢の寛容で深い洞察によって欠の補われんことを期すところである。

末筆で恐縮であるが、発掘指導、本書刊行に甚大な御支援と御協力いただいた各位に深甚の謝意を申し上げる次第である。

参考文献

松本岩雄他『弥生土器の様式と編年－山陰・山陰編－』1992年、木耳社.
大谷晃二「山陰地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11、1994年.
島根県教育委員会編『石見空港建設予定地内遺跡・埋蔵文化財発掘調査報告書』1992年.
島根県教育委員会編『一般国道9号江津道路建設予定地内・埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 鹿伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窯跡－』1995年.
日本貿易陶磁器研究会編『中世後期における貿易陶磁器の様相』2002年.
大和村教育委員会編『江の川宅地等水防災対策事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書・郷上遺跡』1995年.

図　　版

図版　I

天蔵寺・寺の前遺跡の俯瞰
（点線で囲った箇所が遺跡、左手の丘陵が中山丘陵）

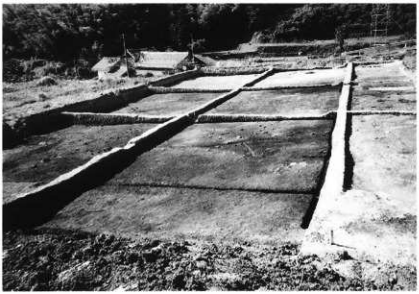
1．遺跡の近景
（西方より）

2．遺跡の遠望
（西方より）

3．寺の前区全景
（発掘前・東方より）

図版　Ⅲ

1．天蔵寺区全景
（発掘前・南方より）

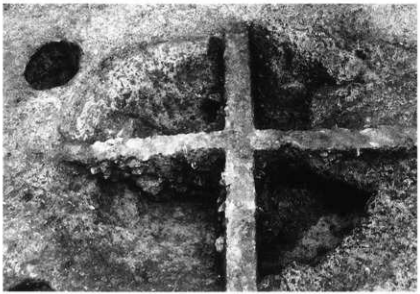


2．天蔵寺区発掘風景
（耕作土除去後）

3．天蔵寺区発掘風景
（南西部の遺構検出作業）

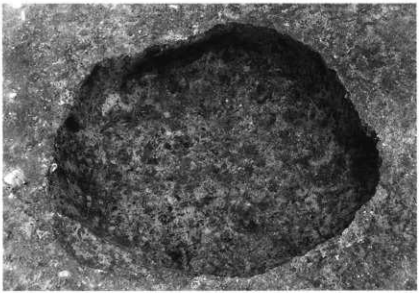
1．天蔵寺区東部で検出された遺構群
（左手の大型土抗ＳＫ－03）

2．天蔵寺区山手の中央部で検出されたピット群
（北方より）



3．天蔵寺区ＳＫ－03

図版　V



1．天蔵寺区ＳＫ－01

2．天蔵寺区ＳＫ－02の墳丘上に敷き詰められた石

3．天蔵寺区ＳＫ－02

1．寺の前区発掘風景
（耕作土除去遺構確認
東方より）

2．寺の前区発掘風景
（耕作土除去遺構確
認北東方より）

3．寺の前区発掘風景
（耕作土除去遺構確認
北方より）

図版 Ⅶ

1．寺の前区発掘風景
（耕作土除去遺構確認
東方より）

2．寺の前区ＳＢ－02
（西方より）

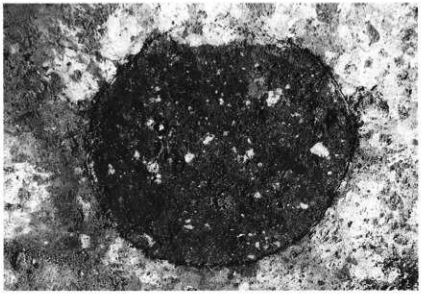
3．寺の前区ＳＢ－04
（東方より）

1．寺の前区密集状態で検出された土器群
（ＳＢ－10・11付近）

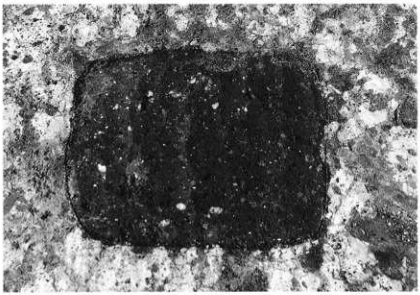
2．寺の前区掘立柱建物跡
（10号・11号・14号・15号東北より左上の土抗＝ＳＫ－01）

3．寺の前区掘立柱建物跡
（10号・11号・14号・北方より）

図版　Ⅸ



1．寺の前区掘立柱建物跡の円形柱穴の検出状況



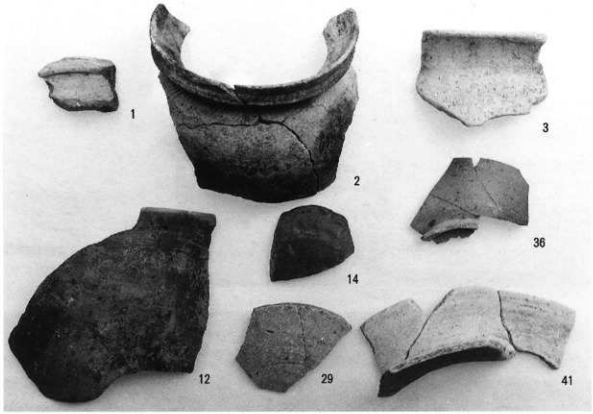
2．寺の前区掘立柱建物跡の長方形柱穴の検出状況

3．寺の前区遺構検出後の全景（東方より人が立っているのは掘立柱建物跡3号・4号）

1．寺の前区掘立柱建物跡
10号・11号（北方より）

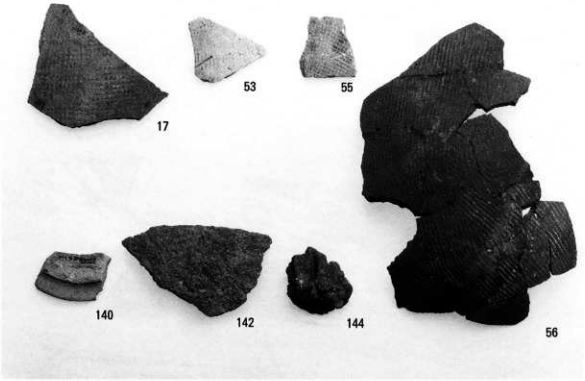
2．寺の前区現地見学会
（町内小学生対象説
明会の風景）

3．寺の前区遺構保存作業
風景（真砂で遺構を被
服する）

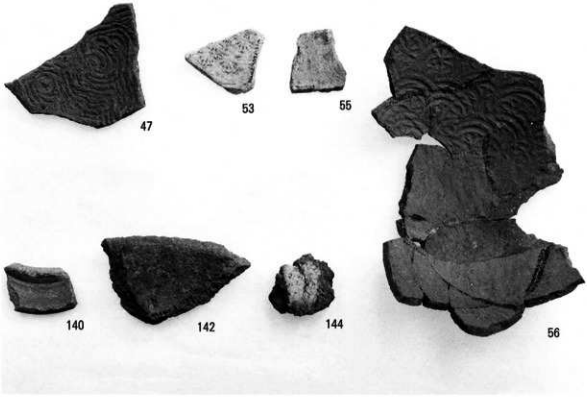


（外面）

天蔵寺区出土遺物（その１）　（内面）



（外面）



天蔵寺区出土遺物（その２）　（内面）

（外面）

天蔵寺区出土遺物（その３）　（内面）

（外面）

寺の前区出土遺物（その１）　（内面）

2

5

9

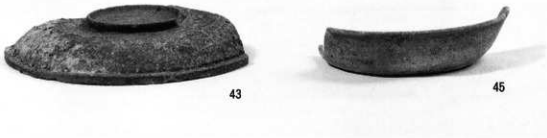
11

12

30

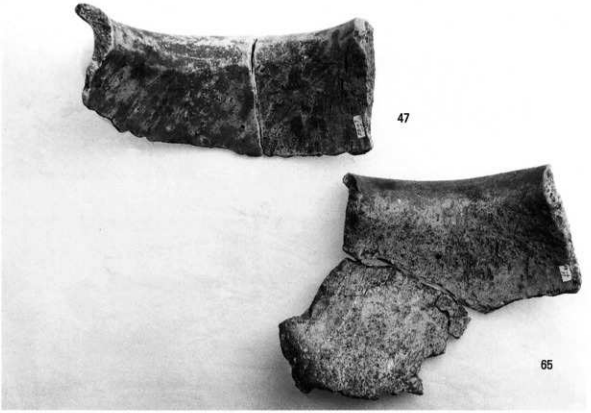
31

寺の前区出土遺物（その２）

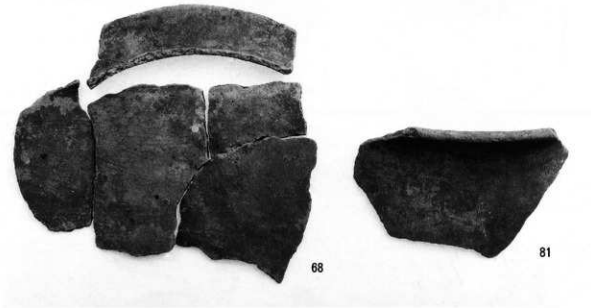


寺の前区出土遺物（その３）

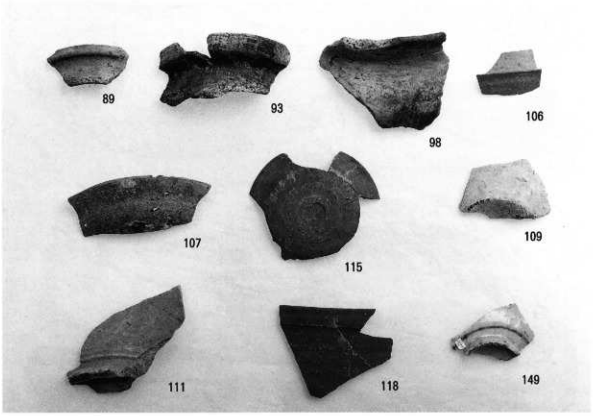
（外面）



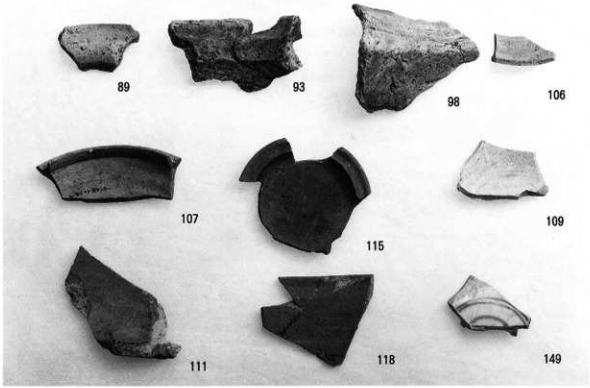
寺の前区出土遺物（その４）　（内面）



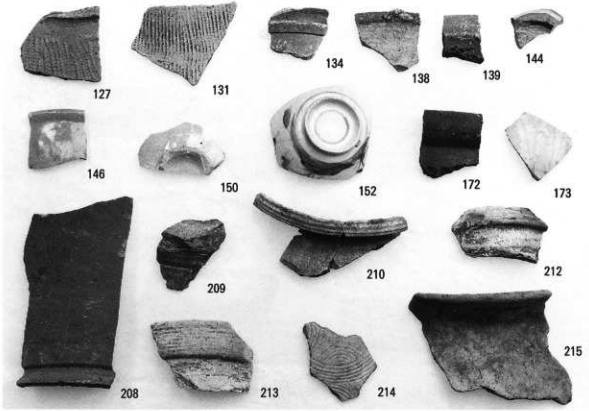
寺の前区出土遺物（その５）



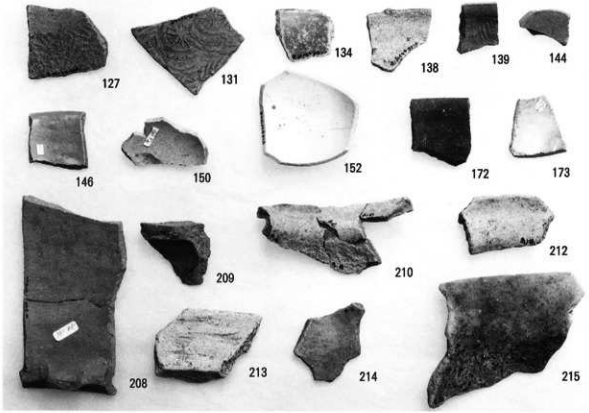
（外面）



寺の前区出土遺物（その６）　（内面）



（外面）



寺の前区出土遺物（その７）　（内面）

175

180

184

194

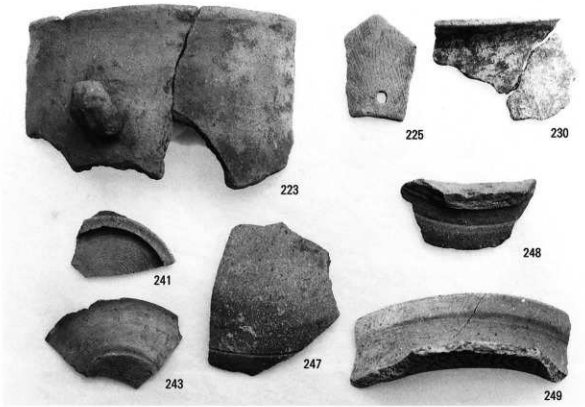
202

207

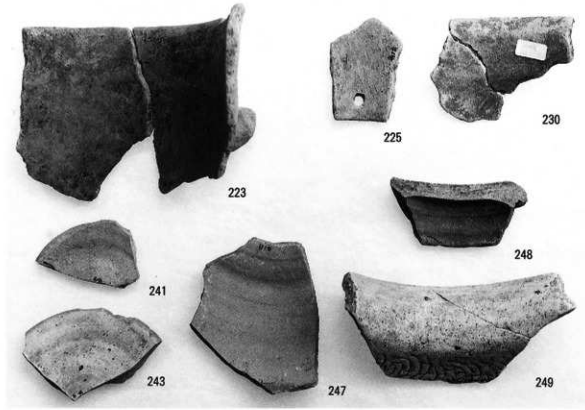
222

221

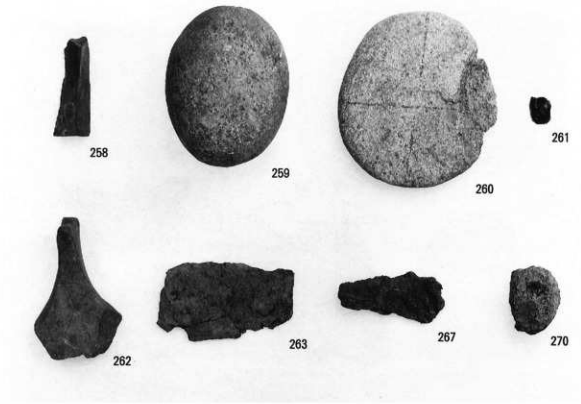
寺の前区出土遺物（その８）



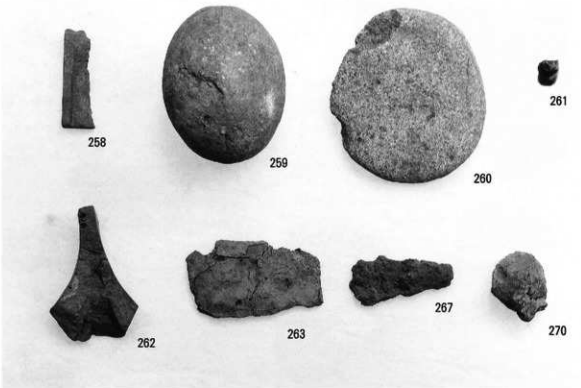
（外面）



寺の前区出土遺物（その９）　（内面）



（外面）



寺の前区出土遺物（その10）　（内面）

報告書抄録

ふりがな	てんぞうじ・てらのまえいせき
書名	天蔵寺・寺の前遺跡
編著者名	田中義昭・大橋 覚・原 拓矢
編集機関	石見町教育委員会
所在地	〒696－0103 島根県邑智郡石見町大字矢上6000
発行年月日	西暦2004年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
天蔵寺・寺の前遺跡	島根県 邑智郡 石見町 大字井原		J－30			1999.9 ～ 2000.8	18,000㎡	農業基盤整備促進事業・因幡整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天蔵寺・寺の前遺跡	集落 古墓	古墳時代 奈良時代	竪穴住居址 23棟 掘立柱建物跡 16棟 古墓 2基	土師器・須恵器（古墳時代・古代） 中・近世陶磁器 弥生土器	寺の前区については計画変更して遺構を保存

石見町文化財調査報告書　第18集
基幹整備促進平楽井原南地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

天蔵寺・寺の前遺跡

発　行　2004年3月
編　集　石見町教育委員会
〒696-0192
島根県邑智郡石見町大字矢上6000番地
TEL（0855）95-1210
印　刷　柏村印刷株式会社